

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第11集

赤岩遺跡 I

畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査1

平成24年6月

常陸大宮市教育委員会

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第11集

あか いわ い せき
赤 岩 遺 跡 I

畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査1

平成24年6月

常陸大宮市教育委員会



調査区全景 (東から)



1号墳全景 (南側上空から)

ごあいさつ

常陸大宮市は、茨城県の北西部、県都水戸から約20 kmに位置しております。

市域は、八溝山地の南端と関東平野周縁台地の北端の境界部にあたります。東部には久慈川、南西部には那珂川、中央部には緒川や玉川の清流が流れ、山間には美林が涵養されていて、まさに山紫水明の地となっております。また、河川の流域や台地上には肥沃な田畑が広がり、大きな農業生産力の基盤となっております。

こうした豊かな自然に恵まれた常陸大宮市は、古くから人々の生活の場となり、多くの歴史を重ねております。そのため市域には、各時期の集落跡をはじめ、古墳・城館跡・塚など多くの遺跡が存在しているのです。

これらの遺跡は、私たちの祖先がどのように生活したのか、そして現在の豊かな生活の礎がいかに築かれてきたのかを知る手がかりになります。遺跡は、私たちが心豊かな生活をするうえで根源的かつ必要な情報を与えてくれていると言えます。このような貴重な文化遺産を後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためにも重要なことと考えております。

このたびの発掘調査は、畑地帯総合整備事業三美地区に伴い、周知の遺跡である赤岩遺跡の記録保存を目的として行ったものです。発掘調査は、平成23年12月から平成24年2月まで、株式会社日本窯業史研究所に委託して実施しました。遺跡内からは、縄文時代から中世という幅広い年代の遺構・遺物が検出されました。中でも古墳の確認は、当該地域に関する従来歴史像に重要な変更を求める大きな成果と言えます。

本書は、この発掘調査の成果を報告するものであります。歴史研究の学術資料としてはもとより、地域の教育・文化の向上のために十分に活用していただくことを希望いたします。また、この機会に文化財愛護の意識を一層高めていただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査にあたりご指導いただきました茨城県教育庁文化課及び茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳先生、全般にわたりご協力いただきました地元の皆様、慎重かつ適正な調査をしていただいた株式会社日本窯業史研究所様、その他ご指導・ご協力をいただいた関係各位に衷心より深く感謝申し上げます。

平成24年6月

茨城県常陸大宮市教育委員会
教育長 上久保 洋一

例 言










- 1 本書は、茨城県常陸大宮市三美313番地ほかに所在する赤岩遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、畑地帯総合整備事業に伴う事前調査として行ったもので、常陸大宮市教育委員会の指導のもと、常陸大宮市から委託を受けた株式会社日本竊業史研究所が実施した。発掘調査面積は4,819㎡である。
- 3 発掘および整理調査期間は下記のとおりである。
発掘調査 平成23年12月1日～平成24年2月28日
整理調査 平成24年2月1日～平成24年6月29日
- 4 発掘調査は、常陸大宮市教育委員会が主体となり、下記の体制で実施した。
調査指導 後藤俊一・鴨志田篤二・萩野谷悟（常陸大宮市教育委員会）
主任調査員 三輪孝幸（株式会社日本竊業史研究所）
- 5 整理及び報告書作成にかかわる作業は、常陸大宮市教育委員会の指導・監督のもとに、遺物の実測は三輪孝幸、柏崎広伸、拓本を市川政子、トレースから版組までを吉岡秀範、前田邦彦、村本圭二（日本竊業史研究所京浜分室）が行った。
- 6 本書の執筆は、三輪孝幸、後藤俊一が当たり、編集は三輪が担当した。
- 7 出土遺物および記録類は、常陸大宮市教育委員会において保管している。
- 8 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なるご教示・ご協力をいただいた。厚く御礼申し上げます。（敬称略）

川崎純徳 塚本師也 中村信博 新井和之 赤井博之 土生朗治 秋元陽光 山下守昭

茨城県教育委員会 茨城県泉北農林事務所 常陸大宮市経済建設部農林課 三美区 三美地区畑地帯総合整備事業推進協議会

- 9 発掘・整理事業参加者は以下の通りである。
石崎靖也 市川政子 小野瀬良武 川崎剛史 川又恵美子 久保木きよ子 久野周也
栗原昌子 西條つや子 高久照美 寺門嘉津子 寺門節子 寺門昌美 仲澤勝美
萩野谷幸次 平根幸子 森田勲

凡例

- 1 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北を示す。
- 2 調査区には、公共座標（世界測地系第IX系）をもとに10m方眼のグリッドを設定した。南西隅を起点に、東西方向は西からアルファベットを付し、南北方向は南から算用数字を付して「1A」のように組み合わせてグリッド名とした。なお、南西隅の座標値はX=60750000、Y=45695000である。
- 3 本書では、現地調査時に付した遺構番号をそのまま遺構名として使用した。
- 4 遺構番号は、種別ごとに通し番号とした。使用した遺構種類の略称は下記のとおりである。
SI・・・竪穴住居跡 SK・・・土坑・土壙墓・地下式坑 SD・・・溝
SZ・古墳、石塔
- 5 挿図中で使用したスクリーントーンは次の通りである。
遺構  カマド範囲  主体部裏込め  焼土範囲  地山
遺物  須恵器断面  繊維土器断面  自然釉範囲  黒色範囲
 研磨範囲
石器のドットは自然面を表す。また、一部のものは挿図中で個々に示した通りである。
- 6 遺構平面・断面図中の●は土器・土製品、▲は鉄製品、■は石製品を示し、それらは遺物出土位置を示す。
- 7 挿図中の「K」は攪乱を示す。
- 8 遺構・遺物の縮尺は一部を除き以下の通りである。なお一部については各図のスケールの示す通りである。
遺構 竪穴住居、土坑・・・1/60 竪穴住居カマド・・・1/30 溝・・・1/100（一部1/80）
古墳・・・1/120（一部1/80） 古墳主体部・・・1/60 石塔・・・1/20
遺物 土器・・・1/4（一部1/3） 鉄・土・石製品・・・1/2 石器（石鏃等）・・・3/4
石器（石斧・敲石等）、石製品石臼・・・1/3 石核、不明石器等・・・3/4・2/3・1/2
- 9 遺物の詳細な記述は一覧表とした。計測値の数値で、復元値〔 〕残存値（ ）、計測不可「-」を示す。
- 10 土層と土器の色判定には『新版 標準土色帳』2001年版を使用した。
- 11 本書で使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の1「常陸大宮」、25,000分の1「野口」を部分複製した。

目 次

ごあいさつ

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯	11
第2節 調査経過	11

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	13
第2節 歴史的環境	13

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要	18
第2節 基本層序	21
第3節 遺構と遺物	22

A 縄文時代

1) 竪穴住居跡	22
2) 土 坑	22
3) 遺構外出土遺物	27

B 弥生時代

1) 土 坑	38
2) 遺構外出土遺物	40

C 古墳時代～奈良時代

1) 古 墳	41
2) 土 坑	51

D 平安時代

1) 竪穴住居跡	54
----------------	----

E 中世以降

1) 溝	60
2) 地下式坑	62
3) 石塔	63
4) 遺構外出土遺物	65

第4章 総 括

遺跡の土地利用の変遷	67
------------------	----

石室の構造について	69
-----------------	----

まとめ	70
-----------	----

報告書抄録	121
-------------	-----

挿 図 目 次

第 1 図	グリッド及び調査区名称配置図	第 27 図	1号墳(2)
第 2 図	小グリッド配置図	第 28 図	1号墳周濠内土坑
第 3 図	遺跡の位置と周辺の遺跡(1)	第 29 図	1号墳等高線図
第 4 図	遺跡の位置と周辺の遺跡(2)	第 30 図	1号墳遺物分布図
第 5 図	遺跡位置図	第 31 図	1号墳主体部
第 6 図	調査詳細図	第 32 図	1号墳出土遺物(1)
第 7 図	遺構配置図	第 33 図	1号墳出土遺物(2)
第 8 図	基本層序	第 34 図	1号墳出土遺物(3)
第 9 図	S I O 4	第 35 図	1号墳出土遺物(4)
第 10 図	S I O 4 出土遺物(1)	第 36 図	S K 1 9 ~ 2 1
第 11 図	S I O 4 出土遺物(2)	第 37 図	S K 2 0 出土遺物
第 12 図	S K 1 5 ・ 2 3	第 38 図	S I O 1
第 13 図	縄文時代遺構外出土遺物(1)	第 39 図	S I O 1 出土遺物
第 14 図	縄文時代遺構外出土遺物(2)	第 40 図	S I O 2
第 15 図	縄文時代遺構外出土遺物(3)	第 41 図	S I O 2 カマド
第 16 図	縄文時代遺構外出土遺物(4)	第 42 図	S I O 2 出土遺物(1)
第 17 図	縄文時代遺構外出土遺物(5)	第 43 図	S I O 2 出土遺物(2)
第 18 図	縄文時代遺構外出土遺物(6)	第 44 図	S I O 3 カマド ・ 出土遺物
第 19 図	縄文時代遺構外出土遺物(7)	第 45 図	S D O 1
第 20 図	縄文時代遺構外出土遺物(8)	第 46 図	S D O 1 出土遺物
第 21 図	縄文時代遺構外出土遺物(9)	第 47 図	S K 1 0
第 22 図	S K 0 1	第 48 図	S Z 0 2 出土遺物
第 23 図	S K 0 1 出土遺物(1)	第 49 図	中世以降遺構外出土遺物(1)
第 24 図	S K 0 1 出土遺物(2)	第 50 図	中世以降遺構外出土遺物(2)
第 25 図	弥生時代遺構外出土遺物	第 51 図	1号墳主体部模式図
第 26 図	1号墳(1)		

表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡一覽	第 8 表	縄文時代遺構外出土遺物観察表(5)
第 2 表	S I O 4 出土遺物観察表(1)	第 9 表	S K 0 1 出土遺物観察表(1)
第 3 表	S I O 4 出土遺物観察表(2)	第 10 表	S K 0 1 出土遺物観察表(2)
第 4 表	縄文時代遺構外出土遺物観察表(1)	第 11 表	S K 0 1 出土遺物観察表(3)
第 5 表	縄文時代遺構外出土遺物観察表(2)	第 12 表	S K 0 1 出土遺物観察表(4)
第 6 表	縄文時代遺構外出土遺物観察表(3)	第 13 表	弥生時代遺構外出土遺物観察表
第 7 表	縄文時代遺構外出土遺物観察表(4)	第 14 表	1号墳出土遺物観察表(1)

- 第15表 1号墳出土遺物観察表(2)
 第16表 1号墳出土遺物観察表(3)
 第17表 1号墳出土遺物観察表(4)
 第18表 SK20出土遺物観察表(1)
 第19表 SK20出土遺物観察表(2)
 第20表 S101出土遺物観察表
 第21表 S102出土遺物観察表(1)
 第22表 S102出土遺物観察表(2)

- 第23表 S102出土遺物観察表(3)
 第24表 S103出土遺物観察表
 第25表 SD01出土遺物観察表
 第26表 SZ02出土遺物観察表
 第27表 中世以降遺構外出土遺物(1)
 第28表 中世以降遺構外出土遺物(2)
 第29表 中世以降遺構外出土遺物(3)

図版目次

巻頭1

調査区全景(東から)

1号墳全景(南から)

図版1

調査前風景(北東から)

調査区全景(北側上空から)

図版2

A区全景(西から)

B区全景(東から)

図版3

C区全景(北から)

D区全景(北東から)

図版4

E区全景(北から)

E区南部全景(北から)

図版5

F区全景(西から)

F区東部全景(西から)

図版6

G区全景(西から)

Gs区全景(北から)

TP2土層断面(北から)

TP4土層断面(西から)

図版7

S104全景(西から)

SK15全景(東から)

SK23全景(南から)

SK01全景(南から)

SK01遺物出土状況(東から)

1号墳主体部確認状況(南から)

図版8

1号墳全景(南から)

1号墳遺物出土状況(南から)

図版9

1号墳前庭部遺物出土状況(南西から)

1号墳前庭部遺物出土状況(南東から)

1号墳前庭部遺物出土状況(東から)

1号墳周濠遺物出土状況(南から)

1号墳石臼出土状況(南東から)

1号墳前庭部遺物出土状況(北東から)

図版10

1号墳前庭部遺物出土状況(東から)

1号墳遺物出土状況(南から)

1号墳前庭部遺物出土状況(西から)

1号墳前庭部遺物出土状況(西から)

1号墳前庭部遺物出土状況(西から)

1号墳主体部全景(南から)

図版11

1号墳主体部全景(南から)

1号墳主体部掘り方全景(南から)

1号墳石室東壁(南西から)

1号墳石室西壁(南東から)

1号墳東側羨門付近(南から)

1号墳羨門(南から)

図版 12

1号墳東側羨門(南から)

1号墳西側羨門(南から)

1号墳東側玄門(南から)

1号墳B-B'西側土層断面(南から)

1号墳B-B'東側土層断面(北から)

1号墳D-D'西側土層断面(北から)

図版 13

1号墳D-D'東側土層断面(北から)

1号墳E-E'西側土層断面(南から)

1号墳E-E'東側土層断面(南から)

1号墳周濠内1号土坑全景(西から)

1号墳周濠内2号土坑全景(東から)

SK19全景(南から)

図版 14

SK20全景(南から)

SK20遺物出土状況(東から)

SK21全景(南から)

SI01全景(北東から)

SI01掘り方全景(北西から)

SI01カマド全景(南東から)

図版 15

SI01カマド遺物出土状況(南東から)

SI02全景(西から)

SI02掘り方全景(西から)

SI02遺物出土状況(西から)

SI02遺物出土状況(西から)

SI02遺物出土状況(西から)

図版 16

SI02遺物出土状況(西から)

SI02遺物出土状況(南から)

SI02カマド全景(西から)

SI02カマド掘り方全景(西から)

SI02カマド遺物出土状況(西から)

SI02カマド遺物出土状況(西から)

図版 17

SI03カマド(北から)

SK10全景(南西から)

SK10全景(北東から)

SK10土層断面(北から)

SD01全景(西から)

SZ02基部全景(南から)

図版 18

火葬骨確認状況(SD01南側縁、北から)

大場小学校5・6年生遺跡見学風景(1)

大場小学校5・6年生遺跡見学風景(2)

一般遺跡見学会風景(1)

一般遺跡見学会風景(2)

発掘作業参加の皆様

図版 19

SI04出土遺物(1)

図版 20

SI04出土遺物(2)

縄文時代遺構外出土遺物(1)

図版 21

縄文時代遺構外出土遺物(2)

図版 22

縄文時代遺構外出土遺物(3)

図版 23

縄文時代遺構外出土遺物(4)

図版 24

縄文時代遺構外出土遺物(5)

図版 25

縄文時代遺構外出土遺物(6)

図版 26

縄文時代遺構外出土遺物(7)

図版 27

縄文時代遺構外出土遺物(8)

図版 28

縄文時代遺構外出土遺物(9)

SK01 出土遺物(1)

図版 29

SK01 出土遺物(2)

図版 30

SK01 出土遺物(3)

図版 31

弥生時代遺構外出土遺物

1号墳出土遺物(1)

図版 32

1号墳出土遺物(2)

図版 33

1号墳出土遺物(3)

図版 34

1号墳出土遺物(4)

図版 35

SK20 出土遺物

SI01 出土遺物

SI02 出土遺物(1)

図版 36

SI02 出土遺物(2)

SI03 出土遺物

SD01 出土遺物(1)

図版 37

SD01 出土遺物(2)

SZ02 出土遺物

中世以降遺構外出土遺物(1)

図版 38

中世以降遺構外出土遺物(2)

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、畑地帯総合整備事業三美地区に伴う事前調査である。

平成21年5月11日、茨城県県北農林事務所から常陸大宮市教育委員会に、同事業予定地内における埋蔵文化財の所在の有無について照会がなされた。事業予定地は面積38haの広域に及び、その区域内に6か所の周知の埋蔵文化財包蔵地を含んでいた。そのため事業予定地を便宜上3地区に分割し、その1地区に対し、平成22年10月から平成23年5月にかけて、都合14日間をかけて常陸大宮市教育委員会が試掘調査を実施した。試掘調査はトレンチ方式で行い、その結果、竪穴住居跡・ピット・溝状遺構・土器片等が検出され、古代の集落跡が所在することが判明した。

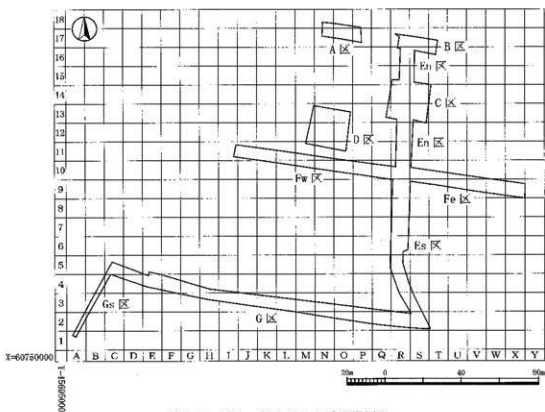
平成23年7月25日、茨城県県北農林事務所は茨城県教育委員会と協議を行い、平成23年8月24日、茨城県教育委員会は発掘調査を実施すべき旨回答した。その後、常陸大宮市教育委員会は指名競争入札により、株式会社日本竊業史研究所に調査を委託した。

平成23年11月9日、茨城県県北農林事務所・常陸大宮市・常陸大宮市教育委員会・株式会社日本竊業史研究所は発掘調査の進め方について四者協議を行い、平成23年12月2日から平成24年2月28日まで株式会社日本竊業史研究所が本調査を実施した。

第2節 調査の経過（第1・2図）

本遺跡の発掘調査は、平成23年12月2日から平成24年2月28日まで行った。整理調査は当初、平成24年2月から開始し、3月23日に報告書を納本する予定であったが、発掘調査開始早々に新規の古墳を発見したため、工期の延長願を出し、5月中ごろまで整理作業を行い、6月に報告書を納本し、すべての作業を終えた。

調査に先立ち、11月30日に調査区の設定を行い（茨城県県北農林事務所より委託を受けた測量会社によって実施される）、12月2日には発掘機材、重機（バックホー）の搬入を行い、常陸大宮市教育委員会、茨城県県北農林事務所の立会いの下、表土の掘削作業を開始した。ユニットハウス、仮設トイレは5日に設置、6日より人力によって遺構確認面の精査を行う。遺構確認面の精査によって検出した遺構はビニール紐によって遺構の輪郭を明示し、遺構検出状況図の作成を行った。遺構検出状況図の作成を行った遺構に関しては、常陸大宮市教育委員会の現場検証ののち、遺構の調査に入った。遺構は、平面を4分割ないし2分割し、掘削後埋積土の観察、記録を行った。遺構の完掘後は平面図の作成（縮尺1/20）、写真撮影を行った。遺構平面図は測量機器（トータルステーション）で座標を読み、現地にて作図した。竪穴住居跡についてはその掘り方まで掘削し、平面と同様の記録を取った。古墳については、主体部は玄室・羨道部・前庭部の主軸と横断面上層断面の観察を行い、石室・前庭部の埋積土については篩掛けを行い遺物の検出に努めた。前庭部から周濠にかけて多量の須恵器片が出土したが、これは出土状況の写真撮影、出土位置図の作成を行い、個々に番号を付けて取り上げを行った。周濠は、全周



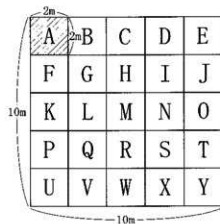
第1図 グリッド及び調査区名称配置図

を8分割して、北・北東・南東・南西方向の上層断面の観察を行った。

C・F e区においては、縄文時代の包含層の調査を行った。遺物は、基本となる10mグリッドを2mの小グリッドに分け、グリッドの名称を付け取り上げた。その後、2月16日にはラジコンヘリにより空中撮影を行い、18日に墳丘測量を行った。墳丘の調査を行った後、墳丘およびC区全体の縄文時代の包含層の調査を行いつつ、ローム層上面で縄文時代の遺構の確認作業を行った。

これらの作業の間に、2月8日には大場小学校の5・6年生の見学、14日には常陸大宮市長の来訪、16日には常陸大宮市教育委員会、常陸大宮市農林課、茨城県北農林事務所の終了立会いがあり、19日には現場説明会等を行った。

2月28日には常陸大宮市教育委員会により終了確認が行われ、現地調査をすべて終了した。埋め戻しは常陸大宮市教育委員会の承認を得たのち、重機を使用し、2月26日より3月21日まで行った。



第2図 小グリッド配置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 (第3図)

本遺跡の立地する常陸大宮市は、茨城県の北西部に位置し、北は天子町、東は常陸太田市、南は那珂市・城里町、西は栃木県那珂川町・那須烏山市・茂木町と隣接している。常陸大宮市の市街地は市の南東に位置し、JR水郡線、国道118号線が南北に通り、また、水戸市から城里町を抜け、栃木県茂木町に至る国道123号線は市の西方を南東—北西方向に走っている。

市の地形は、栃木県境を南北に通る八溝山系のうちの鷺子山(標高463m)を最高峰とし、その付近から南東方向に傾斜する山地が南東方の瓜連台地へと続いている。この山地の東側に久慈川、西側に那珂川が流れ、両河川に流れ込む支流が山間地に支谷を形成している。この向水系には河岸段丘が発達し、下流には若干の低地も認められる。市内の遺跡の多くはこの河岸段丘から低地にかけて立地している。

本遺跡は那珂川の左岸、那珂川と那珂川の支流の緒川の合流点の東方800mの台地上に立地している。遺跡の立地する台地南と西側が岸線となっており、台地上は北から南に向かって緩く傾斜しているが、現況は畑地で見た日には平坦に見える。遺跡の立地する台地は標高60～62mを測り、遺跡の南方を流れる那珂川との比高は約36mである。

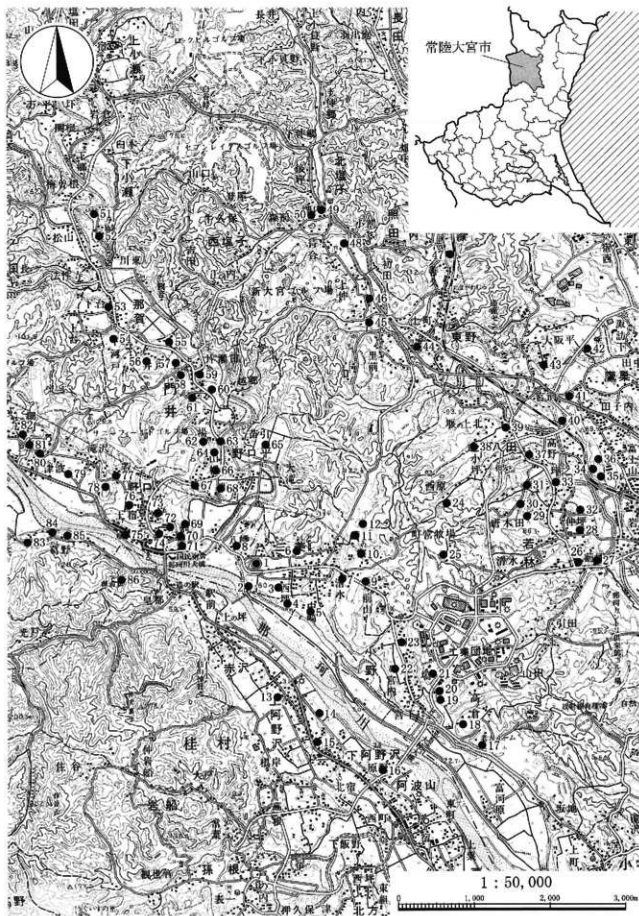
第2節 歴史的環境 (第3～5図、第1表)

常陸大宮市には、総数315か所(旧大宮町143か所、旧山方町20か所、旧美和村37か所、旧緒川村18か所、旧御前山村97か所)の埋蔵文化財が確認されている。遺跡は久慈川、那珂川の両水系によって形成された、河岸段丘から低地にかけて広く分布し、山間地にはわずかに点在している。時代は旧石器時代から近世に至る各種の遺跡が認められる。以下、各時代の主な遺跡を以って、その概要を説明する。

旧石器時代では、市内には5か所の遺跡が確認されている。梶巾遺跡・上坪遺跡・鷹巣戸内遺跡(旧大宮町)・山方遺跡(旧山方町)は久慈川流域、大倉遺跡(旧御前山村)は那珂川流域にあり、いずれも河岸段丘上に立地している。遺物は梶巾遺跡で槍先形尖頭器が出土し、小野天神前遺跡(23)からは細石核が採集されている。

縄文時代では、市内には162か所の遺跡が確認され、各時代の遺跡では奈良・平安時代に次いで多くの遺跡が認められる。岡原遺跡(58)(平成23年度調査)で縄文時代早期(出戸下層式)の竪穴住居跡を1軒検出している。また、西埴遺跡(76)では2度にわたる発掘調査の結果、中期の住居跡1軒、有段竪穴4軒、土坑378基などが検出された。時期は前期前半大木1式から晩期人洞B式段階までが出土している。遺跡は那珂川の左岸台地上に立地しており、上位面と下位面での時期的な住み分け、土地利用の変遷が考えられている。このほか、梶巾遺跡で土坑16基が検出され、諏訪台遺跡では住居跡1軒、土坑16基、竪穴状遺構2基が検出され、坪井上遺跡では住居跡19軒、土坑75基が検出されている。

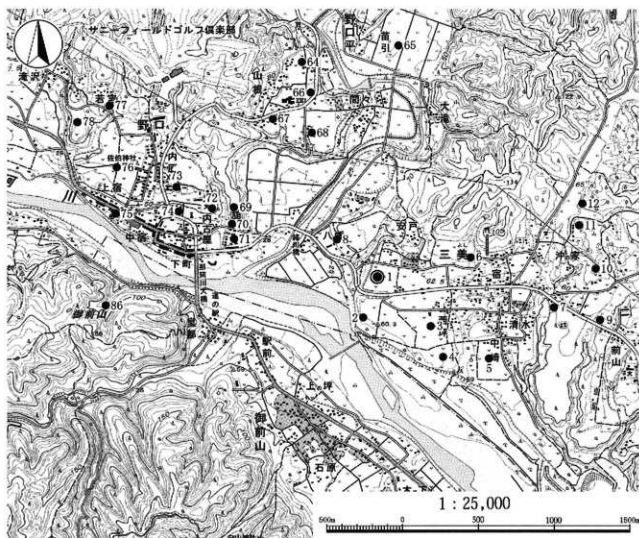
弥生時代では、小野天神前遺跡(23)は那珂川左岸の段丘上に立地し、20基の土坑が調査され、人面付壺形土器が出土している。このほか、富上山遺跡(35)では後期の住居跡9軒、土壘墓3基が検



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡(1)

第1表 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	赤岩遺跡	集落跡	縄文～中世	44	地殿神社遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈・平
2	三美の番銭	貨幣銭	中世	45	仲ノ内遺跡	集落跡	縄文・奈・平～近世
3	三美中道遺跡	集落跡	縄文～奈・平	46	東野仲坪遺跡	集落跡	古墳～奈・平
4	滝ノ上遺跡	集落跡	縄文・奈・平	47	東原遺跡	集落跡	奈・平
5	中崎遺跡	集落跡	縄文・奈・平	48	待合道跡	集落跡	縄文・奈・平
6	三美根岸遺跡	集落跡	縄文・古墳	49	籠内遺跡	集落跡	縄文～中世
7	一の沢塚群	塚群	近世	50	上小屋遺跡	集落跡	縄文・奈・平
8	八幡遺跡	集落跡	奈・平	51	川崎城跡	城館跡	中世
9	前山瓦窯跡	瓦窯跡	奈・平	52	川崎遺跡	包蔵地	縄文・古墳
10	泉沢A遺跡	集落跡	縄文	53	厚賀遺跡	城館跡	中世
11	泉沢B遺跡	集落跡	縄文	54	陣向籠内遺跡	包蔵地	縄文
12	泉沢C遺跡	集落跡	弥生	55	萩崎遺跡	集落跡	縄文・奈・平
13	堀之内遺跡	包蔵地	縄文	56	井戸上遺跡	集落跡	縄文・奈・平～近世
14	反川遺跡	包蔵地	弥生～奈・平	57	清水遺跡	集落跡	奈・平
15	根本内遺跡	包蔵地	縄文～古墳	58	阿原遺跡	集落跡	縄文・古墳～近世
16	太子堂遺跡	経塚	近世	59	森前遺跡	集落跡	縄文・奈・平
17	高ノ倉遺跡	集落跡	縄文～中世	60	下平道部遺跡	集落跡	奈・平
18	高ノ倉城跡	城館跡	縄文・古墳～中世	61	片セ田遺跡	包蔵地	奈・平
19	源氏平塚群	塚群	近世	62	新京寺(野口平)城址	城館跡	中世
20	源氏平遺跡	集落跡	縄文・奈・平	63	成井道跡	包蔵地	奈・平
21	居台遺跡	集落跡	奈・平	64	榎内古墳	古墳	古墳
22	小野中道遺跡	集落跡	縄文～奈・平	65	中島遺跡	集落跡	古墳・奈・平
23	小野天神前遺跡	集落跡	縄文～奈・平	66	山根遺跡	集落跡	弥生～平安
24	西原遺跡	集落跡	縄文・奈・平・中世	67	矢口遺跡	集落跡	古墳
25	町宮牧場内遺跡	集落跡	縄文	68	京銭内遺跡	集落跡	古墳
26	前坪遺跡	集落跡	古墳～奈・平	69	川野辺野口城跡	集落跡	奈・平～中世
27	前坪東遺跡	集落跡	縄文～近世	70	御城遺跡	集落跡	奈・平
28	岡平遺跡	集落跡	縄文～奈・平	71	笠遺跡	集落跡	奈・平
29	菅又館遺跡	城館跡	中世	72	時節館址	碑校跡	近世
30	菅又八田遺跡	集落跡	縄文～奈・平	73	内原遺跡	集落跡	縄文・古墳～平・近世
31	唐木田二ツ塚	塚群	近世	74	内古原遺跡	集落跡	奈・平～近世
32	北平遺跡	集落跡	縄文～奈・平	75	上宮遺跡	集落跡	縄文・奈・平
33	三蔵遺跡	集落跡	縄文～奈・平	76	西崎遺跡	集落跡	縄文・古墳～近世
34	岩久横穴墓群	横穴群	古墳	77	若宮戸遺跡	集落跡	縄文・奈・平
35	富士山遺跡	集落跡	縄文	78	若宮遺跡	集落跡	縄文・奈・平
36	宮上権現山古墳群	古墳群	古墳	79	上川原遺跡	集落跡	奈・平
37	八田向原遺跡	集落跡	中世	80	津波東遺跡	集落跡	縄文～奈・平
38	八田桑原遺跡	集落跡	奈・平	81	津波西遺跡	集落跡	縄文～奈・平
39	坂ノ上遺跡	集落跡	奈・平	82	榎内西ノ内遺跡	集落跡	縄文・奈・平
40	雷神山横穴群	横穴群	古墳	83	古御所遺跡	集落跡	縄文・奈・平
41	犬迫遺跡	集落跡	縄文	84	福野遺跡	集落跡	奈・平
42	大阪平A遺跡	集落跡	奈・平	85	中平遺跡	集落跡	縄文～奈・平
43	大阪平B遺跡	集落跡	奈・平	86	御前山城跡	城館跡	中世



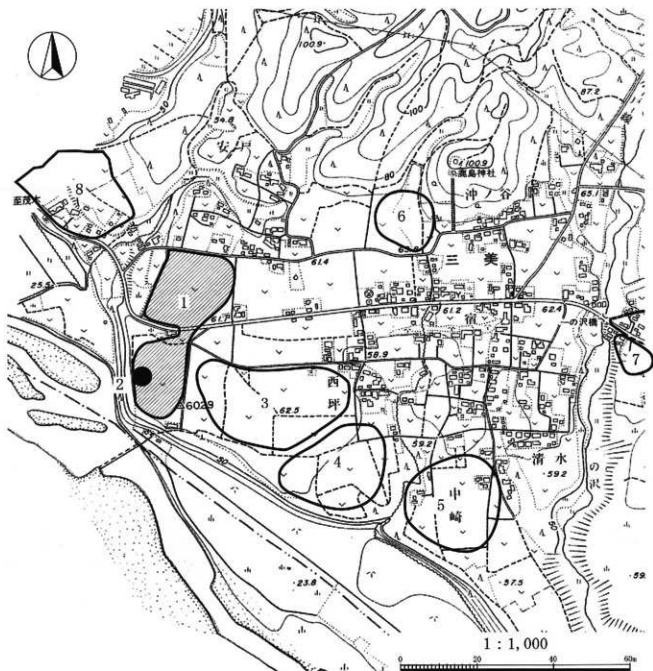
第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡(2)

出され、梶巾遺跡では竪穴住居跡2軒が調査されている。

古墳時代では市内に現在16か所の古墳・古墳群・横穴墓が確認され、久慈川流域にその多くが分布している。富士山4号墳は全長48mの前方後方墳で、久慈川中流域の首長墓と考えられ、県内最古の一群の内にある。また、玉川流域には雷神山横穴群(40)、岩欠横穴墓群(34)がある。

奈良・平安時代は最も多くの遺跡が確認され、代表的なものとして鷹巣遺跡、上ノ宿遺跡などが調査されている。岡原遺跡(58)では、竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡1棟が調査され、多文字・人面墨書土器等が出土している。また、鷹巣瓦窯跡群で生産された瓦は久慈郡衙に供給されたものと考えられている。

中世では、遺跡の範囲内から備蓄銭が出土しており「三美の蓄銭」(2)と呼ばれている。銭は乾元重宝(唐銭)から永業通宝(明銭)までの3929枚が出土し、袋に入れられた状態で埋められたものと考えられている。また、野口地区には那珂川左岸段丘上に築造された川野辺城(69)が所在するほか、高ノ倉城跡(18)、菅又館遺跡(29)、御前山城(86)などがある。岡原遺跡では、地下式坑が12基



1. 赤岩遺跡 2. 三美の蓄銭 3. 三美中道遺跡 4. 滝ノ上遺跡 5. 中崎遺跡 6. 三美根岸遺跡
 7. 一の沢塚群 8. 八幡遺跡

第5図 遺跡位置図

調査され、近世の土壇墓や字名の検証から墓域としての利用が考えられている。

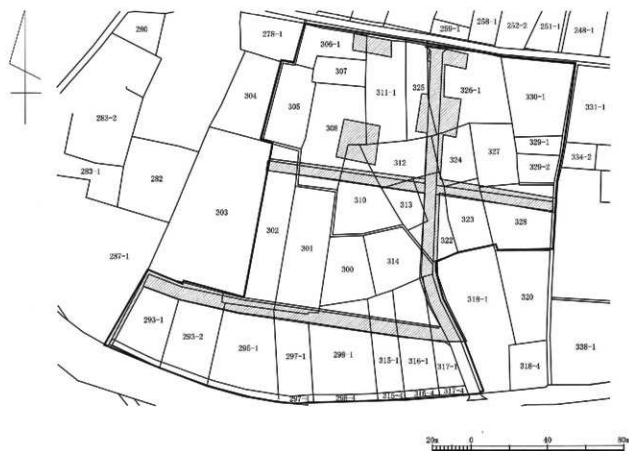
第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要 (第6・7図)

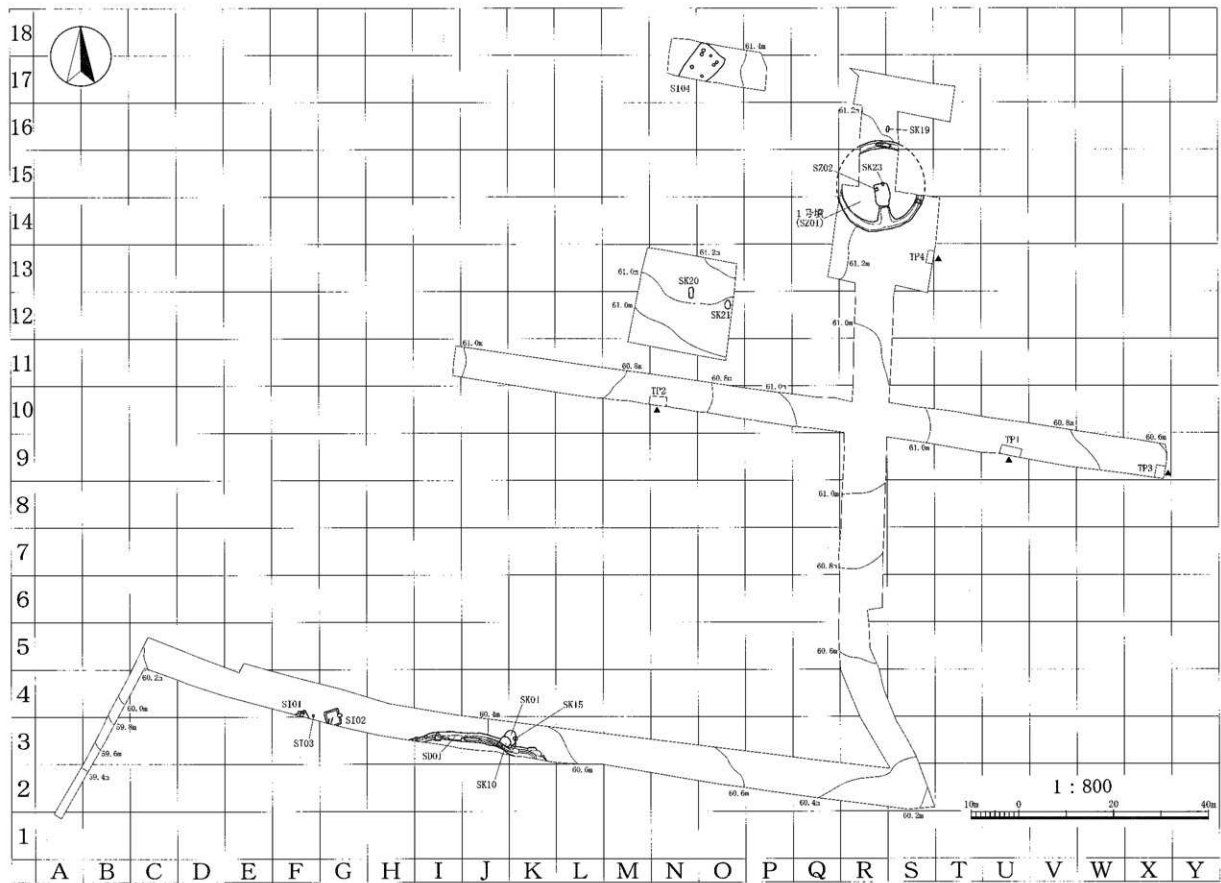
本遺跡は、茨城県常陸大宮市三美313番地ほか21筆に所在し、那珂川左岸の河岸段丘上に立地している。標高60～62mを測り、那珂川との比高は約36mである。現況は畑作地帯で、ほぼ平坦に見えるものの、南に向かって緩く傾斜している。調査は三美地区の畑地帯総合整備事業に伴い、農道部分の建設予定地4,819㎡について本調査を実施した。

調査の結果、縄文時代早期から中世までの遺構・遺物を検出した。検出した遺構は、縄文時代前期の竪穴住居跡1軒、早期の陥し穴状土坑1基、弥生時代の土坑1基、古墳1基、古墳時代の土坑2基、奈良時代の土葬墓1基、平安時代の竪穴住居跡3軒、中世の溝1条、地下式坑1基を確認した。

出土した遺物は縄文時代早期から中期の土器片、石器、焼礫、弥生時代中・後期の土器片、古墳時代の土師器埴・小型甕、須恵器長頸壺・甕、鉄製品鎌、刀子、奈良時代須恵器坏・高台坏・蓋類、平安時代土師器坏・甕類、管状土錘、紡錘車、中世の常滑焼の甕片、青磁の碗片、銅製品などが出土した。



第6図 調査詳細図



第7圖 遺構配置圖

第2節 基本層序 (第8図、図版6)

遺跡の現況は、畑地帯で、遺構の確認面までは深さ 50～90cmを測る。調査区は全体に耕作が行われ、基本土層をとらえられる場所は少なかった。調査区内に基本土層を確認するためにテストピット (TP) 4か所の掘削を行ったが、いずれもⅢ層上位まで耕作が行われ、基本的な層序とは言い切れなかった。その中で、古墳の確認された地区は耕作が上面のみで、比較的良好な状況で基本土層を確認することができた。基本土層の詳細については、第8図によって説明する。

表土層を除去すると黒色土層になり、古墳の石室はこの層位の上面で確認した。しかし、他の遺構は黒色土を除去し黒褐色土層の上面まで掘削しなければ確認することができなかった。また、ほとんどの場所では耕作が著しく、七本桜・今市軽石層まで掘削し、遺構の確認に努めた。

基本土層

I 耕作土

II 黒色土層 (10YR2/1) 調査区の北側にのみ確認された。調査区の中央より南においては、旧耕作により、色調は黒色を呈するものの、締りがなく粗砂粒を多く含み粘性を欠いている。時期不明の土坑・小穴はいずれも耕作土直下のこの層を掘り込んでいることから、報告から割愛した。

III 黒褐色土層 (10YR2/2) 七本桜・今市軽石層の上面に位置し、その色調からほとんどの遺構はこの上面で確認した。古墳時代以降の遺構は本来であればこの上位黒色土層中で確認できるものと考えられるが、旧耕作の影響等によりこの面で遺構を確認した。

IV 七本桜・今市軽石層 純粋な軽石層は認められず、黒色土が入り込んで染み状を所々で呈している。七本桜軽石はところどころで凹地にたまった程度である。

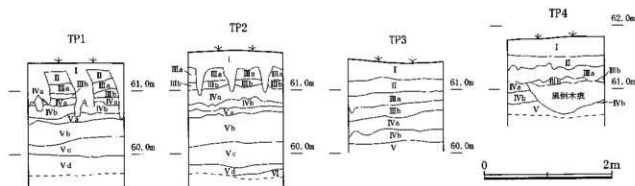
IVa 黒褐色土 (10YR2/3) 締り強、粘性無 ϕ 0.5～1mm大白色粒 10%、明赤褐色土を主体。

IVb 明赤褐色土 (5YR5/6) 締り強、粘性無 ϕ 1～2mm大白色粒 20%、粗砂粒混じる。

V ローム

Va 明赤褐色土 (7.5YR5/6) 締り強、粘性無 ϕ 1～2mm大白色粒 5%、 ϕ 1～2mm大黒色粒 10%、 ϕ 2mm大橙色粒 3%

Vb 明赤褐色土 (7.5YR5/6) 締り普、粘性強 ϕ 1～2mm大黒色粒 3%



第8図 基本層序

- Vc 橙色土 (7.5YR6/6) 締り普、粘性強 ϕ 0.5～1mm大白色粒、黒色粒2%
- Vd 橙色土 (7.5YR6/6) 締り弱、粘性強
- VI 明赤褐色土 (7.5YR5/6) 締り強、粘性普 ϕ 2～3mm大白色粒20% 鹿沼層

第3節 遺構と遺物

A 縄文時代

竪穴住居跡1軒、上坑2基を検出した。竪穴住居跡は調査区の北部に、上坑は調査区の中央と南部に位置している。

遺物は早期から前期の土器片が中央部から北部にかけて分布している。

1) 竪穴住居跡

SI04 (第9～11図、第2・3表、図版7・19・20)

調査区北側の17・18NOグリッドに位置する。平面形は台形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は、長軸9.2m以上、短軸6.5m、深さは0.13～0.20mである。主軸方向はN-45°-Eを示す。床面はほぼ平坦で直床である。主柱穴は7基を検出した。規模は長径0.45～0.74m、短径0.43～0.7m、深さは0.67～0.9mである。P5・7は住居の拡張・建て替え後の柱穴かと推測され、それぞれ底面に2基の柱穴の底面が認められる。P6は棟を支える柱穴かと推察される。床面の精査を行ったが、炬を検出することはできなかった。

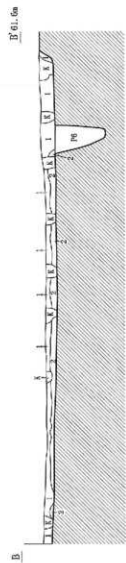
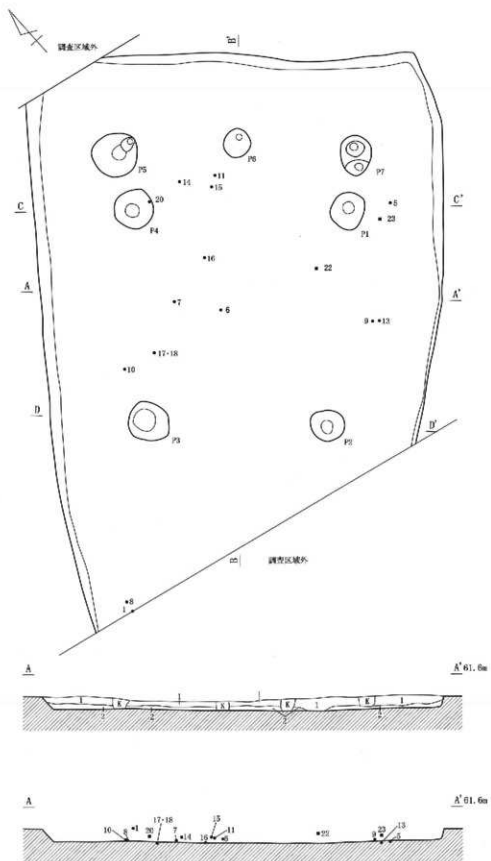
遺物は住居中央の埋積土中から縄文土器深鉢の破片が出上している。

5～7・10・11は槌房式、他は黒浜式の古手である。1～19は深鉢である。1は大型破片で体部下半が丸く膨らみ、口辺部に向かって外傾する。1・2は地紋に羽状縄文が施文される。14・16・18は縄文が施される。10は横の沈線が施され、下位にコンパス文が施文される。15は竹管文が施される。17・9は付加条縄文が施文される。8は撚糸文が施文されている。13は沈線文が施文される。4～6は平行沈線の押しきりが施文される。11は多截竹管文による沈線が施される。12は隆帯による楕円区画が施される。19は底部片で、内面が磨かれている。20～23は石器である。20は門基の石礎で、石材はチャート、基部を欠損する。21は磨製石斧である。大型品で左右非対称で、刃部以外は欠損する。22は門石である。石材は安山岩、磨石としても使用されている。一部に煤が付着し、両面に凹みがある。23は石皿である。皿部の凹みが浅い。大部分が欠損している。

2) 土坑

SK15 (第12図、図版7)

調査区南部の3Kグリッドに位置する。SK01に切られている。平面形は楕円形を呈し、断面形態は台形をしている。規模は長径1.0m、短径0.73m、深さは1.06mである。主軸の方向はN-126°-Wを示す。埋積土中位に今市パミスの二次堆積が認められる。

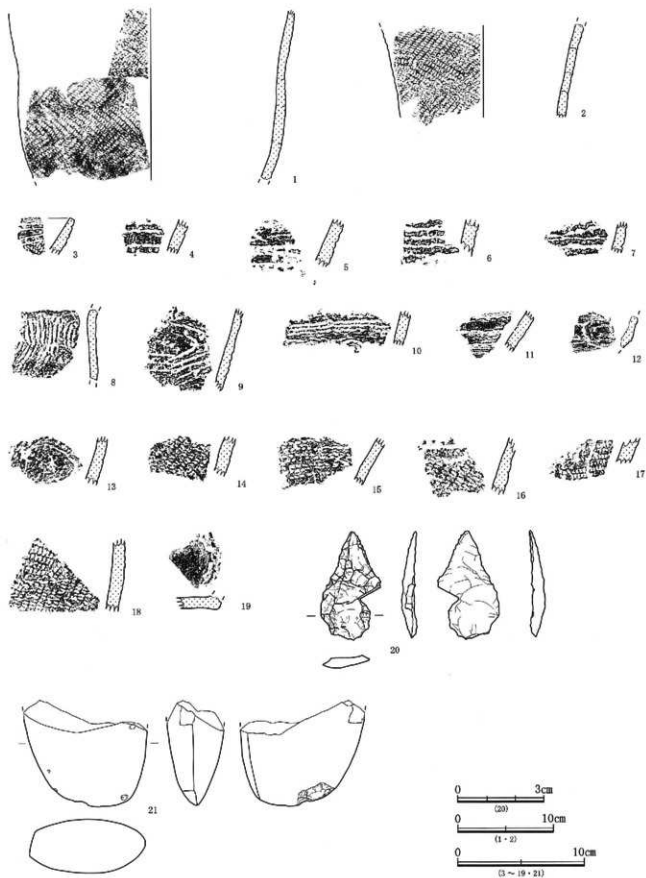


S104

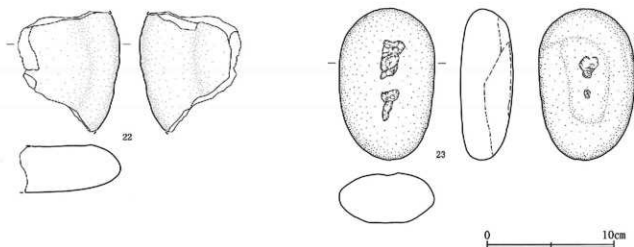
1. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘り強、粘性なし、 $\phi 0.3\text{mm} \sim 0.5\text{mm}$ 大の白色粒10%、 $\phi 1\text{mm}$ 大の褐色粒2%含む。
2. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘り強、粘性なし、 $\phi 0.3\text{mm} \sim 0.5\text{mm}$ 大の白色粒3%、 $\phi 10\text{mm} \sim 15\text{mm}$ 次のローム塊10%マープ4割を含む。
3. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘り強、粘性なし、 $\phi 0.5\text{mm} \sim 1\text{mm}$ 大の白色粒20%含む。

0 2m

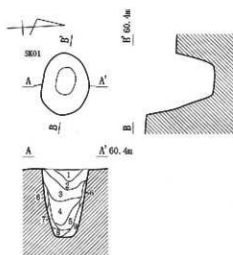
第9図 S104



第10圖 SI 04出土遺物(1)

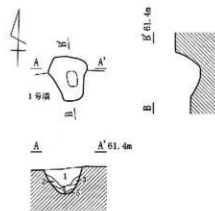


第11圖 S104出土遺物(2)



SK15土層断面

1. 黒褐色土 (10YR2/3) 締り強、粘性なし。φ0.5~1mm大の白色粒10%、φ2mm大の褐色粒2%含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 締り強、粘性なし。φ0.5~1mm大の白色粒30%、φ2mm大の褐色粒5%含む。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 締り強、粘性なし。φ0.5~1mm大の白色粒10%、φ1~3mm大の褐色粒10%含む。
4. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 締り強、粘性なし。φ2~3mm大の褐色粒50%、φ1~2mm大の白色粒3%含む。
5. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 締り強、粘性なし。φ2~3mm大の褐色粒10%含む。
6. 明褐色土 (7.5YR5/6) 締り強、粘性なし。黒褐色土含む。
7. 褐色土 (7.5YR4/4) 締り強、粘性なし。φ2~3mm大の褐色粒3%含む。
8. 褐色土 (7.5YR4/4) 締り強、粘性なし。暗褐色土含む。
9. 明褐色土 (7.5YR5/6) 締り強、粘性なし。φ5~10mm大のローム塊10%含む。



SK23土層断面

1. 黒褐色土 (10YR2/3) 締り強、粘性なし。φ0.5~0.8mm大の白色粒10%、φ1mm大の褐色粒3%含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 締り強、粘性なし。φ0.5~0.8mm大の白色粒5%、φ0.8mm大の褐色粒2%含む。明黄褐色土含む。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 締り強、粘性なし。φ5~10mm大の明黄褐色土10%、φ1~1.5mm大の褐色粒3%含む。
4. 明褐色土 (7.5YR5/6) 締り強、粘性なし。φ10mm大の黒色土20%、φ1~2mm大の褐色粒10%含む。
5. 明褐色土 (7.5YR5/6) 締り強、粘性なし。φ1~2mm大の褐色粒10%含む。



第12圖 SK15・23

遺物は何も出土しなかった。

SK23 (第12図、図版7)

調査区北部の15Rグリッドに位置する。1号墳主体部に切られている。平面形は長方形を呈し、断面形態は台形をしている。規模は長径0.7m、短径0.63m、深度は0.375mである。主軸方向はN-42°-Wを示す。

遺物は縄文前期浮島式の土器の細片が出土したが、包含層からの流れ込みと考えられる。

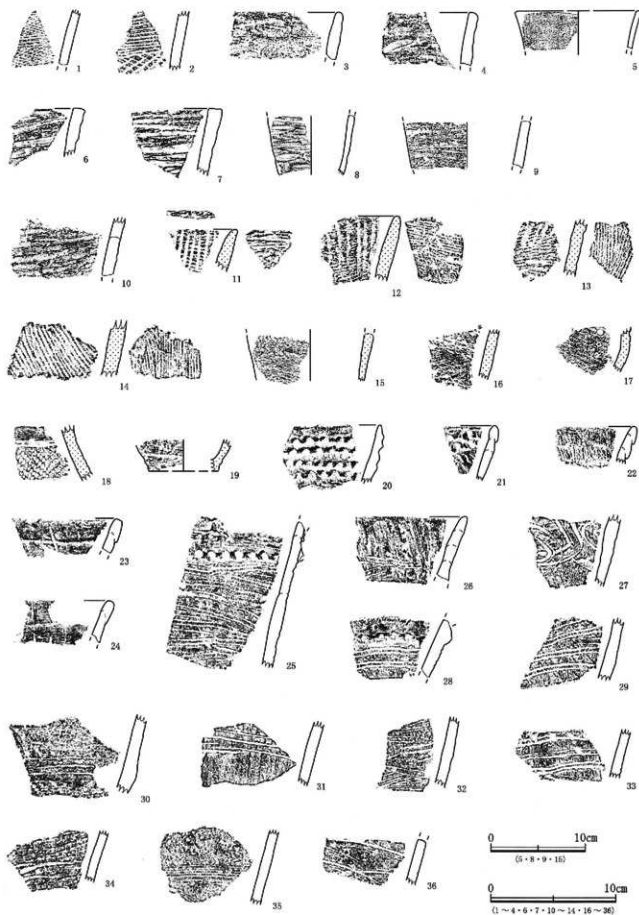
3) 遺構外出土遺物 (第13～21図、第4～8表、図版20～28)

遺構外の出土遺物については、試掘調査時にFe区において比較的纏まって出土したことから、表土除去作業を黒色土層(II層)の直下にとどめ、黒褐色土層(III層)を2mの小グリッド単位で掘削し遺構・遺物の検出作業を行った。また、C区においてもゴボウの耕作が行われず、層位が比較的良好的な状態であったことから、これもまた1号墳の墳丘も含めて同様の方法によって遺構・遺物の検出作業を行った。このほか、SIO2の埋積土から若干の土器が出土している。ほかの地区においては、ゴボウの耕作が著しく遺構の検出面をローム層上面としたことから遺物の出土は僅かであるが、本来は調査区全体に広く分布していたものと推察される。

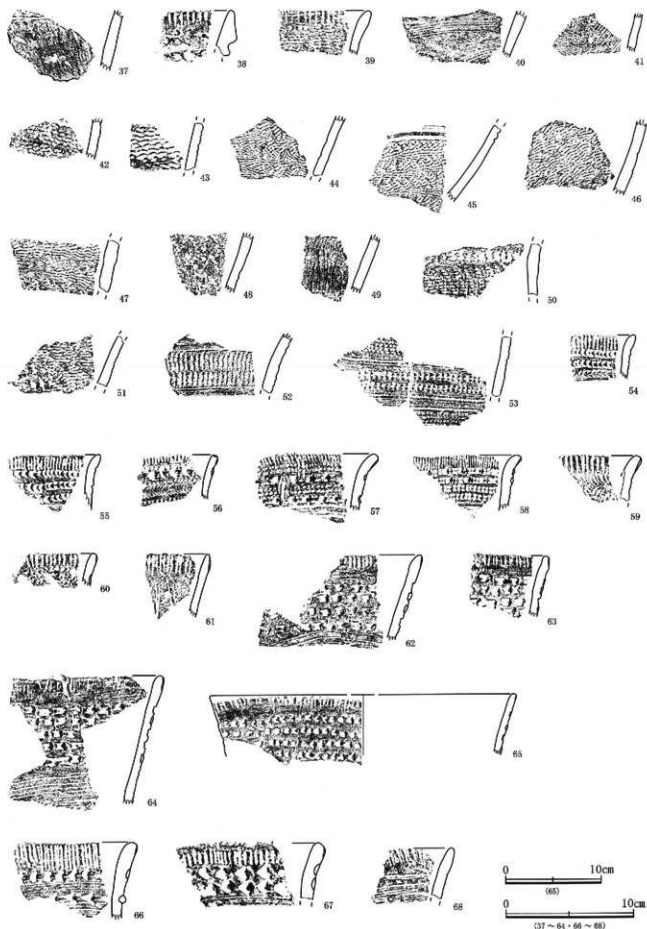
その結果、C区、Fe区では早期、前期浮島式の土器片が比較的纏まって出土している。4Dグリッド、SIO2の埋積土からは条痕文系の土器が出土しているが、条痕文系は他からの出土はない。また、A区では黒浜式期の住居跡(SIO4)を検出したが、黒浜式の出土は他では見られなかった。

土器

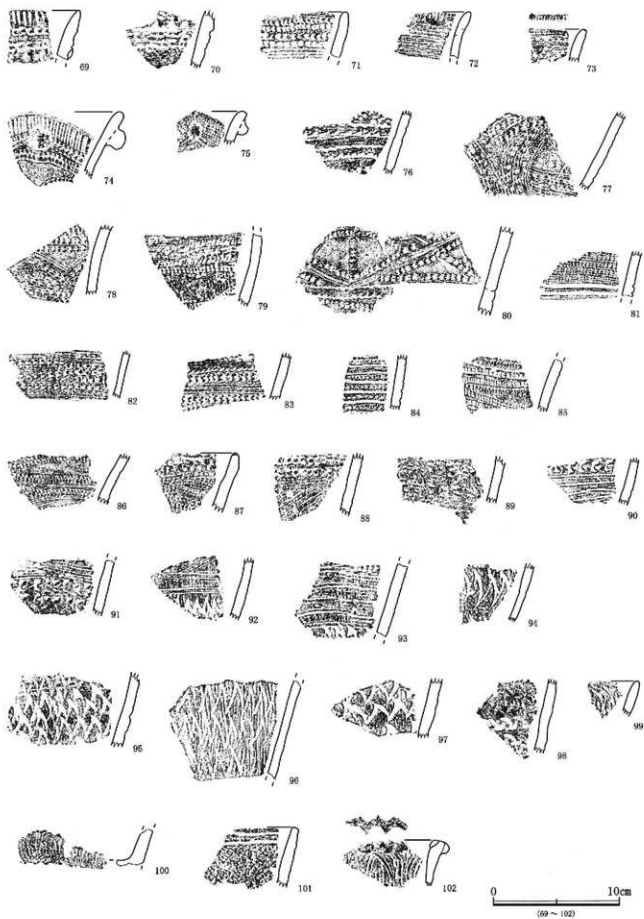
早期 1～5は竹之内式である。1・2は平行沈線と格子目によって文様施文される。3・4は擦痕文が施される。5は丁寧な造りである。6～10は三尸式で、横線文を施す。11～14は早期末葉、常世2式である。条痕文を地紋とする土器で、11は口辺部に条線文を施し、12・13は絡条体を施文する。前期 15～19は黒浜式である。16は格子目が施される。17は地紋に縄文を施し円形竹管で文様を施文する。20～24・26・27は浮島式である。20は口辺部に凹凸文を施している。21は輪積み痕を残し、爪形文を施す。22は輪積み痕を残し、条線文を施文する。23・24は輪積み痕を残し、沈線を施す。27は平行沈線により文様意匠される。25・28・29は浮島I～II式である。25・28は口辺部に凹凸文、体部に平行沈線文を施す。29は28の体部片である。30～37は浮島I式である。30は微隆起帯の上位に平行沈線、下位に貝殻を施文する。31～33は平行沈線が施文される。37はミガキを施し、沈線を施文する。38～41は浮島III式～興津I式である。38は凹凸文で、口辺部に条線文を施す。39は貝殻文が施される。41は沈線が菱形状に意匠される。42～91は興津I式である。48～53・92～100は貝殻腹縁文を施文する土器群で、50は竹管文、51は貝殻背圧痕を施す。44～47は貝殻背圧痕を地紋とし、45は横走る沈線と隆帯を施文する。54～69・72・74は口辺部に条線文を施す。53・81・82は竹管文と平行沈線を施文する。54・55は竹管文を施す。56～58は竹管文を施したのちに三角文を施文する。56は爪形文が施され、口縁部が押圧される。59は貝殻文が施文される。60は草の茎の圧痕が施される。61は縦の沈線を施し胎土が粗い。62～65は無文の口辺に角押し文、66・67は平行沈線文上に三角文を施文する。62・64は体部に平行沈線文を施す。68・72は平行沈線文を施す。



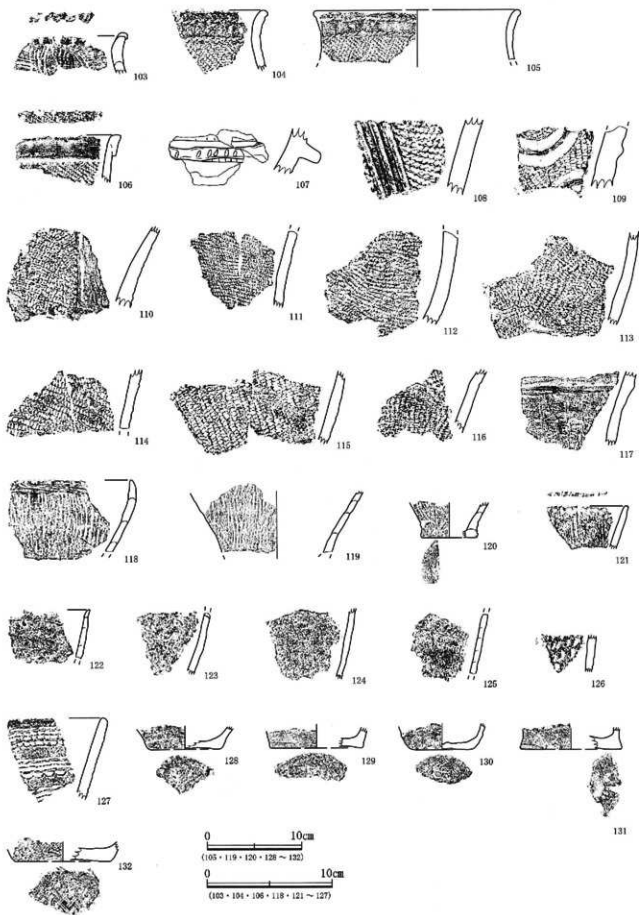
第 13 図 縄文時代遺構外出土遺物 (1)



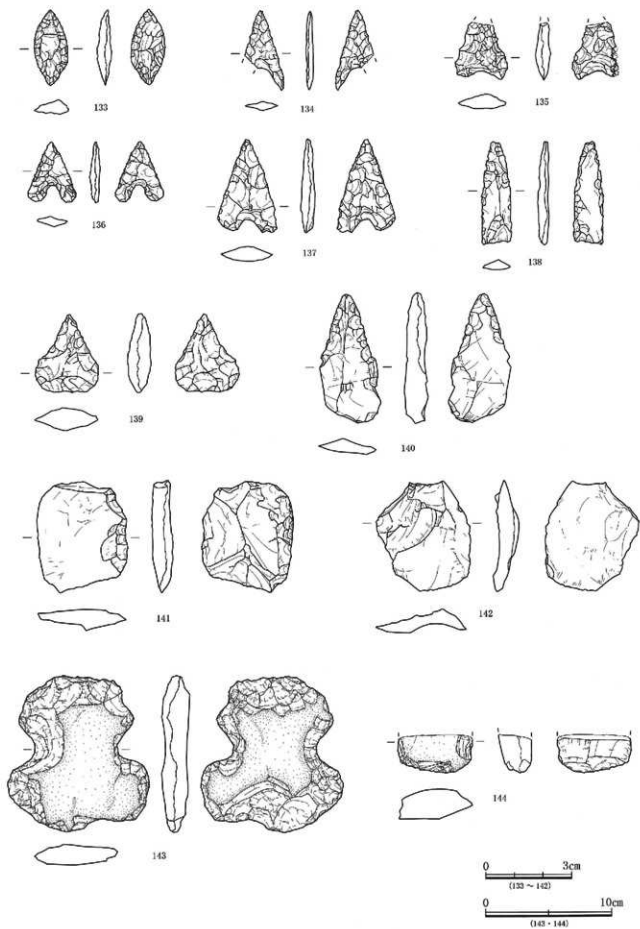
第 14 图 縄文時代遺構外出土遺物 (2)



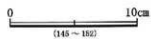
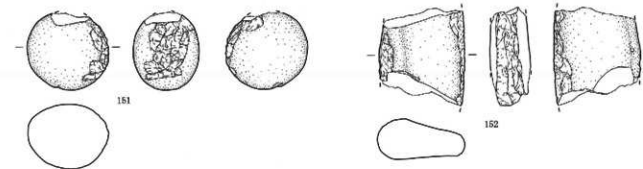
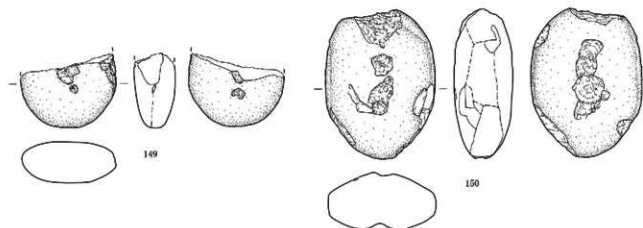
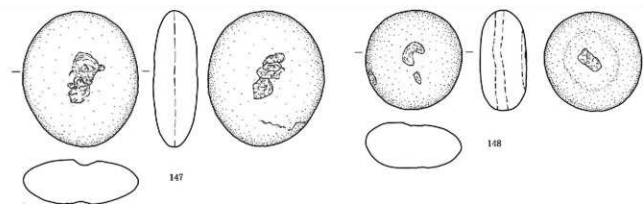
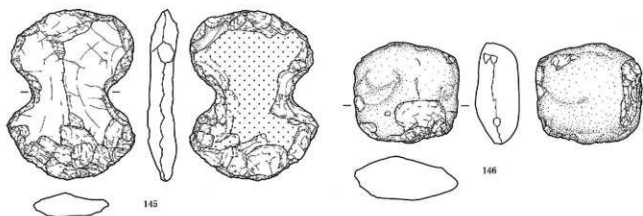
第15圖 縄文時代遺構外出土遺物(3)



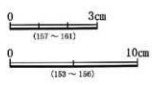
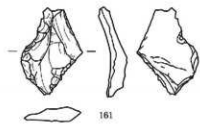
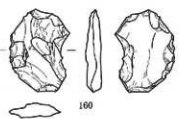
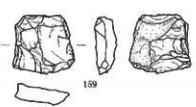
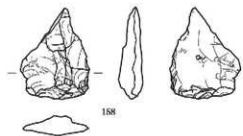
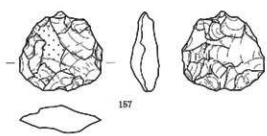
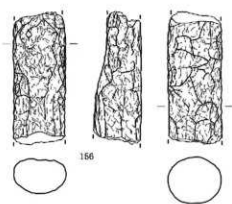
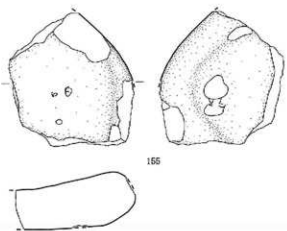
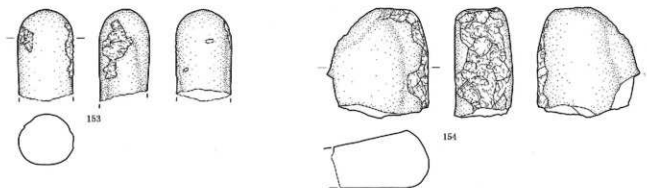
第 16 図 縄文時代遺構外出土遺物 (4)



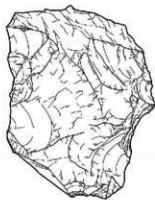
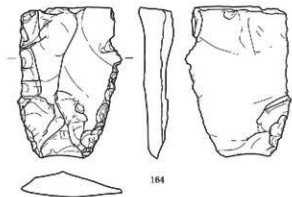
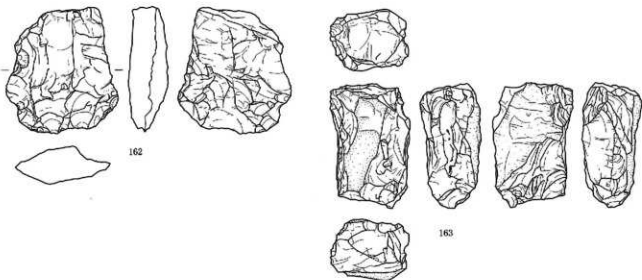
第 17 図 縄文時代遺構外出土遺物 (5)



第18図 縄文時代遺構外出土遺物(6)



第 19 圖 縄文時代遺構外出土遺物 (7)

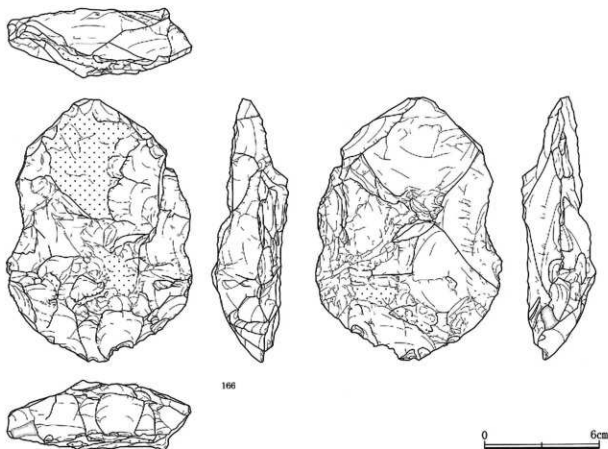


165

0 6cm
(165)

0 6cm
(162 ~ 164)

第 20 圖 縄文時代遺構外出土遺物 (8)



第 21 図 縄文時代遺構外出土遺物 (9)

である。152 は全体的に自然面が多く残っているが、両側には明瞭な敲打痕がある。上・下端は欠損している。側面に敲打痕が著しい。半分は欠損している。断面はつぶれた楕円形で、擦痕はない。153 は側面に敲打痕が認められる。半分は欠損している。断面は楕円気味の円形で、擦痕はない。154 は一辺のみ細かい敲打痕が確認できる。

155 は石皿で、裏面に 2 か所凹が確認でき、多孔石であった可能性がある。

156 は石棒で、上・下端欠損。断面は半分より上が楕円で、下は円。157～162・164 は器種不明、163・165・166 は石核である。

B 弥生時代

土坑1基を検出した。遺物は土坑内の上出遺物を除けば、調査区内から出土したものは僅かで、遺構・遺物ともに調査区内での分布の傾向は判然としない。

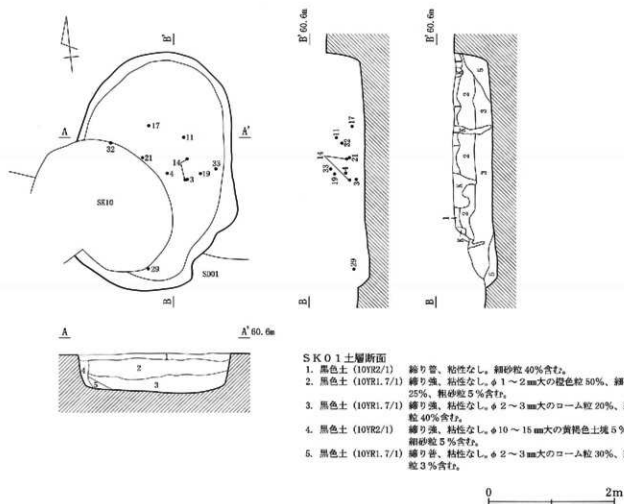
1) 土坑

SK01 (第22～24図、第9～12表、図版7・28～30)

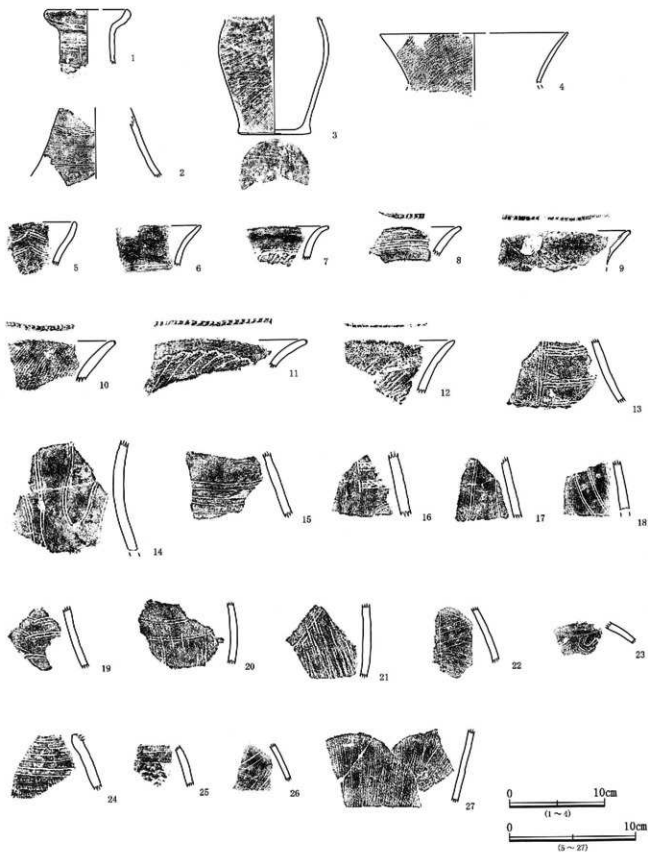
調査区南部の3J・Kグリッドに位置する。SD01、SK10に切られている。平面形は楕円形を呈し、断面形態は台形をしている。規模は長径3.8m、短径2.5m、深さは0.64mである。主軸方向はN-17°-Eを示す。

遺物は埋積土中層から弥生土器の足洗式、東中根式等の土器片が多量に出土した。

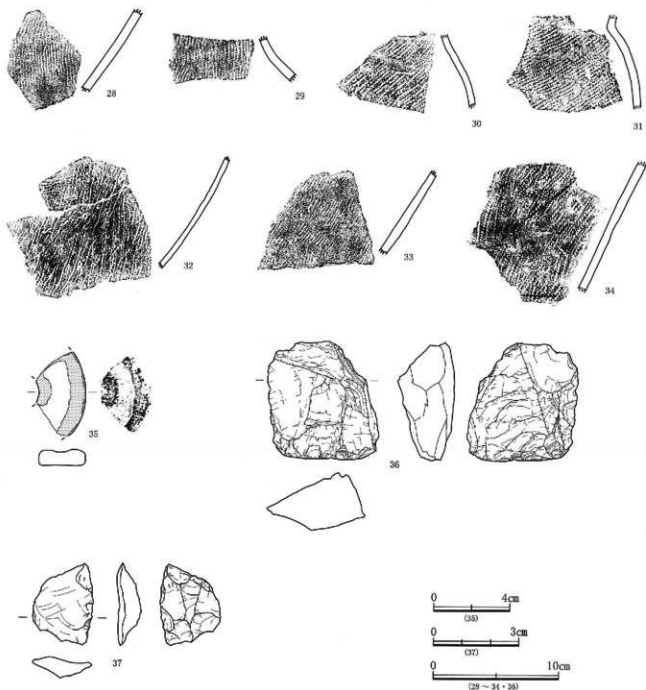
1・5は口辺部片で連弧文を施文する。1・2・15は頸部に横走文、19は連弧文を施文する。4・6～12は外反する口辺部片で6・8は横走文が施文され、8は朱が塗布されている。8～12の口縁部には刻みが施される。4・10は縄文、7・11・12は燃糸文。14・17・18は平行沈線で文様施文さ



第22図 SK01



第 23 圖 SK01 出土遺物 (I)

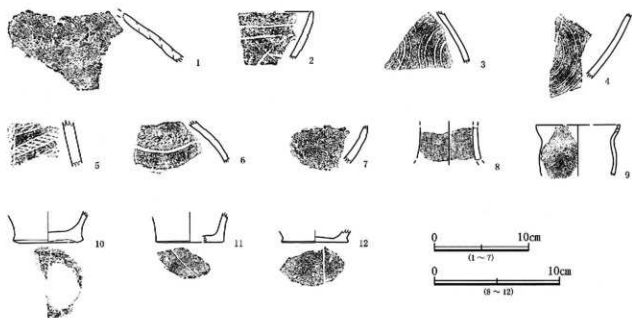


第24図 SK01出土遺物(2)

れ、20・21は平行沈線に撚糸が施文される。22は平行線を三角形に施文する。23は平行線を蛇行しながら施文している。24は横走文に無花果状の押圧痕が認められる。25・26は平行線文と付加条縄文を施文する。27・30・32・34は付加条縄文が施文される。28・29・31・33は縄文が施文される。35は土器転用の紡錘車で、底部片の内面を磨り、中央を穿孔している。36・37は石器である。36は打製石斧、石材は安山岩かデイサイトと思われる。

2) 遺構外出土遺物(第25図、第13表、図版31)

C区からわずかに出土しているほかは調査区内の出土はなかった。



第25図 弥生時代遺構外出土遺物

1は擬縄文が横位に施文され、内面には粘土紐の痕跡が認められる。2・6は沈線で区画し縄文で充填している。3・4は渦巻き文。5・8は頸部片で、5は斜めに刻みを付けた平行線で文様施文される。8は縦の平行線で区画し、間を菱形に施文した平行線で充填している。7・9は付加条縄文で文様施文し、9の口辺部には穿孔が認められる。10～12は底部片で木葉痕が認められる。

C 古墳時代～奈良時代

古墳時代～奈良時代の遺構は古墳1基、土坑3基を検出した。

1) 古墳

1号墳(SZ01)(第26～35図、第14～17表、図版7～13・31～34)

位置

調査区北部の14Q～S、15・16R・Sグリッドに位置し、北東・北西の周濠の一部が調査区外に延びている。調査前には古墳の存在は想定し得なかった。また、調査区内および周囲には古墳は確認されていない。

墳丘および外部施設

本墳は推定16.5mの円墳である。後世の耕作により盛り土、旧表土等は失われていた。周濠は東側で上幅0.7m、底幅0.35m、深さ0.56mである。西側で上幅0.65～0.9m、底幅0.4～0.7m、深さ0.24mである。南側で上幅0.8m、底幅0.4m、深さ0.51mである。北側で上幅0.8m、底幅0.4m、深さ0.42～0.55mである。埋積土は自然堆積である。

周溝内には2基の土坑が確認された。1号土坑は北部に位置する。平面形は楕円形を呈し、断面形は台形をしている。規模は開口部長1.65 m、幅0.45 m、深さは0.35 mである。主軸方向はN-85°-Wを示す。出土遺物はなかった。2号土坑は南東部に位置する。平面形は長方形を呈し、断面形は台形をしている。規模は開口部長1.2 m、幅0.8 m、深さは0.65 mである。主軸方向はN-67°-Wを示す。底面中央にわずかに段を有する。出土遺物はなかった。

石室

南に開口する横穴式石室で、主軸方向はN-9°-Wを示す。羨道と玄室からなる構造をしている。閉塞施設は後世の擾乱のため残存せず不明である。石室掘り方の規模は長さ4.8 m、幅3.1 mを測る。天井石はすでに外され、残存していない。奥・側壁も後世の擾乱を受け、石材がほとんど抜き取られていた。その中で、羨門の東側と玄門の東側の石材が遺存していた。羨門石は長さ0.55 m、幅0.5 m、高さ0.38 mの川原石で作られ、上面にはノミで加工された痕跡が認められた。また、羨門上の確認面で凝灰岩の切石が出土したが、これは羨門あるいは天井の石材と推定される。玄門石は長さ0.56 m、幅0.3 m、高さ0.45 mの凝灰岩の切石で作られていた。奥壁部分は長さ1.55 m、幅0.6 mの掘り込みが確認され、ここに奥壁の石材が据えられていたものと推測される。床石は抜き取られていて遺存していない。

羨道と玄室の境には、掘り方床面に長さ0.7 m、幅0.6 mの石の抜き取り痕と考えられる掘り込みが検出されたことから、玄室入口には軛石が設置されていたものと推測される。

裏込めは推定側壁の外側約0.3~0.4 mには川原石を含んだ白色粘土を含んだ黒色土によって埋められていた。また、この裏込め土の外側、石室掘り方の壁面までは粘土と黒色土・ロームが互層になって埋められていた。

前庭部は羨門から南側周溝まで「八」字状に伸びている。断面形は台形をしている。規模は全長5.1 m、幅2.0~3.4 mを測る。底面はローム層を掘り込んだのち厚さ10~20 cmほどを、黒色土と凝灰岩の碎石で埋め戻し、羨門から南側周溝に向かって緩やかに傾斜している。このことから石室の石材をここで加工したものと推測される。

出土遺物

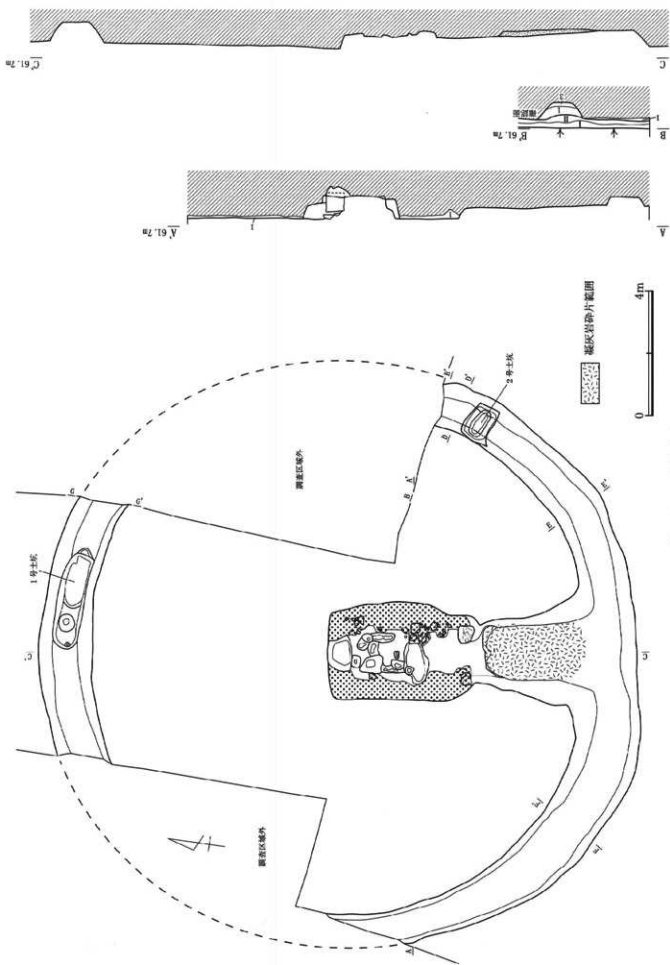
遺物は土師器壺、須恵器長頸壺、コップ型、坏、高台付坏、蓋、鉄製品鏃、鏃、鞘口金具、刀子が出土した。刀子を除くこれらの遺物は前庭部から南側周溝にかけての埋積土中位から出土した。須恵器類は大型の長頸壺(頸部のみ)を除きそのほとんどが細片状態で出土した。鉄製品も個体はほぼ形状を保ちつつも本来の状況ではなかった。刀子は北側周溝の埋積土中より出土した。これらのことから、遺物は本来石室内に置かれてあったものが、後世の擾乱(盗掘か)によってその本来の位置を失ったものと推察される。また、石室の擾乱層から石臼が出土した。

土師器

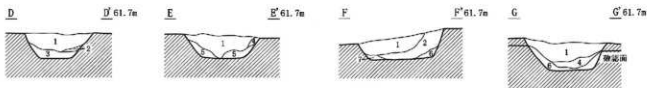
21は坏で口辺部ヨコナデ、体部外面はヘラケズリされる。22は壺で口辺部ヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリされる。23は小型甕で口辺部ヨコナデ、体部外面は磨滅している。

須恵器

1・10~12・16・17・24は蓋である。1はつまみの形状が太い扁平半球形、10はやや山形になる。



第26图 1号墳(1)



1号墳周埋土層断面 (B-B' ~ G-G')

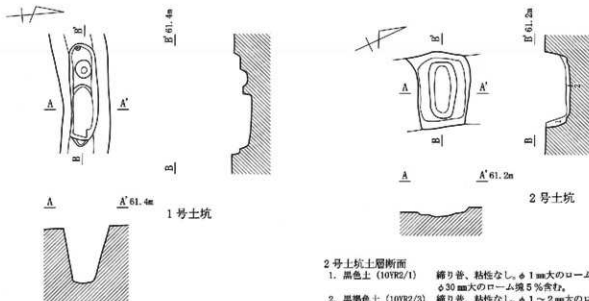
1. 黒色土 (10YR1.7/1) 締り普、粘性なし。φ0.5mm大の白色粒・橙色粒3%含む。
2. 黒色土 (10YR1.7/1) 締りややあり、粘性なし。褐色土30%、φ0.5mm大の橙色粒5%含む。
3. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 締り普、粘性なし。φ10mm大の明黄褐色土塊30%、φ0.5mm大の白色粒・橙色粒3%含む。
4. 黒色土 (10YR2/1) 締りややあり、粘性なし。φ0.5mm大の白色粒3%含む。
5. 褐色土 (10YR4/6) 締りあり、粘性なし。φ20mm大の黒色土40%、橙色粒10%含む。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 締りややあり、粘性なし。ローム粒20%、φ20~30mm大のローム塊5%含む。
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 締り普、粘性なし。φ1~1.5mm大のローム粒30%、φ0.3~0.5mm大の白色粒5%含む。

1号墳埋丘土層断面 (A-A' ~ B-B')

1. 黒褐色土 (10YR2/2) 締り普、粘性なし。φ0.3~0.5mm大の白色粒3%含む。(=盛土)

0 2m

第27図 1号墳(2)

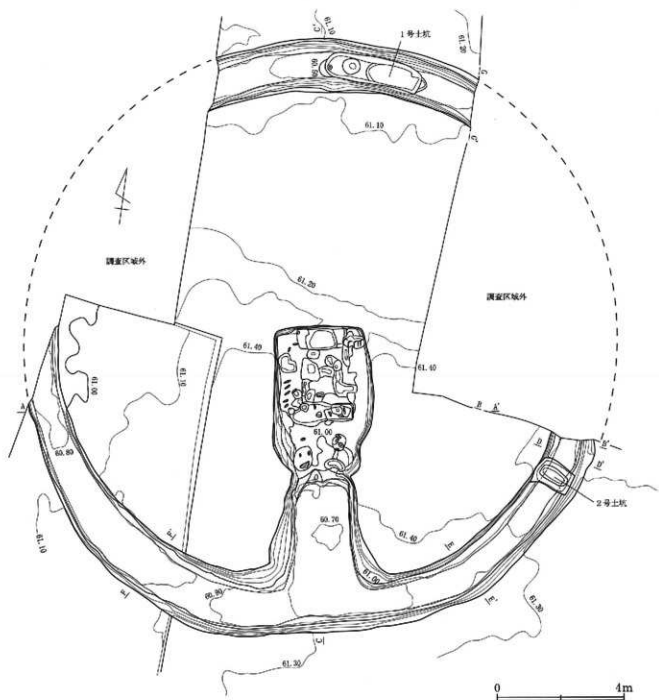


2号土坑土層断面

1. 黒色土 (10YR2/1) 締り普、粘性なし。φ1mm大のローム粒10%、φ30mm大のローム塊5%含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 締り普、粘性なし。φ1~2mm大のローム粒20%、φ10~15mm大のローム塊5%含む。

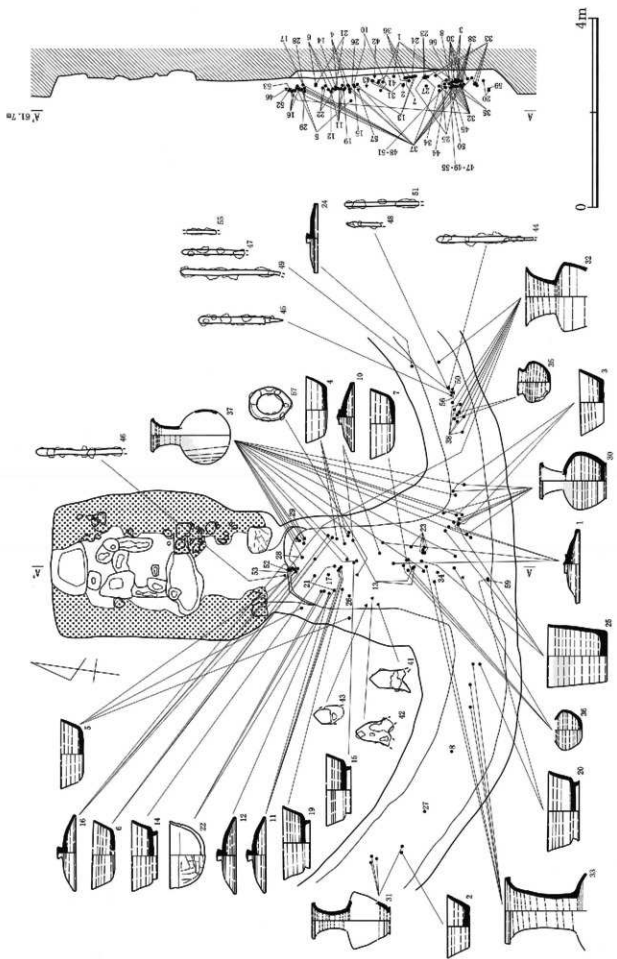
0 2m

第28図 1号墳周埋内土坑

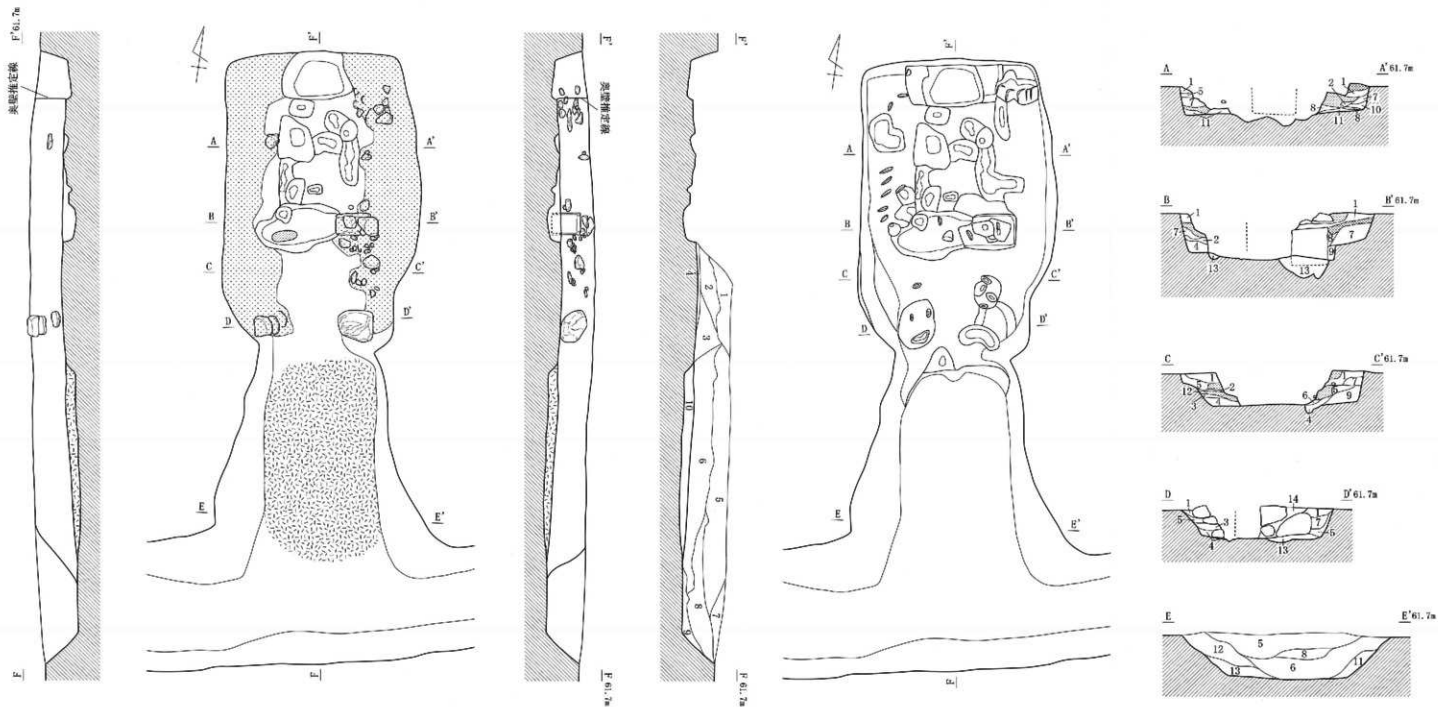


第29図 1号墳等高線図

11・12・16・24は擬宝珠形、17も欠損はしているが同様と考えられる。11・12・16・17は端部に僅かに段が付く程度である。2～9・13は坏である。2・3・9は底部ヘラ切り、4～8・13は底部回転ヘラケズリ、そのうち4～7は胎土・器形ともに近似しているため、同じ窯の製品かと考えられる。14・15・18・19・20は高台付坏で、底部回転ヘラケズリのち付高台である。14・15・18・19は胎土・法量ともに近似する。蓋の11・12・16・17とセット関係と推察される。20は胎土・法量ともにほかの高台付坏と異なる。24は器高が浅く、外面に自然降灰が認められることから、胎土が近似するコップ型土器に伴うものと想定した。25はコップ型土器で底部回転ヘラケズリ、体部外面上位口辺部を除



第 30 图 1 号墳遺物分布图



1号墳土層断面 (E-E'、F-F')

1. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 細り骨、粘性なし、φ20～30mm大の凝灰岩片10%、φ3～5mm大凝灰岩片20%、川原石含む。
2. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 細り骨、粘性なし、φ20～30mm大の凝灰岩片30%、φ30～40mm大凝灰岩片20%含む。
3. 黒色土 (7.5YR2/1) 細り骨、粘性なし、φ5～10mm大の凝灰岩片25%含む。
4. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 細り骨や骨あり、粘性なし、φ3mm大の凝灰岩片10%、ローム20%含む。
5. 黒色土 (10YR2/1) 細り骨、粘性なし、φ10～20mm大の凝灰岩片20%、φ3～5mm大凝灰岩片10%含む。
6. 黒色土 (10YR2/1) 細り骨、粘性なし、φ5～10mm大の凝灰岩片25%、φ5mm大褐色粒5%含む。
7. 黒色土 (10YR2/1) 細り骨、粘性なし、φ3～5mm大の凝灰岩片3%含む。
8. 黒色土 (10YR2/1) 細り骨、粘性なし、φ0.3～0.5mm大の白色粒・褐色粒2%含む。
9. 黒色土 (10YR2/1) 細り骨、粘性なし、ローム30%含む。
10. 凝灰岩片層 黒色土含む。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) 細り骨、粘性なし、φ1～2mm大のローム粒20%、下層に凝灰岩片5%含む。
12. 黒色土 (10YR2/2) 細り骨、粘性なし、φ5～8mm大の凝灰岩片3%、φ1～2mm大凝灰岩片10%含む。
13. 黒色土 (10YR2/1) 細り骨、粘性なし、φ3～5mm大の凝灰岩片3%、φ0.3～0.5mm大ローム粒8%含む。

1号墳主体部土層断面 (A-A'～D-D')

1. 黒褐色土 (10YR2/2) 細り骨、粘性なし、φ20～30mm大のローム塊3%含む。
2. 黒色土 (10YR2/1) 細り骨や骨あり、粘性なし、φ5～10mm大の凝灰岩片・粘土塊10%含む。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 細り骨や骨あり、粘性なし、φ5～10mm大の凝灰岩片10%、φ8～10mm大の褐色土塊5%含む。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 細り骨、粘性なし、φ3mm大の凝灰岩片・ローム粒3%含む。
5. 黒褐色土 (10YR2/3) 細り骨、粘性なし、φ3～10mm大の凝灰岩片20%、白色粘土20%含む。
6. 黒褐色土 (10YR2/3) 細り骨、粘性なし、白色粘土40%含む。
7. 暗褐色土 (10YR3/3) 細り骨、粘性なし、φ5～10mm大の凝灰岩片・白色粘土3%、ローム塊5%含む。
8. 暗褐色土 (10YR3/3) 細り骨、粘性なし、φ2～3mm大の白色粘土粒30%、φ1～2mm大のローム粒20%含む。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) 細り骨、粘性なし、φ3mm大のローム粒3%含む。
10. 黒褐色土 (10YR2/2) 細り骨や骨あり、粘性なし、φ1～2mm大のローム粒20%、下層に凝灰岩片5%含む。
11. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 細り骨や骨あり、粘性なし、φ5～8mm大の凝灰岩片3%、φ1～2mm大凝灰岩片10%含む。
12. 暗褐色土 (10YR3/3) 細り骨、粘性なし、褐色土塊。
13. 暗褐色土 (10YR3/3) 細り骨、粘性なし、φ2～3mm大の白色粘土粒・ローム粒10%含む。
14. 黒色土 (7.5YR2/1) 細り骨、粘性なし、φ5～10mm大の凝灰岩片25%含む。

白色粘土

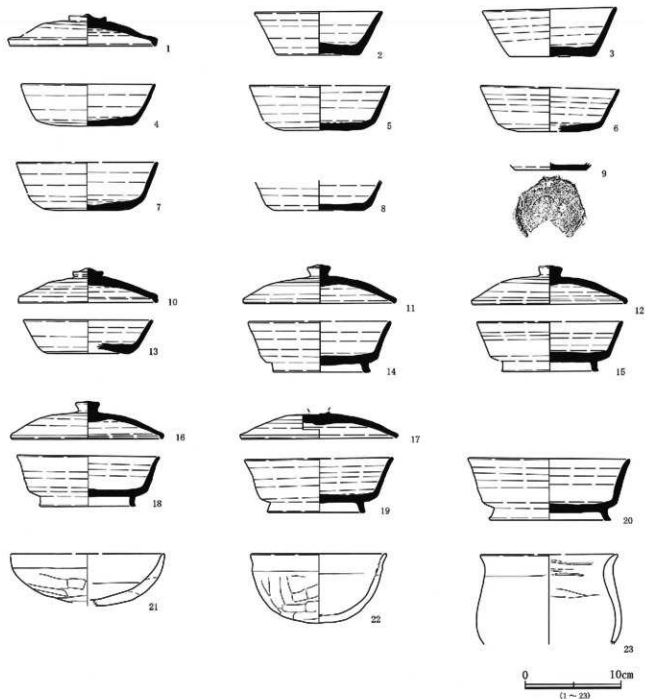
ローム

主体部凝灰岩片

凝灰岩片跡層

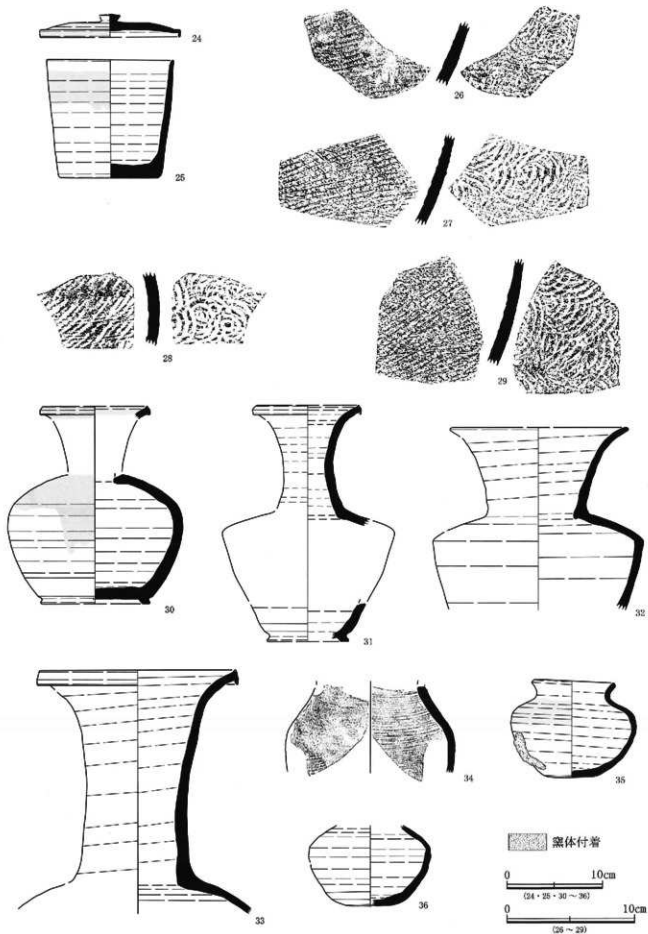
0 2m

第31図 1号墳主体部

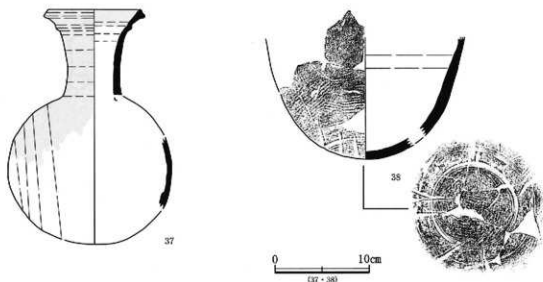


第32図 1号墳出土遺物(1)

き降灰の痕跡が認められる。26～29は大型の壺の破片である。外面に自然降灰が認められる。30～33・37は長頸壺である。30・31は高台付きの長頸壺で、30は外面に自然降灰が認められる。33は大型の長頸壺の口辺部から頸部の破片であるが、体部の破片は残念ながら検出することはできなかった。34～36は小型壺である。35・36は小型の壺で、36は頸部より上位が欠損しているが、35と同様の器形と考えられる。37は長頸壺で、頸部に凸帯が巡り、器形・胎土から東海産と推測される。38は壺で外面にタタキが施され、高台の剝離痕が認められる。



第33图 1号墳出土遺物(2)



第34図 1号墳出土遺物(3)

鉄製品

39・40は刀子で、刃部の中程が欠損している同一個体と考えられる。刃部の根元には樹皮を巻いた鞘が遺存している。41～53は鉄鏃である。41～43は無茎鏃で逆刺は外反している。44～52は長頸鏃である。44～50は柳葉系、52は片刃系である。54～56も棒状を呈しているが鉄鏃と考えられる。45・56は関が認められるが、他は直身化しほとんど見られない。57は倒卵状を呈し、断面形は台形状の鏃である。長径4.5cm、短径3.6cm、厚さ0.6cmを測る。58・59は同一個体である。直刀の鞘口金具の一部と考えられる。推定長径3.0cm、幅3.4cm、厚さ0.1cmを測る。

2) 土 坑

SK19 (第36図、図版13)

調査区北側の16Sグリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、断面形態は台形をしている。規模は長径1.28m、短径0.52m、深度0.19mである。主軸方向はN-6°-Eを示す。

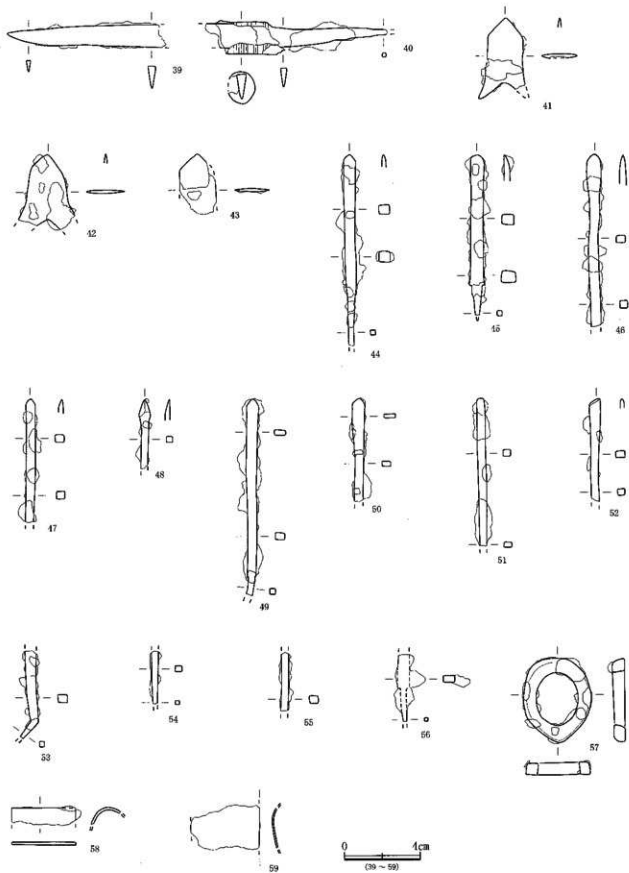
遺物は何も出土しなかった。

SK20 (第36・37図、第18・19表、図版14・35)

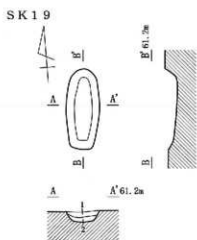
調査区中央の12・13Nグリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、断面形態は台形をしている。規模は長径2.25m、短径0.93m、深度は0.5mである。主軸方向はN-3°-Wを示す。底面中央に長径1.95m、短径0.5m、深度0.5mの楕円形の掘り込みが認められる。

遺物は西壁中央の埋積土上層から須恵器蓋が逆位で、その下位底面付近から刀子が出土した。

1はロクロ整形で、つまみは擬宝珠である。2は刀子で茎に木質が残っている。

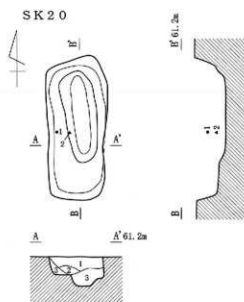


第 35 图 1 号填出土遺物 (4)



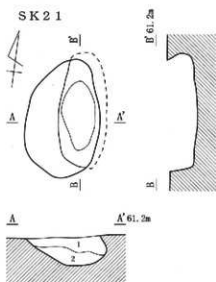
SK 19 土層断面

1. 黒色土 (10YR2/1) 締り強、粘性なし。φ0.3～0.5mm大の白色粒30%含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 締り強、粘性なし。φ0.3～0.5mm大の白色粒20%、φ15～20mm大の黄色土塊含む。



SK 20 土層断面

1. 黒褐色土 (10YR2/3) 締り弱、粘性なし。φ1～2mm大のローム粒20%、φ3～5mm大のローム塊5%、φ5～10mm大の黒色土塊10%含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 締り弱、粘性なし。φ10～20mm大の黒色土塊30%、φ0.5～1mm大のローム粒10%含む。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 締り弱、粘性なし。φ1～2mm大のローム粒20%、φ3～5mm大の黒色土塊5%、φ5～10mm大のローム塊5%含む。

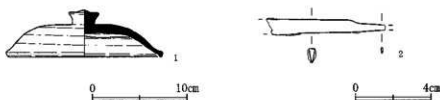


SK 21 土層断面

1. 黒色土 (10YR2/1) 締り強、粘性なし。φ0.5～1mm大のローム粒20%含む。
2. 黒色土 (10YR2/1) 締り弱、粘性なし。φ0.5～1mm大のローム粒30%含む。



第36図 SK 19～21



第37図 SK20出土遺物

SK21 (第36図、図版14)

調査区中央の12Oグリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、断面形態は東壁がかり込まれた台形を呈している。規模は長径1.9m、短径1.18m、深度は0.43mである。主軸方向はN-8°-Wを示す。

遺物は何も出土しなかった。

D 平安時代

平安時代の遺構は竪穴住居跡3軒を検出した。

1) 竪穴住居跡

S101 (第38・39図、第20表、図版14・15・35)

調査区南部の4Fグリッドに位置し、南側調査区外に延びている。平面形は方形と推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸1.9m以上、短軸2.2m以上、深さは0.14~0.16mである。主軸方向はN-28°-Wを示す。カマドは北壁の中央に設けられている。左軸がわずかに遺存している。床面は平坦であるが、ゴボウ耕作の攪乱で硬化した部分は認められなかった。床面下はローム層を掘り込んでいるが、柱穴は認められなかった。

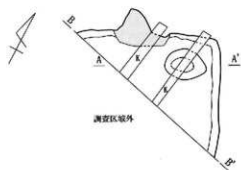
遺物は土師器壺片が、カマド周辺から出土した他、埋積土からは何も出土しなかった。

1~3は土師器壺で、口辺部ヨコナデ、1・2は体部外面がへらケズリされる。

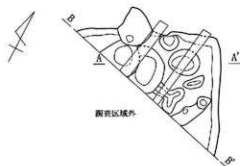
S102 (第40~43図、第21~23表、図版15・16・35・36)

調査区南部の3・4Gグリッドに位置し、南側は調査区外に延びている。平面形は方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸3.0m、短径3.45m、深さは0.342~0.428mである。主軸方向はN-72°-Eを示す。カマドは東壁の中央に設けられ、袖が僅かに遺存している。周溝は壁下を、幅0.26~0.4m、深さは0.09~0.13mが巡っている。床面は平坦で、中央部がわずかに硬化していた。掘り方は南東、北西隅にのみ掘り込みが認められた。柱穴は北壁・南壁の中央にそれぞれ1基ずつ確認され、規模は径0.3m、深さは0.21~0.42mである。

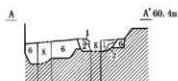
また、床面中央より3基の床下土坑が確認された。SK1は底面に、SK2は壁面に白色粘土が張られていた。SK3は埋積土にカマド構築材が混入していた。規模はSK1が径0.76m、深さは0.277m、



調査区域外

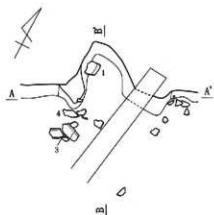
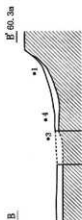
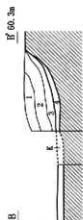
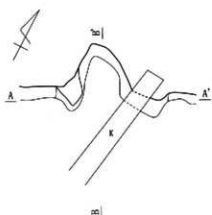


調査区域外

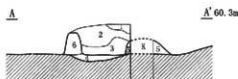


S101土層断面

1. 白粉作土 細り骨、粘性なし、 $\phi 0.3 \sim 0.5$ mmの白色粒10%含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 細り骨、粘性なし、 $\phi 2 \sim 3$ mm大の黄褐色土60%、 $\phi 2$ mm大の焼土3%含む。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 細り骨、粘性なし、 $\phi 10 \sim 20$ mm大のローム塊10%、 $\phi 1 \sim 2$ mm大のローム粒20%、 $\phi 2 \sim 3$ mm大の焼土粒含む。
4. 褐色土 (10YR4/4) 細り骨、粘性なし、 $\phi 2 \sim 3$ mm大の焼土粒3%含む。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 細り骨、粘性なし、 $\phi 5 \sim 10$ mm大のローム塊3%含む。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 細り骨、粘性なし、 $\phi 5 \sim 10$ mm大のローム塊3%含む。

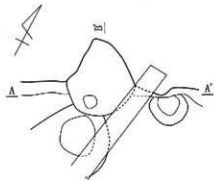


遺物分布図



S101カマド土層断面

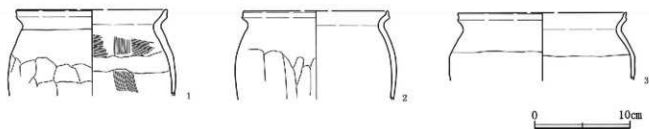
1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 細り骨、粘性なし、 $\phi 5$ mm大の焼土粒・褐色粘土5%含む。
2. 褐色土 (7.5YR4/4) 細り骨、粘性なし、 $\phi 2 \sim 3$ mm大の焼土粒3%含む。
3. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 細り骨、粘性なし、 $\phi 2 \sim 3$ mm大の焼土粒5%、炭化物含む。
4. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 細り骨、粘性なし、粒子少ない。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) 細り骨、粘性なし、 $\phi 2 \sim 3$ mm大の白色粒10%含む。
6. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 細り骨、粘性なし、 $\phi 2 \sim 3$ mm大の焼土粒6%、白色粒・炭化物含む。



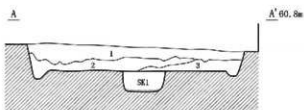
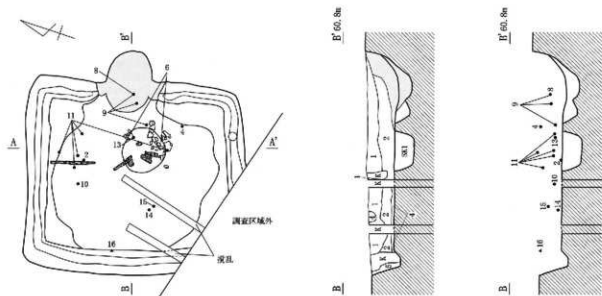
遺物分布図

掘り方

第38図 S101



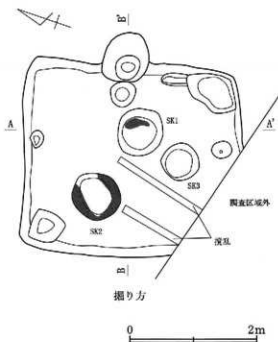
第39図 SIO1出土遺物



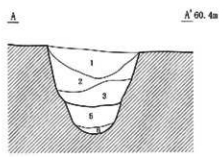
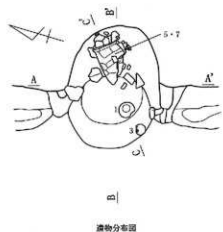
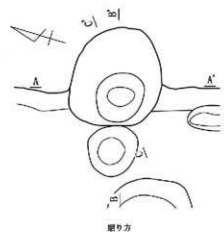
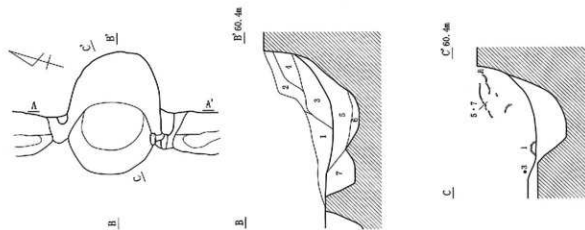
SIO2土層断面

1. 黒色土 (10YR1.7/1) 細り甚、粘性なし、 $\phi 0.3\text{mm} \sim 0.5\text{mm}$ の白色粒30%微砂粒含む。
2. 黒色土 (10YR1.7/1) 細り甚、粘性なし、 $\phi 0.3\text{mm} \sim 0.5\text{mm}$ の白色粒5%、 0.5mm 粘土粒3%、炭化粒含む。
3. 黒色土 (10YR2/1) 細り甚、粘性なし、 $\phi 0.3\text{mm} \sim 0.5\text{mm}$ の褐色粒5%、 $\phi 0.5 \sim 1\text{mm}$ の白色粘土粒10%、炭化粒含む。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 細りややあり、粘性なし、 $\phi 0.5 \sim 1\text{mm}$ のローム粒20%。ローム含む。
5. 黒褐色土 (10YR2/3) 細り甚、粘性なし、 $\phi 0.3 \sim 0.5\text{mm}$ のローム粒30%含む。

■ 粘土



第40図 SIO2

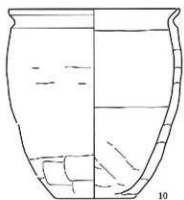
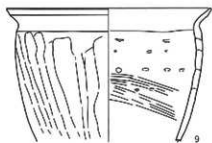
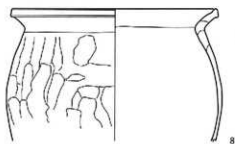
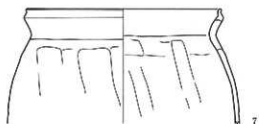
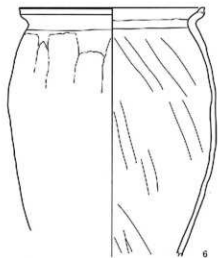
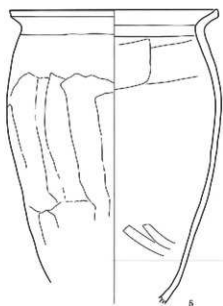
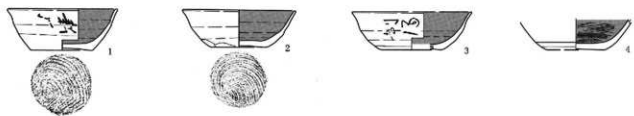


SIO2カマド土層断面

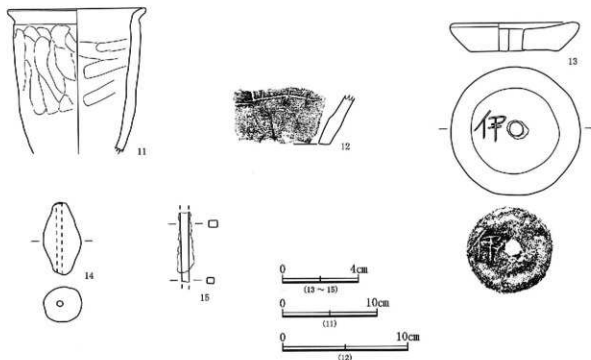
1. 黒褐色土 (10YR2/3) 締り強、粘性なし。φ2~3mm大の白色粘土粒30%、φ5mm大の礫石2%含む。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 締り普、粘性なし。φ0.5~0.8mm大の白色粘土粒50%、礫含む。
3. 暗褐色土 (10YR3/4) 締り普、粘性なし。φ1~2mm大の白色粘土粒、焼土粒10%含む。
4. 黒褐色土 (10YR2/3) 締り普、粘性なし。φ0.3~2mm大の白色粘土粒50%、φ1~2mm大の焼土粒3%、φ3~1mm大の礫含む。
5. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 締り普、粘性なし。φ2~3mm大の焼土塊20%、5~10mm大の焼土塊3%含む。
6. 褐色土 (7.5YR4/4) 締り普、粘性なし。φ1~2mm大の焼土粒、炭化粒3%含む。
7. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 締り普、粘性なし。φ1~2mm大のローム粒10%含む。



第41図 SIO2カマド



第 42 图 S I O 2 出土遺物 (I)



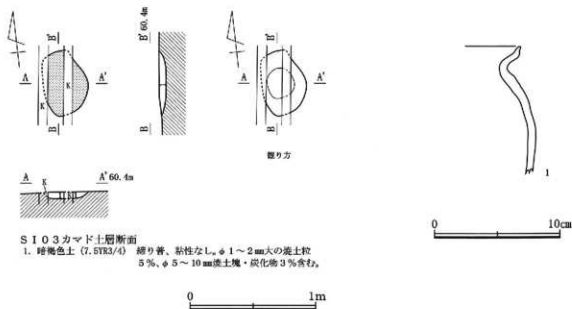
第43図 SIO2出土遺物(2)

S K 2が径0.77 m、深さは0.133 m、S K 3が径0.6 m、深さは0.13 mである。

遺物は土師器環、甕、紡錘車、土錘、鉄製品が出土した。土師器環(2)は住居中央北寄りの床面上より正位の状態、紡錘車(13)は住居中央付近の床面上、土師器甕(6)はS K 1の上面でつぶれた状態で出土し、床面上には炭化材が認められた。そのほかの遺物は埋積土中位から住居の中央より北側に比較的多く出土している。

土師器甕類はカマドの埋積土中及びカマド前床面上より出土している。これらの甕類は、接合後60%以上の復元状態であるが、出土した時点では破片の状態で纏まっていた。これらの甕には外面に焼土が付着していたことなどから、カマド構築材に使用されたものが、カマドの廃棄とともに周辺に廃棄されたものと考えられる。また、土師器環(1)はカマド掘り方底面に逆位の状態出土したことからカマド廃棄に伴う何らかの行為の表れではないかと推察される。

1~4は土師器環で、ロクロ整形、内面が磨きのち黒色処理される。2は体部下手が手持ちヘラケズリされる。1は外面に右から左方向に「新口」の墨書が書かれている。3は外面に左から右方向に墨書が2文字書かれているが判読不明である。5~8は土師器甕、9~11は小型甕である。口辺部ヨコナデ、体部外面はヘラケズリされる。10は体部下手を横方向にヘラケズリされる。12は甕の破片で、外面にヘラ書されるが文字か記号かは不明である。13は紡錘車で、全面がよく磨かれている。下面にヘラ書が認められる。面数が足りないようにも見えるが「伊」と判断した。14は土錘で菱形状をしている。14は両端を欠損するが鉄錘と考えられる。



S103カマド土層断面
 1. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘り着、粘性なし。φ1~2mm大の炭土粒
 5%、φ5~10mm焼土塊・炭化物3%含む。

第44図 S103カマド・出土遺物

S103 (第44図、第24表、図版17・36)

調査区南部の4Fグリッドに位置し、焼土の痕跡からカマドと判断した。カマドのみの確認にとどまった。規模は長さ0.5m、幅0.2mの範囲に焼土を確認した。

遺物は土師器甕が焼土中より出土した。

1は土師器甕で口辺部ヨコナデ、体部外面はヘラケズリされる。

E 中世

中世の遺構は調査区の南部から溝、地下式坑が検出され、1号墳からは主体部の石材を利用した石塔の基部が出土した。

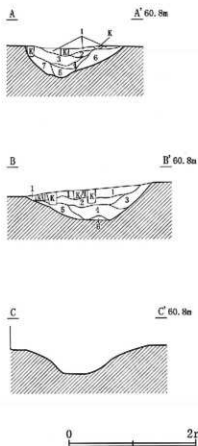
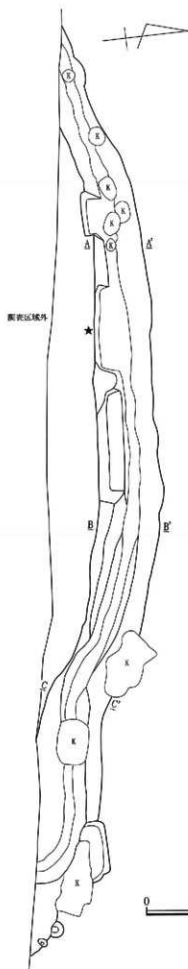
1) 溝

SD01 (第45・46図、第25表、図版17・36・37)

調査区南部の3H~Kグリッドに位置し、南側は調査区外に延びている。SK01・10を切り、東側は攪乱を受けている。平面形は台地縁辺部に向かって弧状に延びるもので、断面形態は台形状をしている。規模は全長26.8m以上、上幅1.7~2.2m、深度0.29~0.66mである。中軸方位はN-102°-W、N-88°-W、N-95°-Eを示す。底部はほぼ平坦である。

溝の南側縁から火葬骨が出土した。火葬骨は耕作土直下の検出であったため火葬墓なのか茶毘所なのかは不明である。

遺物は埋積土中位より常滑焼壺片、青磁碗片が出土した。



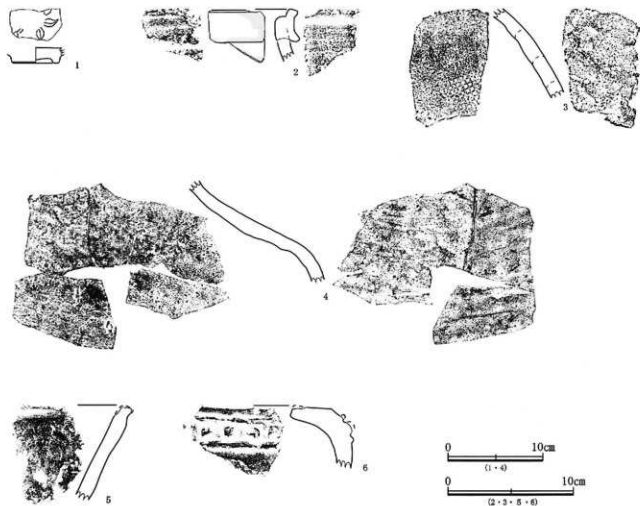
SD01土層断面

1. 黒色土 (10YR2/1) 練り器、粘性なし、 $\phi 0.5\text{mm} \sim 1\text{mm}$ のローム粒10%含む。
2. 黒色土 (10YR2/1) 練り器、粘性なし、 $\phi 0.3\text{mm} \sim 0.5\text{mm}$ のローム粒5%含む、黒色土塊混じる。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 練り器、粘性なし、 $\phi 0.5\text{mm}$ のローム粒40%、 $\phi 3 \sim 10\text{mm}$ のローム塊5%含む。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 練り器、粘性なし、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム粒20%、 $\phi 2\text{mm}$ の褐色粒3%、 $5 \sim 10\text{mm}$ のローム塊3%、微砂粒含む。
5. 黒褐色土 (10YR2/3) 練り器、粘性なし、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム粒10%、 $\phi 3 \sim 5\text{mm}$ のローム塊5%含む、黒色土塊混じる。
6. 黒褐色土 (10YR2/3) 練り器、粘性なし、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム粒20%、 $\phi 3 \sim 5\text{mm}$ のローム塊3%含む。
7. 黒褐色土 (10YR2/3) 練り器、粘性なし、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム粒10%、 $\phi 3 \sim 5\text{mm}$ のローム塊5%含む、黒色土塊混じる。
8. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 練り器、粘性なし、 $\phi 1\text{mm}$ のローム粒2%、微砂粒含む。
9. 黒色土 (10YR2/1) 練り器、粘性なし、ローム50%含む。
10. 黒褐色土 (10YR3/1) 練り器、粘性なし、ローム50%含む。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) 練り器、粘性なし、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム粒5%、 $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ のローム塊2%含む。

★ 火葬骨出土位置



第45図 SD01



第46図 SD01出土遺物

1は竜泉窯産の青磁碗で13・4世紀の所産である。見込みに印花文が認められるが、傷がついていて文様は判然としない。2～4は常滑産の甕、5は鉢である。3は外面に格子目のタタキが認められ、13・4世紀の所産である。ほかは15・6世紀。6は土製の火鉢で15・6世紀の所産である。

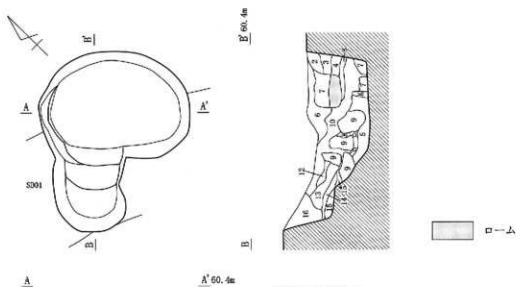
2) 地下式坑

SK10 (第47図、図版17)

調査区南部の3J・Kグリッドに位置し、SK01を切り、SD01に切られている。主室の平面形は楕円形を呈し、竪坑は南側に突出する。竪坑と主室の連結部は有段である。主室の規模は長軸2.87m、短軸2.34m、深度は1.6mで、これに幅1.1m、長さ1.05mの竪坑が付く。竪坑を基準とした主軸方向はN-135°-Wを示す。

埋積土は天井部落下後、埋め戻されたものである。

遺物は覆土中から弥生土器片が出土しているが、これはSK01の埋積土が流れ込んだためと考えられ、遺構に伴う遺物は出土しなかった。



SK 10 土層断面

1. 黒色土 (10YR1.7/1) 締り善、粘性なし。φ0.5～2mm大のローム粒10%、細砂粒含む。
2. 黒色土 (10YR1.7/1) 締り弱、粘性なし。
3. 黒色土 (10YR1.7/1) 締り、粘性なし。φ1～3mm大のローム粒50%、φ10～20mm大の黒色土塊・ローム塊5%含む。
4. 明褐色土 (7.5YR5/6) 締り、粘性なし。φ1～2mm大の黒色土粒50%含む。
5. 黒色土 (10YR1.7/1) 締り、粘性なし。φ1～2mm大のローム粒10%、φ10～20mm大のローム塊5%含む。
6. 黒色土 (10YR1.7/1) 締り強、粘性なし。φ0.3～1mm大の橙色粒5%、φ0.3～0.5mm大の白色粒10%含む。
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 締り強、粘性なし。φ0.3～1mm大の橙色粒10%、φ0.3～0.5mm大の白色粒3%、φ10mm大のソフトローム塊含む。
8. 黒色土 (10YR2/1) 締り強、粘性なし。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) 締り強、粘性なし。
10. 黄褐色土 (10YR5/6) 締り、粘性なし。形状でφ10～20mm大のローム塊10%含む。
11. 黄褐色土 (10YR5/6) 締り強、粘性なし。
12. 黒褐色土 (10YR2/2) 締り善、粘性なし。
13. 黄褐色土 (10YR5/6) 締り、粘性なし。φ3～10mm大のローム塊30%含む。
14. 黒褐色土 (10YR2/2) 締り弱、粘性なし。φ3～5mm大のローム粒40%含む。
15. 黄褐色土 (10YR5/6) 締り善、粘性ややあり。φ1～2mm大の白色粒粒10%含む。
16. 黄褐色土 (10YR5/6) 締り強、粘性ややあり。φ1～2mm大の白色粒粒3%、φ10～20mm大のローム塊10%含む。

第47図 SK 10

3) 石塔

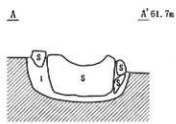
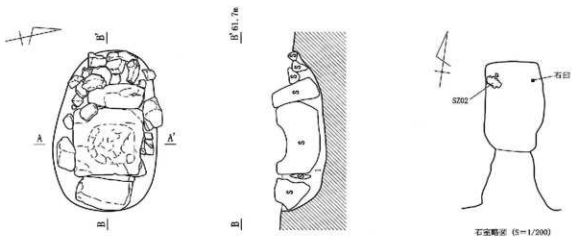
SZ 02 (第48図、第26表、図版17・37)

調査区の北部15Rグリッドに位置し、1号墳(SZ01)を切っている。上部の構造物は失われ、基部のみが遺存していた。基部は方形に加工された石材を他の石材によって固定されている。掘り方の規模は、長軸0.86m、短軸0.54m、深度0.25mである。主軸方向はN-12°-Eを示す。

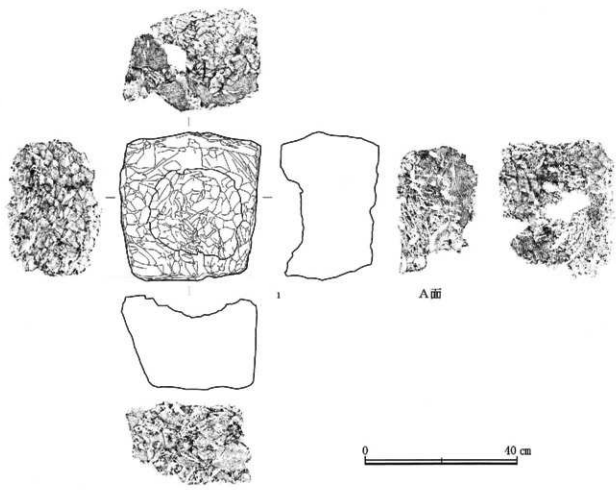
なお、石塔下には1号墳の石室が存在し、石室の埋積土は後世の攪乱により凝灰岩の砕片を多く含む黒色土で埋められていた。そのため石塔下で墓坑の土層断面の観察を行なったが、墓坑の痕跡を認めることができなかった。

遺物は何も出土しなかった。図示した石材は石塔の基部にあたるものである。

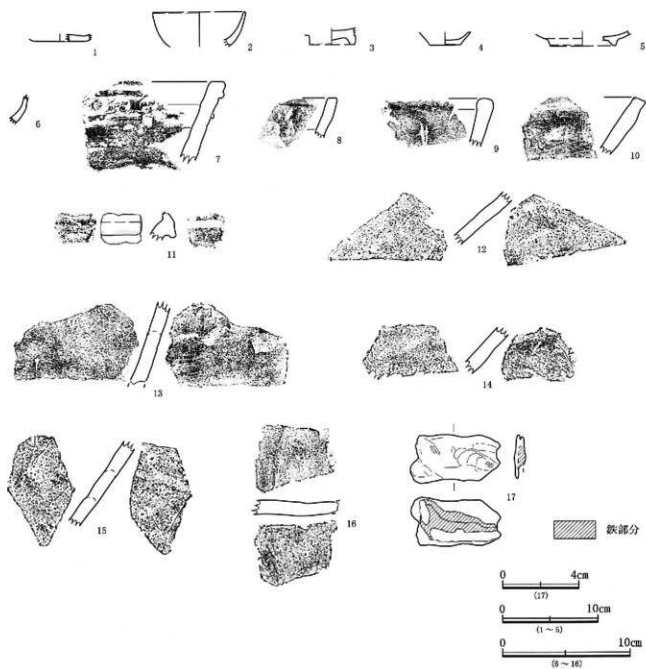
1の平面形は方形を呈し、断面は台形をしている。規模は、長さ39.2cm、幅35.7cm、高さ25.5cmである。上面には径23×24cm、深さ6cmの半球形の凹みが認められる。石材は1号墳の主体部に使用されてい



SZ02土層断面
 1. 黒色土 (10YR2/1) 締りき、粘性なし、 ϕ 5mm~10mmの凝灰岩 10%、 ϕ 0.3mm~0.5mmのローム粒 10%含む。(掘り方)



第48図 SZ02・出土遺物



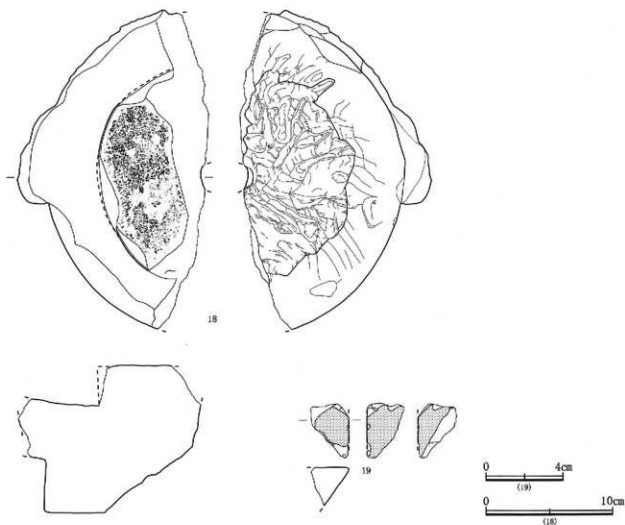
第49図 中世以降遺構外出土遺物(1)

た石材を転用したもので、A面には古墳時代に加工された面がそのまま残されている。石質は凝灰岩である。

4) 遺構外出土遺物(第49・50図、第27～29表、図版37・38)

調査区内より出土した中世以降の遺物について主だったものを記載した。

1はかわらけでロクロ整形される。15・6世紀の所産である。2は肥前系の波佐見焼の碗で18世紀の所産である。3は瀬戸・美濃産の灰釉碗で、18世紀の所産である。4は瀬戸・美濃産の小瓶で、内面に刷毛目(?)が施される。18世紀の所産である。5は瀬戸・美濃産の菊皿で、18世紀の所産であ



第50図 中世以降遺構外出土遺物(2)

る。6は天目碗の破片で、中世と考えられる。7は火鉢、産地は不明で15・6世紀の所産である。8は内耳土器で、15・6世紀の所産である。9は土製の鉢で、15・6世紀の所産である。10は常滑の掛鉢で、15・6世紀の所産である。11～14は常滑の壺・甕類の破片で、11は13・4世紀、他は15・6世紀の所産である。16は渥美の甕で、12・3世紀の所産である。17は銅製品で、裏面には補強のためか鉄素材のものが留められている。小片のため本来の形状は不明。表面に文様を鋳出したような痕跡が認められる。懸け仏か。18は石臼の下石。摩擦面が擦れている。19は砥石である。砥面が2面確認できるが、小破片のため原形は不明である。

第4章 総括

本遺跡は平成20年常陸大宮市教育委員会発行の「茨城県常陸大宮市埋蔵文化財分布地図」においては、その範囲は県道21号線より南側が示されていた。今回、畑地帯総合整備事業三美地区に伴って試掘調査が行われ遺跡が県道の北側に延びていることが確認されたことから事業予定地の道路部分について本調査を行うことになった。調査の結果、縄文時代から中世にかけての多くの遺構・遺物が出土し、前章までにその成果を記してきた。本章においては、改めて今次調査の概要を述べることにする。

遺跡の土地利用の変遷

縄文時代

遺構は竪穴住居跡1軒、陥し穴状土坑1基、土坑1基を確認し、遺物は早期から晩期までの上器・石器が出土した。竪穴住居跡(SI04)は調査区の北端で確認し、時期は前期黒浜式期のものである。全体は調査し得なかったものの全長9.2m以上、幅5.7～6.5mを測り、平面台形状を呈する大型の住居である。この時期の大型住居では栃木県宇都宮市聖山公園遺跡等が著名であるが、県内では管見にはふれない。陥し穴状土坑(SK15)は調査区の南部3Kグリッドに位置し、SK01に切られていた。上面径1.0m×0.73mの楕円形で深度2mある。出土遺物はなかったものの、埋積土に今市パミスの二次堆積が認められたことから早期の所産と考えられる。遺構は形状、推測される時期等から陥し穴状土坑と考えた。陥し穴状土坑は隣接して複数基確認されることが一般的であるが、今次調査では1基のみの確認にとどまった。調査区の北端と南端では比高差0.8mほどしかない緩斜面で、全体としては陥し穴状土坑を設置しづらい地形であったためと想像される。ここで確認されたのは、調査区の南を東西に走る県道が、段丘を西に向かって下りる部分が本来谷状の地形であったことから、この谷に向かった傾斜地に土坑が作られたものと推察される。SK23は調査区の北部15Rグリッドに位置し、1号墳の石室掘り方を掘削後に確認した。規模は上面径0.7m×0.63mの長方形を呈する。時期は不明である。周囲に同時期の遺構が確認できなかったことから、本遺構の性格は不明である。

遺物は、SI04の埋積土から黒浜式期の深鉢の破片が出土したものの、完形品は認められなかった。また、C区とDe区において包含層の調査を行い、遺物は2m方眼の小グリッド単位で取り上げを行った。その結果、13・14Sグリッド、9・10T・Uグリッドから早期竹之内式・三戸式や前期浮島式・興津式の土器片が比較的纏まって出土した。調査区はゴボウの耕作が行われており、この両地区のみに包含層が存在していたとは言い難い。調査区全体では早期の沈線文系の土器群が両グリッドから出土し、早期条痕文系の土器群が、4D～Gグリッドから出土する。前期黒浜式期の土器群はB・C区より若干出土している。中期の土器片はEs区より出土した。このことにより、早期はC区・Fe区とG区にその分布域があり、前期では黒浜式期がSI04周辺、浮島式期の古い時期はC区、興津式期はFe区に分布している。中期には、県道の南に集落が予想されるもの本調査区内では分布を明確にするほどの量は出土していない。このように調査区内で時期により分布域を異にすることが捉えられたが、調査区内においてはゴボウの耕作等により遺構・遺物の検出されなかった地区もあり、これをもって遺跡内で

の時期毎にその分布域を異にしていたとは断言し難い。

弥生時代

SK01の土坑1基のみを検出した。規模は上面が3.8m×2.5mで平面形は楕円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は中央に向かって傾斜する。遺物は足洗式、束中根式の土器片が埋積土から多く出土したが、完形品等は出土しなかった。遺構は他に確認できず、遺物もC区より若干が出土したのみである。このことから、本遺跡には同時期の集落が存在したとは判断できず、本遺構は土葬墓の可能性があると考えられる。

古墳時代～奈良時代

古墳1基、土坑3基を確認した。1号墳(SZ01)は調査区の北部14Q～S、15・16R・Sグリッドに位置し、径16.5mの円墳である。主体部は横穴式石室で、南に開口している。時期は出土遺物から7世紀後半の築造と考えられるが、8世紀の中ごろまでは追葬および墓前祭が行われていた可能性がある。また、同古墳の周濠内より2基の土坑を検出した。1号土坑は北側周濠内に位置し、長軸1.65m、幅0.45m、深度は0.35mで、平面形は楕円形である。2号土坑は長1.2m、幅0.8m、深さは0.65mで、平面形は方形である。遺物はいずれも何も出土しなかった。SK19は古墳の北方約2.5m、16Sグリッドに位置し、規模は上面径1.28×0.52mを測り、平面形は楕円形を呈する。遺物は何も出土しなかった。SK20は12・13Nグリッドに位置し、長軸2.25m、幅0.93m、平面形は隅丸方形である。底面中央に1.95m×0.5m、深さ10cmの掘り込みが認められ、須恵器蓋、刀子が出土している。形状と出土遺物から奈良時代の土葬墓と考えられる。SK21は12Oグリッドに位置し、規模は上面径1.9m×1.18m、平面形は楕円形を呈する。断面が台形を呈し、底面から東壁に向かって抉り込まれており、いわゆる「抉り込み土坑」と判断される。遺物は何も出土しなかったが、形状から墓竈と考えられる。

古墳及びこれらの土坑群は、調査区の北方、径約60mの範囲に集中しており、調査区全体を通して同時期の遺構は確認されなかった。土坑は土葬墓の可能性が高く、古墳を中心とする墓域であったと推考する。

遺物は1号墳の前庭部から周濠にかけての埋積土中から土師器環・埴、須恵器環・高台付環・蓋が出土したがいずれも細片で原位置を保っていなかった。

平安時代

竈穴住居跡3軒を検出した。S101は4Fグリッドに位置し、規模は1.9m以上×2.2m以上を測り、平面形は方形と推測される。カマドは北壁中央に設けられている。S102は3・4Gグリッドに位置し、規模は3m×3.45mを測り、平面形は方形である。カマドは東壁中央に設けられている。床面下には通常の掘り方とは趣を異にする円形の土坑を確認した。土坑は径0.77～0.6m、深度13～28cmを測り、SK1・2は白色粘土が貼られていた。整った形状と白色粘土が貼られていることなどからいわゆる「床下土坑」とは異なる特殊な施設と判断したが、この性格は明確にしたい。S103はカマドのみの検出である。

遺物は土師器環・甕・甌、紡錘車、土鍾、鉄製品が出土した。出土遺物の中で特筆すべきものに墨書土器・へう書土器があげられる。墨書土器はS102出土の土師器環(1・3)の体部外面に横位に書かれている。墨書はそれぞれ2字と判断されるが、遺存状態が不良で「新□」、「□□」としか判読し得なかった。

ヘラ青土器は土師器甗片(12)で、ヘラ青部分の大部分が欠損しているため、残存部分だけでは文字か記号かは判断できない。紡錘車(13)は下面に書かれている。画数が若干少ないように感じるが「伊」と判断したが、文字の意味については不明である。

中世

溝1条、地下式坑1基、石塔1基を検出した。溝(SD01)は3H~Kグリッドに位置し、両端は調査区外に延びている。全長は現況で26.8mを測る。断面は箱葉研形で、溝に付属する施設は確認できなかった。また、溝は直線的ではなく、南に向かって変則的にカーブしている。出土遺物は青磁碗、常滑壺、火鉢の破片が出土した。時期は常滑壺の口辺部片(2)から考えて、15世紀前半を下らないものと推考される。地下式坑(SK10)は3J・Kグリッドに位置する。竪坑を含めた長さは2.9m、幅2.3mを測る。天井部は崩落していた。遺物は出土していない。埋積上の状況からSD01に先行するものと考えられる。石塔は15Rグリッドに位置し、上部の構造物は失われ基部のみが遺存している。長さ39.2cm、幅35.7cm、高さ25.5cmの石材を中心に裏込め状に周辺に礎を配置している。石材は1号墳の石室の石材を使用していたものと考えられる。出土遺物はなく、石塔は石室上面に位置している。石室は石材取得のために攪乱を受けており、石塔に伴う墓壙は確認できなかった。しかし石室掘り方の攪乱坑から石臼の破片が出土しており、この攪乱坑が、石塔より若干位置はずれるものの墓壙であった可能性も捨てきれない。

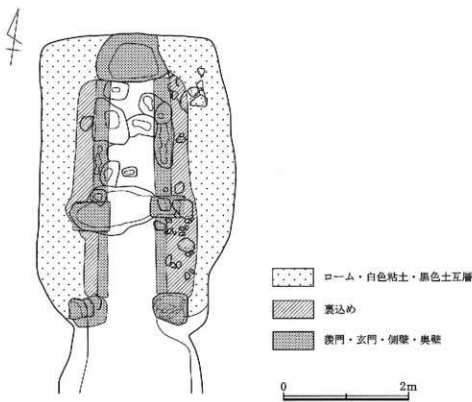
石室の構造について

1号墳は径16.5mの円墳である。主体部は凝灰岩切石の横穴式石室と推察される。横穴式石室は後世の石材転用のためそのほとんどが失われていたが、遺存している石材、裏込めの状況、掘り方 등에서その構造について私見を述べたい。

遺存した石材は東側羨門石と東側玄門石の二石だけである。東側羨門石は自然石で、上面に若干ノミの跡が認められる。東側玄門石は砂質の凝灰岩の切石である。また、石室上面で確認した石塔に転用された石は東側玄門と同様の石材である。裏込めには川原石が含まれているほか、前庭部や石室埋積土中より出土した凝灰岩の破片は味噌穴のある白色の凝灰岩である。したがって、石室に使用された石材は、東側羨門石を除けば2種類の凝灰岩が使われていたと考えられる。砂質の凝灰岩は玄門石の状況を見れば綺麗に長方形に加工され、また、遺存している石塔のように加工石材として良好な状態を保っていたことから、砂質の凝灰岩は玄門などの主要な部分に使用されていたと推察される。また、白色の凝灰岩は奥壁や羨門の確認面上から出土した石材を観察すると、明瞭な加工痕は観察されず、砂質の凝灰岩に比べ個体が大いのが特徴であった。このことから、白色の凝灰岩は壁材や天井材に使用されたものと推察される。

裏込めの状況は、川原石を含む粘土層の部分とローム・白色粘土・黒色土の互層になる部分に分かれている。前者は、推定側壁の裏側からの幅が羨道部分で西壁が20cm、東壁で50cm、玄室部分で西壁が30cm、東壁が30cmを測る。後者は羨道部分で西壁が80cm、東壁が50cm、玄室部分で西壁が50cm、東壁が70cmを測る。奥壁の部分は、前者は確認できず後者のみで幅70cmを測る。

掘り方は羨道、玄室の底面まで攪乱上が確認されたため、現状ではどの程度の残り具合であったかは



第51図 1号墳主体部模式図

不明である。その中で玄門部分と奥壁部分に方形の掘り込みを持つほかは明瞭な掘り込みは認められなかった。羨門部分は床面より若干低くなる程度で、明瞭な掘り込みは確認できなかった。裏込め部分はほぼ平坦で、北東隅と西壁中央北寄りに掘り込みが見られたほかは平坦で、若干の工具痕を残すのみであった。

以上のことから、石材は抜き取られてはいるが、厚さ30cmほどの板状の凝灰岩を組み合わせる石室が構築されていたと考えられる。裏込めに関しては、本墳のように石室壁面と掘り方壁面との間を区分して埋め込まれた事例は管見には触れなかった。また、本遺跡から南方約4.5km、那珂川の対岸に位置する徳化原古墳は石室の長さがほぼ同一であり、幅に関しても両袖式の徳化原古墳玄門幅が本墳の幅とほぼ一致する。このようなことから考えても、本墳の主体部は切り石の石室であったものと推察される。

まとめ

「平成23年12月5日表土掘削中に凝灰岩片が出土する。凝灰岩片の出土地点より北方で弧状を呈する溝状遺構を確認していることから、古墳が想定される。」これが、今次調査における1号墳の発見経緯である。このうち、遺構確認面を凝灰岩片が出土したレベルで抑え、精査した結果石室の掘り込みを検出、サブトレンチの掘削によって周濶を確認したことから、古墳と断定した。本古墳は遺跡地図にも記載されない新規の遺跡であった。常陸大宮市域では富士山古墳群をはじめとする古墳群は久慈川流域

に分布しているほか、旧緒川村内に数基が知られるだけであった。そのため、今次調査によって那珂川流域にも古墳が存在したのを確認したことは大変有意義なことであった。このほか、今次調査区では縄文時代前期の大型住居、弥生時代の土坑、平安時代の集落、中世の墓域等を確認できたことは、遺構の分布密度は高くはないものの大きな成果であった。特に、古墳の石室構造、古墳時代の「挟り込み土坑」、平安時代住居の「床下土坑」は茨城県内では管見には触れないが、隣接する栃木県内では数多く調査されている。したがって、本地域が多少なりとも栃木方面の影響を受けていたものと推察され、その媒体として那珂川の存在が大きかったと考え考えられる。栃木・福島両県との県境に近い当地の特色とみることができようか。

【引用・参考文献】

- 赤井博之 1997 「茨城県の須恵器編年」古代生産史研究会 '97 シンポジウム『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』古代生産史研究会
- 赤井博之 1997 「律令変質期の須恵器の系譜」古代生産史研究会 '97 シンポジウム『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』古代生産史研究会
- 浅井哲也 1992 「茨城県内における奈良・平安時代の土器 (I)」『研究ノート』創刊号 茨城県教育財団
- 浅井哲也 1993 「茨城県内における奈良・平安時代の土器 (II)」『研究ノート』2号 茨城県教育財団
- 稲田健一 2007 「東茨城郡城見町徳化原古墳について—切り石石室を有する古墳の一例—」『考古学の深層—瓦吹堅先生還暦記念論文集—』瓦吹堅先生還暦記念論文集刊行会
- 大川 清 鈴木公雄 工業普通 編 1996 『日本土器辞典』雄山閣
- 小川和博 大澤淳志 2009 『西端遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会
- 川井正一 白田正子 青木仁昌 2003 「茨城県域における文字資料集成 4」『研究ノート』12号 茨城県教育財団
- 瓦吹 堅 監修 1995 『大宮の考古遺物』大宮町教育委員会
- 見玉秀成 2004 『特別展 霞ヶ浦の弥生土器』玉里村立史料館
- 斉藤弘道 2006 『茨城県立歴史館展覧9 茨城の縄文土器』茨城県立歴史館
- 千葉隆司 1999 「古墳時代の鉄鏝 (3)」『豊良校考古』第21号 豊良校考古同人会
- 縄文時代研究班 1998 「茨城県内における浮島式土器の検討 (2)」『研究ノート』7号 茨城県教育財団
- 辻 弘和 原川雄二 2009 『西端遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会
- 生田日和利 2005 「茨城県北部における前方後円墳以後と古墳の終末」『第10回東北・関東前方後円墳研究会 大会 前方後円墳以後と古墳の終末』
- 常陸大宮市教育委員会 2008 『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財分布地図』常陸大宮市教育委員会
- 中・近世研究班 2000 「茨城の常滑V」『研究ノート』第9号 茨城県教育財団
- 中野晴久 1994 「生産地における編年について」全国シンポ「中世常滑焼を追って」資料集 日本福祉大学 知多半島総合研究所
- 西村正衡 1984 「石器時代における利根川下流域の研究」早稲田大学出版部
- 湯原勝美 秋山泰利 2011 『岡原遺跡』常陸大宮市教育委員会
- 古澤 悟 1997 「律令制展開期の須恵器の系譜」古代生産史研究会 '97 シンポジウム『東国の須恵器—関東における歴史時代須恵器の系譜—』古代生産史研究会

第2表 S104出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			調整・文様等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
1	縄文土器	深鉢	-	-	-	羽状縄文	暗褐～黒	細砂粒、纖維	体	埴積上	黒浜式古
2	縄文土器	深鉢	-	-	-	羽状縄文	橙	細砂粒、纖維	体	埴積上	黒浜式古
3	縄文土器	深鉢	-	-	-	半截竹管による押引き文	黒褐	纖維	口辺	埴積上	黒浜式古
4	縄文土器	深鉢	-	-	-	半截竹管による平行沈線	橙	纖維	体	埴積上	黒浜式古
5	縄文土器	深鉢	-	-	-	半截竹管による押引き文	にぶい黄橙	纖維	体	埴積上	埴房式
6	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線	黒褐	纖維	体	埴積上	埴房式
7	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線	淡黄橙	纖維	体	埴積上	埴房式
8	縄文土器	深鉢	-	-	-	捺糸	黒褐	纖維	体	埴積上	黒浜式古
9	縄文土器	深鉢	-	-	-	捺糸	明小艶	石英	体	埴積上	黒浜式古
10	縄文土器	深鉢	-	-	-	沈線	黒	纖維	体	埴積上	黒浜式古
11	縄文土器	深鉢	-	-	-	櫛状工具による横沈線	黒褐	纖維	体	埴積上	埴房式
12	縄文土器	深鉢	-	-	-	陸舟による楕円区画	黒	纖維	体	埴積上	黒浜式古
13	縄文土器	深鉢	-	-	-	沈線	橙	纖維	体	埴積上	黒浜式古
14	縄文土器	深鉢	-	-	-	羽状縄文	暗褐	纖維	体	埴積上	黒浜式古
15	縄文土器	深鉢	-	-	-	竹管文	黒褐～黒	纖維	体	埴積上	黒浜式古
16	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文	黒褐	細砂粒、纖維	体	埴積上	黒浜式古
17	縄文土器	深鉢	-	-	-	付加条縄文	にぶい黄橙	纖維	体	埴積上	黒浜式古
18	縄文土器	深鉢	-	-	-	羽状縄文	暗褐	細砂粒、纖維	体	埴積上	黒浜式古
19	縄文土器	深鉢	-	-	-		暗褐～黒	纖維	底	埴積上	黒浜式古

第3表 S104出土遺物観察表(2)

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)			整形の特徴	石材	出土位置	備考
			長さ	幅	重量				
20	石器	石鏃	3.8	(2.1)	2.6	円盤、裏面は未調整	チャート	埴積上	
21	石器	磨製石斧	(8.4)	(4.5)	(380.0)	左右非対称		埴積上	
23	石器	石皿	(9.6)	(8.0)	320.0		安山岩	埴積上	
22	石器	凹石	12.0	8.5	490.0	磨石としても使用、一部スス付着	安山岩	埴積上	

第4表 縄文時代遺構外出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			調整・文様等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
1	縄文土器	深鉢	-	-	-	斜格子、平行沈線	にぶい黄橙	石英	体	12 O グリット表上	竹之内式
2	縄文土器	深鉢	-	-	-	斜格子、平行沈線	にぶい黄橙	石英	体	9-V-M 包含層	竹之内式
3	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線	淡黄橙	細砂粒	口辺	9-V-M 包含層	竹之内式
4	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線	淡黄橙	細砂粒	口辺	9-V-L 包含層	竹之内式
5	縄文土器	深鉢	13.3	(4.1)	-	横のヘラナデ	灰白	細砂粒	口辺	9-T-1 包含層	竹之内式
6	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線	黒灰	石英、雲母	口辺	Fw 区表土	三戸式
7	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線	黒褐	細砂粒	口辺	9 R-II 包含層	三戸式
8	縄文土器	深鉢	-	-	-	沈線	にぶい黄橙	石英	体	10-V-U 包含層	三戸式
9	縄文土器	深鉢	-	-	-	沈線	橙	細砂粒	体	13 O グリット表土	三戸式
10	縄文土器	深鉢	-	-	-	人沈線	橙	石英	体	F e 区表土	三戸式
11	縄文土器	深鉢	-	-	-	条痕	にぶい黄橙	針状砂子、纖維	口辺	33 T レンチ表土	常世2式
12	縄文土器	深鉢	-	-	-	絡条帯片痕、条痕	橙～黒灰	纖維	口辺	3 H グリット表七	常世2式
13	縄文土器	深鉢	-	-	-	絡条帯片痕、条痕	にぶい黄橙	纖維	体		常世2式
14	縄文土器	深鉢	-	-	-	条痕	橙	纖維、礫	体	表土	常世2式
15	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線	橙	細砂粒、纖維	体	1号埴包含層	黒浜式

第5表 縄文時代遺構外出土遺物観察表(2)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			調整・文様等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
16	縄文土器	深鉢	-	-	-	格子目	暗赤褐	繊維	体	1号墳包(含層)	黒底式
17	縄文土器	深鉢	-	-	-	円形竹管文、縄文	明赤褐	繊維	体	Fw区表土	黒底式
18	縄文土器	深鉢	-	-	-	半截竹管の押し文、縄文	黒	繊維	体	17 S グリット表土	黒底式
19	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄の凸痕	橙	繊維	底	Hs区表上	黒底式
20	縄文土器	深鉢	-	-	-	凹凸文	灰黄褐	微砂粒、塵	口辺	9-T-D	浮島式
21	縄文土器	深鉢	-	-	-	爪形文	明赤褐	微砂粒	口辺	C区	浮島式
22	縄文土器	深鉢	-	-	-	条線文	浅黄橙～褐灰	細砂粒、塵	口辺	1号墳周埋積土	浮島式
23	縄文土器	深鉢	-	-	-	輪痕み痕	黒褐	微砂粒	口辺	9-U-G	浮島式
24	縄文土器	深鉢	-	-	-	輪痕み痕	灰褐	微砂粒	口辺	S102埋積土	浮島式
25	縄文土器	深鉢	-	-	-	凹凸文、平行沈線	浅黄橙～褐灰	細砂粒	体	14 R-H	浮島1～II式
26	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線	明褐灰～明赤褐	細砂粒	口辺	1号墳埋積土	浮島式
27	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線	黒褐	細砂粒	体		浮島式
28	縄文土器	深鉢	-	-	-	凹凸文、平行沈線	浅黄橙	細砂粒、針状粒子	体	14-R-H	浮島1～II式
29	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線	浅黄橙	細砂粒	体	14-R-H	浮島1～II式
30	縄文土器	深鉢	-	-	-	微隆起帯上位に平行沈線、下位に貝殻	明黄褐～にぶい黄橙	石英	体	H区表土	浮島1式
31	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線	にぶい黄橙	石英	体	13-R-1包(含層)	浮島1式
32	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線	浅黄橙～褐灰	細砂粒	体	10-T-Y包(含層)	浮島1式
33	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線	にぶい橙～灰黄褐	石英	体	表上	浮島1式
34	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線	黒褐	石英	体	Fw区表土	浮島1式
35	縄文土器	深鉢	-	-	-	半截竹管の平行沈線	黒褐	細砂粒	体	27トレンチ表土	浮島1式
36	縄文土器	深鉢	-	-	-	半截竹管の文様縁文	黒褐	細砂粒	体	9-T-E包(含層)	浮島1式
37	縄文土器	深鉢	-	-	-	縦ミガキ、平行沈線	にぶい橙	細砂粒	体	14-R-H包(含層)	浮島1式
38	縄文土器	深鉢	-	-	-	条線文、凹凸文	黒褐	細砂粒	口辺	14-R-H	浮島III式～興津I式
39	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻文	黒	石英、細砂粒	口辺	14-R-C	浮島III式～興津I式
40	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線	黒褐	細砂粒	体	Fc区表土	浮島III式～興津I式
41	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線	明褐	微砂粒	体	14-S-F包(含層)	浮島III式～興津I式
42	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻文	灰黄褐	石英	体	14-S-L包(含層)	興津I式
43	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻文	にぶい黄橙	石英	体	8Aグリット表土	興津I式
44	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻背圧痕	にぶい赤褐	石英	体	10-U-V	興津I式
45	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻背圧痕	灰黄褐	石英、微砂粒	体	9-V-H	興津I式
46	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻背圧痕	にぶい橙	細砂粒	体	9-U-A	興津I式
47	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻背圧痕	浅黄橙～にぶい黄橙	石英	体	9-U-O	興津I式
48	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻腹縁文	灰褐	細砂粒、塵	体	10-T-W	興津I式
49	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻腹縁文、縦のミガキ	浅黄橙	微砂粒、塵	体	14-S-F	興津I式

第6表 縄文時代遺構外出土遺物観察表(3)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			調整・文様等の特徴	色調	胎土		残存部位	出土位階	備考
			口径	器高	底径							
50	縄文土器	深鉢				貝殻縦線文、竹管文	黒褐	細砂粒、礫	体	C区	興津1式	
51	縄文土器	深鉢				貝殻縦線文	黒褐	細砂粒	体	C区表土	興津1式	
52	縄文土器	深鉢				半截竹管平行沈線、貝殻	灰黄褐	細砂粒	体	E区	興津1式	
53	縄文土器	深鉢				貝殻縦線文、平行沈線	黒褐	細砂粒	体	10-V-U	興津1式	
54	縄文土器	深鉢				爪形文	灰白～褐灰	細砂粒	口辺	1号墳内西端積土	興津1式	
55	縄文土器	深鉢				爪形文	浅黄褐	細砂粒	口辺	12-R-C	興津1式	
56	縄文土器	深鉢				爪形文	黒	細砂粒、礫	口辺	F区	興津1式	
57	縄文土器	深鉢				竹管文、三角文	にぶい赤褐	細砂粒、礫	口辺	27トレンチ	興津1式	
58	縄文土器	深鉢				竹管文、三角文	黒褐	細砂粒	口辺	9-V-M	興津1式	
59	縄文土器	深鉢				貝殻	橙	微砂粒	口辺	F区	興津1式	
60	縄文土器	深鉢					浅黄褐～褐灰	粗砂粒	口辺	10-T-U	興津1式	
61	縄文土器	深鉢				沈線	灰黄褐	細砂粒、礫	口辺	10-O-W	興津1式	
62	縄文土器	深鉢				角押し文、平行沈線	にぶい褐	細砂粒	口辺	9-V-A	興津1式	
63	縄文土器	深鉢				角押し文	暗褐	細砂粒	口辺	10-V-U	興津1式	
64	縄文土器	深鉢				角押し文、平行沈線	暗褐	細砂粒	口辺	9-U-C	興津1式	
65	縄文土器	深鉢	[32.3]	(6.4)		角押し文	褐	石英	口辺	9-U-G	興津1式	
66	縄文土器	深鉢				平行沈線	橙	細砂粒	口辺	9-S-E	興津1式	
67	縄文土器	深鉢				平行沈線	灰褐	石英	口辺	B区表土	興津1式	
68	縄文土器	深鉢				平行沈線	黒褐	不英	口辺	1号墳周埋積土	興津1式	
69	縄文土器	深鉢				竹管文、凹凸文	浅黄褐	石英	口辺	9-V-M	興津1式	
70	縄文土器	深鉢				竹管文、凹凸文	浅黄褐	石英	体	9-U-A	興津1式	
71	縄文土器	深鉢				爪形文、平行沈線	黒	細砂粒	口辺	1号墳周埋積土	興津1式	
72	縄文土器	深鉢				平行沈線	浅黄褐	細砂粒	口辺	13-S-D	興津1式	
73	縄文土器	深鉢				竹管文	橙	石英	口辺	1号墳表土	興津1式	
74	縄文土器	深鉢				竹管文	明赤褐	石英、細砂粒	口辺	C区	興津1式	
75	縄文土器	深鉢				竹管文	黒	細砂粒	口辺	13-R-S	興津1式	
76	縄文土器	深鉢				菱形爪形文	浅黄褐	石英、微砂粒	体	表上	興津1式	
77	縄文土器	深鉢				竹管文、平行沈線	明黄褐～橙	石英	体	9-T-J	興津1式	
78	縄文土器	深鉢				竹管文、平行沈線	黒褐	細砂粒	体	13-S-J	興津1式	
79	縄文土器	深鉢				竹管文、爪形文	灰黄褐	石英	体	1号墳内西端積土	興津1式	
80	縄文土器	深鉢				竹管文、平行沈線、爪形文	黒褐	石英	体	15-R-S	興津1式	
81	縄文土器	深鉢				竹管文、平行沈線	黒褐	石英	体	C区表土	興津1式	
82	縄文土器	深鉢				竹管文、平行沈線	明黄褐	微砂粒	体	9-T-C	興津1式	
83	縄文土器	深鉢				竹管文、平行沈線、爪形文	黒褐	細砂粒	体	9-U-D	興津1式	
84	縄文土器	深鉢				平行沈線、刺突文	黒褐	細砂粒、礫	体	9-U-G	興津1式	
85	縄文土器	深鉢				爪形文	にぶい黄褐	細砂粒	体	9-U-J	興津1式	
86	縄文土器	深鉢				爪形文	黒褐～暗褐	細砂粒	体	9-V-A	興津1式	
87	縄文土器	深鉢				爪形文	黒褐	石英	口辺	10-T-R	興津1式	
88	縄文土器	深鉢				平行刺突文、平行沈線	浅黄褐	石英	体	9-U-G	興津1式	
89	縄文土器	深鉢				平行刺突文	にぶい黄褐～にぶい橙	石英、礫	体	F区	興津1式	
90	縄文土器	深鉢				平行刺突文、平行沈線	浅黄褐	細砂粒	体	9-T-B	興津1式	
91	縄文土器	深鉢				平行沈線、平行刺突文	灰白～褐灰	細砂粒、石英	体	ST02埋積土	興津1式	
92	縄文土器	深鉢				平行沈線、貝殻	にぶい黄褐	石英、微砂粒	体	10-V-U	興津1式	
93	縄文土器	深鉢				平行沈線、貝殻	灰黄褐	微砂粒	体	14-R-C	興津1式	

第7表 縄文時代遺構外出土遺物観察表(4)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			調整・文様等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
94	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻	にぶい黄褐色	細砂粒、礫	体	10 S-V	興津式
95	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線、貝殻	灰白	細砂粒	体	14-R-C	興津式
96	縄文土器	深鉢	-	-	-	尖底、貝殻	黒褐	細砂粒	体	15-R-W	興津式
97	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻	灰白～暗褐	細砂粒	体	14-R-C	興津式
98	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行刺突文、貝殻	にぶい橙	石英	体	9-V-M	興津式
99	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻	にぶい橙	細砂粒	口辺	14-S-K	興津式
100	縄文土器	深鉢	-	-	-	貝殻	にぶい橙	細砂粒	体	10-T-P	興津式
101	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文	浅黄橙	細砂粒	口辺	表土	前期後半
102	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線、刺突文	明赤褐	細砂粒	口辺	13-S-B包 含層	大木5式
103	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線、刺突文	明赤褐、黒褐	石英、細砂粒	口辺	14-S-O包 含層	大木5式
104	縄文土器	深鉢	-	-	-	繩の押圧、縄文	黒	石英、細砂粒	口辺	C区包含層	大木5式
105	縄文土器	深鉢	[21.9]	(5.3)	-	繩の押圧、縄文	黒	石英、細砂粒	口辺	13-S-C包 含層	大木5式
106	縄文土器	深鉢	-	-	-	複合口辺、口唇、口辺部に縄文施文	暗赤褐	粗砂粒	口辺	C区表土	前期末～ 中期初頭
107	縄文土器	深鉢	-	-	-	陸帯、半截竹管の押引文	赤褐	石英、金色の燧石	体	表土	阿玉台Ⅲ式
108	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文の壁垂文	黒褐	石英、金色の燧石	体	C区表土	加特利R 3式
109	縄文土器	深鉢	-	-	-	陸帯、縄文	にぶい橙	細砂粒、礫	体	Fs区表土	加特利R 3式
110	縄文土器	深鉢	-	-	-	陸帯、縄文	暗褐	微砂粒、赤褐色粒	体	13-S-J包 含層	加特利R 4式
111	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文	赤褐～にぶい橙	石英、粗砂粒	体	13-S-U包 含層	中期
112	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文	明赤褐～橙	細砂粒、礫	体	9-U E包 含層	中期
113	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文	赤褐～暗赤褐	粗砂粒	体	9Wグリット 表土	中期
114	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文	黒	細砂粒、礫	体	C区包含層	中期
115	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文	黒褐	石英	体	C区包含層	中期
116	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文	にぶい黄褐色	石英、粗砂粒	体	Es区表土	中期
117	縄文土器	深鉢	-	-	-	沈線	にぶい黄褐色	細砂粒	体	15-R-W包 含層	網取式
118	縄文土器	深鉢	-	-	-	条痕	にぶい黄褐色	細砂粒、礫	口辺	13-S-L包 含層	晩期後葉
119	縄文土器	深鉢	-	-	-	条痕	にぶい橙	細砂粒	体	1号墳埋土	晩期後葉
120	縄文土器	深鉢	-	-	-	条痕	にぶい黄褐色	細砂粒	体～底	1号墳埋土	晩期後葉
121	縄文土器	深鉢	-	-	-	条痕	黒	細砂粒	口辺	Ce区表土	晩期後葉
122	縄文土器	深鉢	-	-	-	無文	にぶい橙	粗砂粒	口辺	1号墳表土	晩期
123	縄文土器	深鉢	-	-	-	無文、穿孔	にぶい橙	粗砂粒	体	14-S-G包 含層	晩期
124	縄文土器	深鉢	-	-	-	無文	にぶい橙	粗砂粒	体	1号墳包含層	晩期
125	縄文土器	深鉢	-	-	-	無文	にぶい橙	粗砂粒	体	14-S-H包 含層	晩期
126	縄文土器	深鉢	-	-	-	無文	黒褐	細砂粒	体	Ce区表土	
127	縄文土器	深鉢	-	-	-	竹管文	明褐～黒	石英	口辺	C区表土	
128	縄文土器	深鉢	-	-	[7.3]		にぶい黄褐色	粗砂粒	底	14-S-L包 含層	
129	縄文土器	深鉢	-	-	[9.7]		暗赤褐	粗砂粒	底	10-S-M包 含層	
130	縄文土器	深鉢	-	-	6.2	縄文	暗褐～黒	粗砂粒	底	13-S-W包 含層	
131	縄文土器	深鉢	-	-	[10.8]		にぶい黄褐色～にぶい橙	粗砂粒	底	9-U F包 含層	
132	縄文土器	深鉢	-	-	[10.0]	底部割代	にぶい黄褐色	石英	底	B区表土	

第8表 縄文時代遺構外出土遺物観察表(5)

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)			整形の特徴	石材	出土位置	備考
			長さ	幅	重量				
133	石器	尖頭器	2.7	1.2	1.3		メノウ	14-S-X包 含層	
134	石器	石鏃	2.8	1.4	0.5	凹基	チャート	13-S-O包 含層	
135	石器	石鏃	11.0	1.8	1.5	凹基	チャート	1号墳周産埋 積土	
136	石器	石鏃	2.1	1.7	0.7	凹基		1号墳周産埋 積土	
137	石器	石鏃	3.3	2.1	2.2	凹基	チャート	14-S-I包 含層	
138	石器	石鏃	3.7	1.0	1.5	平基	チャート	10-T-Q包 含層	
139	石器	石鏃	2.8	2.2	3.9	平基		13-S-M包 含層	
140	石器	石鏃	4.6	2.2	5.2	未完成と思われる	チャート	13-S-M包 含層	
141	石器	削器	3.9	3.2	9.5		チャート	14-S-Q包 含層	
142	石器	削器	3.9	3.3	6.6	刃部未調整	頁岩	表土	
143	石器	打製石斧	12.4	11.2	250.0	分銅型		14-T-F包 含層	
144	石器	打製石斧	(3.0)	5.7	50.9	刃部のみ	安山岩	10-S-K包 含層	
145	石器	打製石斧	13.5	10.0	320.0	分銅型		14-T-F包 含層	
146	石器	打製石斧	8.0	8.3	300.0	粗発か?		SD01埋積土	
147	石器	凹石	10.7	9.0	430.0	両面に凹あり 痕痕は明瞭ではない		13-S-S包 含層	
148	石器	凹石	7.9	7.6	320.0	両面に凹あり 磨石としても使用されている	安山岩	9-R-Q包 含層	
149	石器	凹石	(5.8)	7.5	160.0	両面に凹あり	安山岩	表土	
150	石器	凹石	11.8	8.7	620.0	両面に凹あり	安山岩	表土	
151	石器	敲石	(6.1)	6.4	230.0	磨石としても使用されている		E n区表土	
152	石器	敲石	(7.7)	6.8	210.0			F e区表土	
153	石器	敲石	(7.3)	4.5	190.0			13-R-X包 含層	
154	石器	敲石	8.7	8.0	480.0			F e区表土	
155	石器	石皿	(10.5)	(9.8)	450.0	凹の深さは1.4 cmほどで底面は平坦	安山岩	10-S-P包 含層	
156	石器	石棒	(10.5)	4.2	240.0	前面を細かい敲打で整形している		4 F グリッ ト表土	
157	石器	不明	2.8	2.9	7.8	前面に押圧剥離が施される	チャート	C e区表土	
158	石器	不明	3.2	2.4	4.5	形状は彫器に類似する	メノウ	14-S-Q包 含層	
159	石器	不明	2.1	2.1	4.1	片面に一部自然面が残っている クサビ型石器と類似している	チャート	13-D-D包 含層	
160	石器	不明	2.9	2.1	3.3		チャート	1号墳周産埋 積土	
161	石器	不明	(3.1)	(2.1)	2.8	一部に押圧剥離による調整が認められる 片面はほぼ未調整		トレンチ33 表土	
162	石器	不明	5.0	4.3	31.6		チャート	9-V-H包 含層	
163	石器	石核	5.0	3.1	46.2		メノウ	1号墳周産埋 積土	
164	石器	不明	6.0	4.0	28.2	表面は未調整。一部に押圧剥離による調整が施されている	チャート	表土	
165	石器	石核	10.2	7.8	250.0	一部に自然面が僅かに残るが前面に剥離が施される		表土	
166	石器	石核	23.9	9.7	410.0		メノウ	表土	

第9表 SK01出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			調整・文様等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
1	弥生土器	壺	[8.4]	(5.7)	-	弧状の沈線	にぶい黄橙 ～灰黄褐	石英	口辺	埴積土	
2	弥生土器	壺	-	-	-	横沈線	にぶい橙	金色の雲母、針状粒子	頸	埴積土	
3	弥生土器	甕	-	(12.2)	7.5	縹糸	灰褐～黒褐	細砂粒	体～底	埴積土	
4	弥生土器	甕	[19.6]	(5.3)	-	縄文	灰黄褐	石英、針状粒子	口辺	埴積土	
5	弥生土器	壺	-	-	-	弧状の沈線	浅黄橙	石英、針状粒子	口辺	埴積土	
6	弥生土器	壺	-	-	-	平行沈線	黒褐	細砂粒	口辺	埴積土	
7	弥生土器	甕	-	-	-	縹糸	にぶい黄橙	石英、針状粒子	口辺	埴積土	
8	弥生土器	甕	-	-	-	平行沈線、朱塗布	にぶい橙	石英、針状粒子	口辺	埴積土	
9	弥生土器	甕	-	-	-	平行沈線	黒褐	石英、針状粒子	口辺	埴積土	
10	弥生土器	甕	-	-	-	縄文	黒褐～にぶい黄橙	石英、針状粒子	口辺	埴積土	
11	弥生土器	甕	-	-	-	縹糸	にぶい黄橙	細砂粒、針状粒子	口辺	埴積土	
12	弥生土器	甕	-	-	-	縹糸	橙	石英、針状粒子、金色の雲母	口辺	埴積土	
13	弥生土器	壺	-	-	-	沈線	にぶい橙	金色の雲母、針状粒子	頸	埴積土	
14	弥生土器	甕	-	-	-	沈線	にぶい黄橙	石英、針状粒子	頸	埴積土	
15	弥生土器	壺	-	-	-	横の沈線	にぶい黄橙	細砂粒	体	埴積土	
16	弥生土器	埴	-	-	-	-	にぶい橙	針状粒子	体	埴積土	
17	弥生土器	甕	-	-	-	平行沈線	橙	石英、針状粒子	体	埴積土	
18	弥生土器	甕	-	-	-	沈線	にぶい黄橙	針状粒子	体	埴積土	
19	弥生土器	壺	-	-	-	弧状の沈線	黒褐	石英、針状粒子	体	埴積土	
20	弥生土器	甕	-	-	-	縹糸・沈線	橙	石英、針状粒子	体	埴積土	
21	弥生土器	甕	-	-	-	縹糸・沈線	橙	石英、針状粒子	体	埴積土	
22	弥生土器	壺	-	-	-	平行沈線	暗褐	細砂粒	体	埴積土	
23	弥生土器	壺	-	-	-	平行沈線	橙	石英	体	埴積土	
24	弥生土器	壺	-	-	-	平行沈線	灰黄褐	細砂粒、石英	体	埴積土	
25	弥生土器	壺	-	-	-	平行沈線	暗褐	細砂粒	体	埴積土	
26	弥生土器	甕	-	-	-	付加条縄文	にぶい橙	細砂粒	体	埴積土	
27	弥生土器	壺	-	-	-	付加条縄文	にぶい橙	石英、針状粒子	体	埴積土	
28	弥生土器	壺	-	-	-	縄文	灰黄褐	石英、針状粒子	体	埴積土	
29	弥生土器	壺	-	-	-	縄文	浅黄橙	石英、針状粒子	頸	埴積土	
30	弥生土器	壺	-	-	-	付加条縄文	暗褐	細砂粒	体	埴積土	
31	弥生土器	甕	-	-	-	縄文	灰黄褐	石英、針状粒子、金色の雲母	体	埴積土	
32	弥生土器	甕	-	-	-	付加条縄文	灰黄褐～浅黄橙	石英、針状粒子	体	埴積土	
33	弥生土器	甕	-	-	-	縄文	にぶい黄橙	石英、針状粒子	体	埴積土	

第10表 SK01出土遺物観察表(2)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			調整・文様等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
34	弥生土器	壺	—	—	—	付加条縄文	暗褐	石英、針状粒子	体	埋積上	

第11表 SK01出土遺物観察表(3)

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置	備考
			径	幅	厚さ	重量			
35	土製品	紡錘車	(6.7)	—	0.8	8.7	土器底部片を転用し、内面を磨っている	埋積上	

第12表 SK01出土遺物観察表(4)

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)			整形の特徴	石材	出土位置	備考
			長さ	幅	重量				
36	石器	打製石斧	9.4	8.7	310.0		安山岩	埋積土	
37	石器	不明	2.9	2.1	3.5	片面は未調整		埋積上	

第13表 弥生時代遺構外出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値 (cm)			調整・文様等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
1	弥生土器	壺	—	—	—	縦縄文	橙～褐灰	砂礫	体	13-S-L包 合層	
2	弥生土器	壺	—	—	—	沈線	明赤褐～灰 褐	石英	口辺	13-S-L包 合層	
3	弥生土器	壺	—	—	—	渦巻き文	灰黄褐	細砂粒	体	SD01埋積土	
4	弥生土器	壺	—	—	—	渦巻き文	にぶい褐	石英、粗 砂	体	SD01埋積土	
5	弥生土器	壺	—	—	—	沈線	にぶい褐	石英、粗 砂粒	頸	C区表土	
6	弥生土器	壺	—	—	—	沈線	にぶい橙～ 黒褐	石英	体	13-S-Q包 合層	
7	弥生土器	壺	—	—	—	付加条縄文	にぶい橙	細砂粒	体	13-S-I包 合層	
8	弥生土器	壺	—	—	—	沈線	褐灰	石英、細 砂粒	頸	C区表土	
9	弥生土器	壺	8.8	—	—	付加条縄文	褐	赤褐色粒 石英	口辺～体	13-S-P包 合層	
10	弥生土器	壺	—	(3.3)	7.4	木葉痕	にぶい橙～ 褐灰	石英、粗 砂	底	C区表土	
11	弥生土器	壺	—	(3.1)	[7.2]	木葉痕	褐灰	石英	底	13-S-Q包 合層	
12	弥生土器	壺	—	(1.2)	[7.1]	木葉痕	にぶい黄橙	砂礫	底	C区表土	

第14表 1号墳出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
1	須恵器	壺	[15.2]	3.4	—	ロクロ整形、甲回転ヘラケズリ	灰白～灰	微砂粒、礫	口辺～体	前庭部埋積土	
2	須恵器	坏	13.2	4.7	8.5	ロクロ整形、体部ヘラケズリ、底部ヘラ切り	灰	微砂粒、礫	口辺～底	周埋埋積土	
3	須恵器	坏	13.7	5.2	8.8	ロクロ整形、底部ヘラ切り	灰	微砂粒、礫	口辺～底	周埋埋積土	
4	須恵器	坏	13.9	4.5	9.6	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ	灰白	細砂粒	口辺～底	前庭部埋積土	
5	須恵器	坏	14.5	4.8	[8.3]	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ	灰白	黒色発泡礫	口辺～底	前庭部埋積土	
6	須恵器	坏	14.3	4.9	9.8	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ	黄灰	黒色発泡礫	口辺～底	前庭部埋積土	
7	須恵器	坏	[14.6]	5.1	9.3	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ	灰白	微砂粒、礫	口辺～底	前庭部埋積土	
8	須恵器	坏	—	(3.2)	[9.3]	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ	黄灰	微砂粒	体～底	周埋埋積土	
9	須恵器	坏	—	(0.7)	[7.3]	ロクロ整形、底部ヘラ切り、ヘラ削り「一」	灰	礫	底	埋積土	

第15表 1号墳出土遺物観察表(2)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
10	須臾器	蓋	[14.4]	3.6	—	ロクロ整形、甲回転ヘラケズリ	灰	霽	口辺～体	前庭部埋積土	
11	須臾器	蓋	15.6	4.1	—	擬宝珠形、ロクロ整形、甲回転ヘラケズリ	灰	針状粒子礫、微砂	口辺～体	前庭部埋積土	14とセット?
12	須臾器	甞	[16.0]	4.1	—	擬宝珠形、ロクロ整形、甲回転ヘラケズ、煤付着	黄灰	針状粒子礫	口辺～体	前庭部埋積土	15とセット?
13	須臾器	坏	13.5	3.6	8.5	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ	灰～暗灰	石英、微砂粒	口辺～底	前庭部埋積土	
14	須臾器	高台坏	[14.6]	5.4	10.1	ロクロ整形	黄灰	針状粒子礫	口辺～底	前庭部埋積土	11とセット?
15	須臾器	高台坏	[15.0]	5.3	10.0	ロクロ整形	灰	針状粒子礫	口辺～底	前庭部埋積土	12とセット?
16	須臾器	甞	15.6	4.0	—	擬宝珠形、ロクロ整形、甲回転ヘラケズリ	灰	霽	口辺～体	前庭部埋積土	18とセット?
17	須臾器	甞	16.2	(2.9)	—	擬宝珠形、ロクロ整形、甲回転ヘラケズリ	灰	微砂粒、礫	口辺～体	前庭部埋積土	19とセット?
18	須臾器	高台坏	14.8	5.5	10.1	ロクロ整形	灰	針状粒子礫	口辺～底	埋積土	16とセット?
19	須臾器	高台坏	15.3	5.8	10.2	ロクロ整形、回転ヘラケズリ、付高台	灰	針状粒子礫	口辺～底	前庭部埋積土	17とセット?
20	須臾器	高台坏	16.7	6.6	12.7	ロクロ整形、底部砂付着	灰白	黒色発泡多い	口辺～底	周濠埋積土	
21	土師器	坏	[16.0]	5.5	—	口辺部ココナデ、体部外面ヘラケズリ	浅黄橙～黒褐	微砂、石英	口辺～底	前庭部埋積土	
22	土師器	塊	14.0	7.4	—	口辺部ココナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ナゲ	橙	石英、砂粒	口辺～底	前庭部埋積土	
23	土師器	小瓿	[14.2]	(9.6)	—	口辺部ココナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナゲ	浅黄橙～灰褐	石英、粗砂	口辺～体	前庭部埋積土	
24	須臾器	甞	[14.5]	2.4	—	ロクロ整形、黄・緑色の自然降灰	褐灰	暗赤褐色微砂、礫	口辺～体	周濠埋積土	25とセット?
25	須臾器	コップ型	13.0	12.5	10.3	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ	暗灰	細砂粒、礫	口辺～底	前庭部埋積土	24とセット?
26	須臾器	甞	—	—	—	外面平行タタキ、内面同心出当て具痕	黄灰	暗赤褐色細砂粒	体	前庭部埋積土	
27	須臾器	甞	—	—	—	外面平行タタキ、内面同心出当て具痕	黄灰	暗赤褐色細砂粒	体	周濠埋積土	
28	須臾器	甞	—	—	—	外面平行タタキ、内面同心出当て具痕	黄灰	暗赤褐色細砂粒	体	前庭部埋積土	
29	須臾器	甞	—	—	—	外面平行タタキ、内面同心出当て具痕	黄灰	暗赤褐色細砂粒	体	前庭部埋積土	
30	須臾器	長頸壺	[10.9]	—	11.7	ロクロ整形、体部外面ヘラケズリ、緑色の自然降灰	灰白	黒色発泡	口辺～底	周濠埋積土	
31	須臾器	長頸壺	[10.7]	—	[9.6]	ロクロ整形	灰白	微砂粒	口辺～底	周濠埋積土	
32	須臾器	長頸壺	[18.2]	(19.3)	—	ロクロ整形	灰白～黄灰	微砂粒	口辺～体	周濠埋積土	
33	須臾器	長頸壺	[20.6]	(25.8)	—	ロクロ整形	黄灰～暗灰	細砂粒、礫	口辺～体	埋積土	
34	須臾器	甞	—	—	—	ロクロ整形、外面横の轡目、内面ココナデ、当て具痕	灰	灰、微砂粒	体	前庭部埋積土	
35	須臾器	小型甞	8.0	10.4	—	ロクロ整形、胴体付着	暗灰	褐赤褐色、微砂	口辺～底	前庭部・周濠埋積土	
36	須臾器	小型甞	—	(8.5)	—	ロクロ整形、底部ヘラ記号?	灰	微砂粒	体～底	前庭部埋積土	
37	須臾器	長頸壺	9.7	(24.4)	—	ロクロ整形、緑色の自然降灰	灰白	灰白	口辺～底	前庭部埋積土	東海系?
38	須臾器	甞	—	—	—	外面平行タタキ、内面ロクロナデ、高台の剥離痕	灰白	細砂粒	体～底	周濠埋積土	

第16表 1号墳出土遺物観察表(3)

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置	備考
			長さ	幅	厚さ	重量			
39	鉄製品	刀子	8.4	1.2	0.4	8.5		周濠埋積土	

第17表 I号墳出土遺物観察表(4)

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)			重量	成形等の特徴	出土位置	備考
			長さ	幅	厚さ				
40	鉄製品	刀子	9.6	1.7	1.2	11.1	鞘に樹皮が巻かれている、裏に木質が残る	西谷埋積土	
41	鉄製品	鉄鎌	4.2	(2.5)	0.2	3.6	無茎鎌	前庭部埋積土	
42	鉄製品	鉄鎌	(3.8)	(2.9)	0.2	5.0	無茎鎌	前庭部埋積土	
43	鉄製品	鉄鎌	(3.3)	1.9	0.2	2.3	無茎鎌	前庭部埋積土	
44	鉄製品	鉄鎌	(10.1)	0.6	0.5	10.2	長柄鎌、柳葉系	周濠埋積土	
45	鉄製品	鉄鎌	(8.5)	0.65	0.5	10.7	長柄鎌、柳葉系	周濠埋積土	
46	鉄製品	鉄鎌	(9.1)	0.8	0.4	11.0	長柄鎌、柳葉系	前庭部埋積土	
47	鉄製品	鉄鎌	(6.5)	0.5	0.4	4.4	長柄鎌、柳葉系	周濠埋積土	
48	鉄製品	鉄鎌	3.6	0.3	0.3	1.3	長柄鎌、柳葉系	周濠埋積土	
49	鉄製品	鉄鎌	(10.4)	0.6	0.4	8.2	長柄鎌、柳葉系	周濠埋積土	
50	鉄製品	鉄鎌	5.45	0.65	0.25	3.2	長柄鎌、柳葉系	周濠埋積土	
51	鉄製品	鉄鎌	7.8	0.4	0.35	5.6	長柄鎌	周濠埋積土	
52	鉄製品	鉄鎌	(5.4)	0.6	0.35	4.1		前庭部埋積土	
53	鉄製品	鉄鎌	(4.6)	0.5	0.4	3.6		前庭部埋積土	
54	鉄製品	不明	(2.8)	0.35	0.3	1.0	両端を欠損する	埋積土	
55	鉄製品	不明	(3.1)	0.5	0.4	2.1	両端を欠損する	周濠埋積土	
56	鉄製品	鉄鎌	(3.6)	0.6	0.35	2.7	両端を欠損する	西谷埋積土	
57	鉄製品	鏝	4.5	3.6	0.6	21.2		前庭部埋積土	
58	鉄製品	鞘口金具	3.6	-	0.1	-	板状の鉄製品、59と同 個体	前庭部埋積土	
59	鉄製品	鞘口金具	3.6	-	0.1	-	板状の鉄製品、58と同 個体	前庭部埋積土	

第18表 SK20出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			重量	成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径							
1	須臾器	蓋	15.9	5.0	-	-	ロクロ整形、甲回転ヘラケズリ、擬宝珠	灰	黒色の発泡、霽	口辺～体	埋積土	

第19表 SK20出土遺物観察表(2)

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)			重量	成形等の特徴	出土位置	備考
			長さ	幅	厚さ				
2	鉄製品	刀子	(6.3)	0.7	0.3	2.2	木質が残る	埋積土	

第20表 S101出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値 (cm)			重量	成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径							
1	土師器	甕	[15.6]	(9.2)	-	-	口辺部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	浅黄褐色	石英、細砂粒	口辺～体	カマド埋積土	
2	土師器	甕	[14.8]	(9.3)	-	-	口辺部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内面煤付着	橙	細砂粒	口辺～体	カマド埋積土	
3	土師器	甕	[17.4]	(7.2)	-	-	口辺部ヨコナデ、内面斜めナデ	橙	微砂粒	口辺～体	カマド埋積土	

第21表 S102出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			重量	成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径							
1	土師器	坏	11.3	4.4	6.4	-	ロクロ整形、体部外面ヘラケズリ、内面黒色処理、底部糸切り、墨書「新」	橙	石英、霽	口辺～底	カマド埋積土	
2	土師器	坏	11.5	4.0	5.6	-	ロクロ整形、体部外面手持ちヘラケズリ、内面黒色処理、底部糸切り	浅黄褐色～黒	石英、霽	口辺～底	床面上	

第22表 S I O 2 出土遺物観察表(2)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
3	土師器	坏	[12.3]	4.0	6.3	ロクロ整形、体部外面手持ちヘラケズリ、内面黒色処理、底部糸切り、裏書「□□」判読不可	橙	石英	口辺~底	カマド埋積土	
4	土師器	坏	--	(3.2)	[6.0]	ロクロ整形、内面黒色処理、底部回転ヘラケズリ	にぶい黄橙	細砂粒	体~底	埋積土	
5	土師器	甕	21.7	(31.1)	--	口辺部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、横ヘラナデ、粗い指ナデ、外面焼土付着	橙	長石、礫	口辺~体	カマド埋積土	
6	土師器	甕	19.2	(26.3)	--	口辺部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、粗い斜めヘラナデ、指ナデ、外面焼土付着	赤褐	長石、細砂粒、赤色粒	口辺~体	床面上	
7	土師器	甕	[20.3]	(12.1)	--	口辺部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面粗い斜めヘラナデ	橙	細砂粒、礫	口辺~体	カマド埋積土	
8	土師器	甕	[21.3]	(14.0)	--	口辺部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	橙	細砂粒、礫	口辺~体	埋積土	
9	土師器	小甕	[21.2]	(14.1)	--	口辺部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面縦ナデ、板状工具の斜めナデ	赤褐	長石、礫、粗い	口辺~体	埋積土	
10	土師器	小型甕	[17.6]	(20.1)	--	口辺部ヨコナデ、体部外面下層部ヘラケズリ、ロクロ使用のヘラナデ、斜めナデ	にぶい赤褐~黒褐	石英、細砂粒、礫	口辺~底	埋積土	
11	土師器	小型甕	[14.0]	(15.5)	--	口辺部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面斜めナデ	橙	石英、細砂粒、赤褐色粒	口辺~体	埋積土	
12	土師器	甕	--	--	--	体部外面ヘラケズリ、ヘラ書き	にぶい橙	微砂粒、雲母、石英	底	埋積土	

第23表 S I O 2 出土遺物観察表(3)

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置	備考
			長さ	幅	厚さ	重量			
13	土製品	紡錘車	6.7	6.8	1.5	73.8	ミガキ整形、下面に「伊」?ヘラ書き	床面上	
14	土製品	鉢	3.8	1.9	2.0	13.0		埋積土	
15	鉄製品	鉄鏃	(3.7)	0.45	0.35	3.0	両端を欠損する	埋積土	

第24表 S I O 3 出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値 (cm)			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
1	土師器	甕	--	--	--	口辺部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面横ナデ	にぶい橙	細砂粒多い	口辺~体	カマド埋積土	

第25表 S D O 1 出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
1	青磁	甕	--	(1.7)	5.2	見込に印花文	緑	灰白	底	埋積土	竜泉窯 13・4 c
2	炆器	甕	--	--	--	口辺部自然降灰	赤褐	灰色	口辺	擾乱	常滑窯 13・4 c
3	炆器	甕	--	--	--	外面格子ロタキ、外面自然降灰	赤褐	石英	体	埋積土	常滑窯 15・6 c
4	炆器	甕	--	--	--	外面緑色の自然釉、内面横のナデ	暗赤褐	灰色、白色粒	体	埋積土	常滑窯 15・6 c
5	炆器	鉢	--	--	--	口縁部ヨコナデ、体部外面指触灰、内面ヨコナデ	赤褐	細砂粒、礫	口辺	埋積土	15・6 c
6	土製品	火鉢	--	--	--	口縁部ミガキ、内面横ナデ	赤褐~にぶい橙	白色微砂粒	口辺	埋積土	15・6 c

第26表 SZO2出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)				成形等の特徴	石材	出土位置	備考
			長さ	幅	厚さ	重量				
1	石製品	石塔	39.2	35.7	25.5	34500	方形に成形され、上面に半円形の窪みが認められる	凝灰岩	1号墳主体部西側	

第27表 中世以降遺構外出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種	計測値 (cm)			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
1	土器	かわらけ	-	-	[5.0]	ロクロ製形、底部糸切り	橙	金色の雲母、微砂粒	底	9-V-E表土	15・6c
2	磁器	碗	[9.6]	(3.7)	-	肥前系	青白	淡白色	口辺～体	HD表土	渡佐見橋18c
3	陶器	碗	-	(1.8)	4.7	灰釉	緑	灰白	底	表土	瀬戸・美濃産18c
4	陶器	小瓶	-	(1.4)	[3.2]	灰釉、刷毛目、底部糸切り	緑	灰色	底	Ge区III層	瀬戸・美濃産18c
5	陶器	皿	-	(1.6)	[6.6]	陶皿	黄緑	淡白色	底	9-T-A	瀬戸・美濃産18c
6	陶器	天目	-	-	-		柿釉	にぶい橙	体	CHD	中世
7	土器	火鉢	-	-	-	外面巴文押印	明赤褐	石英、砂砂粒	口辺	3Hグリップ	15・6c
8	土製品	内耳土器	-	-	-	外面指跡痕、内面横ヘラナデ	にぶい橙	黒粉砂粒	口辺	Gn区III層	15・6c
9	土製品	内耳土器	-	-	-	外面粗いミガキ、内面横ヘラナデ、口縁部煤付書	黒	白色粒	口辺	3Hグリップ表土	15・6c
10	陶器	搦鉢	-	-	-	外面指跡痕、内面横ヘラナデ	明赤褐	細砂粒、黒色粒	口辺	HD表上	常清産15・6c
11	炆器	甕	-	-	-	内面自然降灰	赤褐	灰色	口辺	9-U-E	常清産13・4c
12	炆器	甕	-	-	-		暗赤褐	石英	体	Gw区III層	常清産15・6c
13	炆器	甕	-	-	-	外面脱ナゲ、内面横ヘラナデ	暗赤褐	灰色、石	体	3Hグリップ表土	常清産15・6c
14	炆器	甕	-	-	-	内面脱している	褐灰	灰色、石英	体	Gw区III層	常清産15・6c
15	炆器	甕	-	-	-	内面ヨコナデ	暗赤褐	石英	体	5D区表土	常清産15・6c
16	炆器	甕	-	-	-		灰	灰色、黒色粒	底	HD表土	蓬美庄12・3c

第28表 中世以降遺構外出土遺物観察表(2)

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)				成形等の特徴	石材	出土位置	備考
			長さ	幅	厚さ	重量				
17	銅製品	不明	9.8	2.6	0.6	19.1	板状の銅製品で裏側に鉄が補強のために止められている			懸仏?

第29表 中世以降遺構外出土遺物観察表(3)

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)				成形等の特徴	石材	出土位置	備考
			長さ	幅	厚さ	重量				
18	石製品	石E	(32.0)	(15.2)	(11.2)	3950.0			1号墳視孔	
19	石製品	砥石	(1.9)	(2.0)	(2.0)	(8.0)	砥面が2面確認できるが、小破片のため原形は不明		10-U-Y	



調査前風景（北東から）



調査区全景（北側上空から）



A区全景 (西から)



B区全景 (東から)



C区全景（北から）



D区全景（北東から）

図版 4



E区全景（北から）



E区南部全景（北から）



F区全景 (西から)



F区東部全景 (西から)

図版 6



G区全景 (西から)



Gs区全景 (北から)



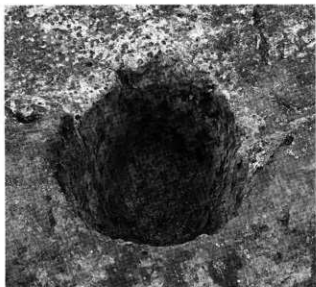
T P 2 土層断面 (北から)



T P 4 土層断面 (西から)



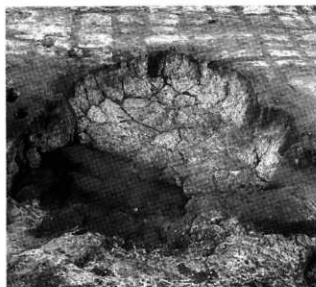
S104全景 (西から)



SK15全景 (東から)



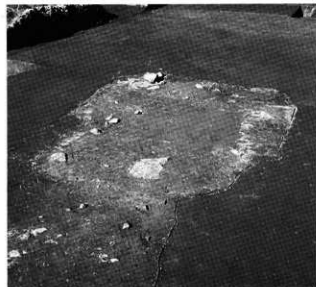
SK23全景 (南から)



SK01全景 (南から)



SK01遺物出土状況 (東から)



1号墳主体部確認状況 (南から)



1号墳全景（南から）



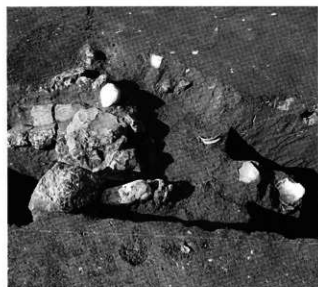
1号墳遺物出土状況（南から）



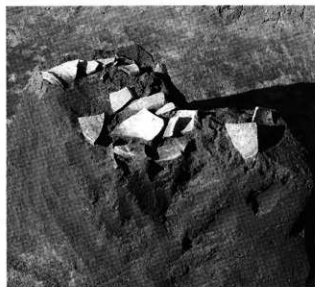
1号墳前庭部遺物出土状況 (南西から)



1号墳前庭部遺物出土状況 (南東から)



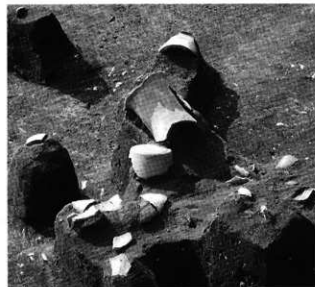
1号墳前庭部遺物出土状況 (東から)



1号墳周濠遺物出土状況 (南から)



1号墳石白出土状況 (南東から)



1号墳前庭部遺物出土状況 (北東から)



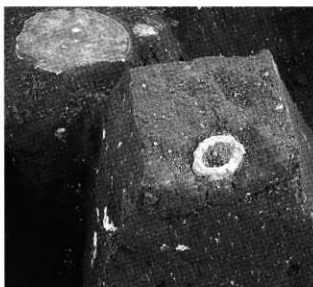
1号墳前底部遺物出土状況（東から）



1号墳遺物出土状況（南から）



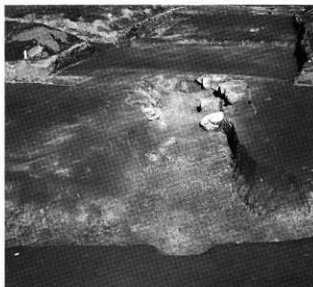
1号墳前底部遺物出土状況（西から）



1号墳前底部遺物出土状況（西から）



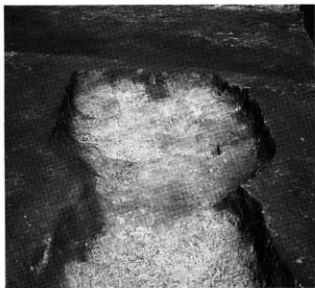
1号墳前底部遺物出土状況（西から）



1号墳主体部全景（南から）



1号墳主体部全景 (南から)



1号墳主体部掘り方全景 (南から)



1号墳石室東壁 (南西から)



1号墳石室西壁 (南東から)



1号墳東側羨門付近 (南から)



1号墳羨門 (南から)



1号墳東側狭門（南から）



1号墳西側狭門（南から）



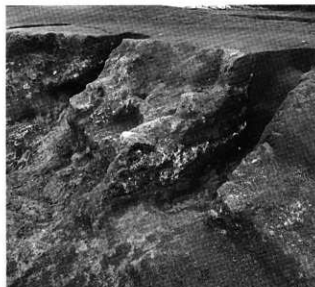
1号墳東側玄門（南から）



1号墳B-B'西側土層断面（南から）



1号墳B-B'東側土層断面（北から）



1号墳D-D'西側土層断面（北から）



1号墳D-D' 東側土層断面 (北から)



1号墳E-E' 西側土層断面 (南から)



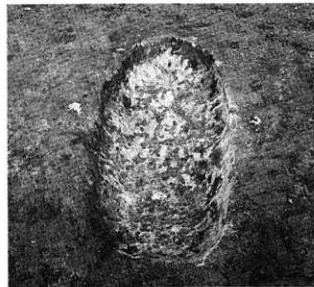
1号墳E-E' 東側土層断面 (南から)



1号墳周濠内1号土坑全景 (西から)



1号墳周濠内2号土坑全景 (東から)



SK19全景 (南から)



SK 20全景 (南から)



SK 20遺物出土状況 (東から)



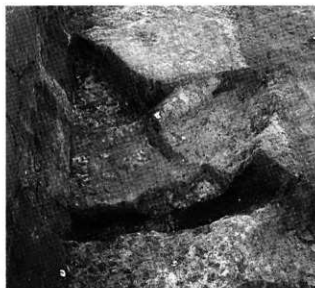
SK 21全景 (南から)



SK 101全景 (北東から)



SK 101掘り方全景 (北西から)



SK 101カマド全景 (南東から)



S101カマド遺物出土状況 (南東から)



S102全景 (西から)



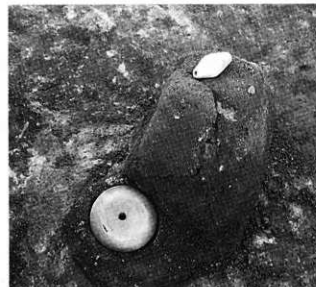
S102掘り方全景 (西から)



S102遺物出土状況 (西から)



S102遺物出土状況 (西から)



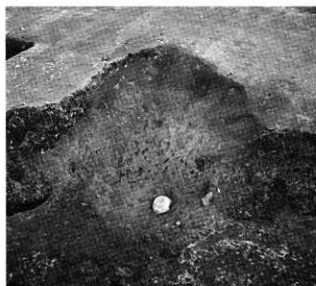
S102遺物出土状況 (西から)



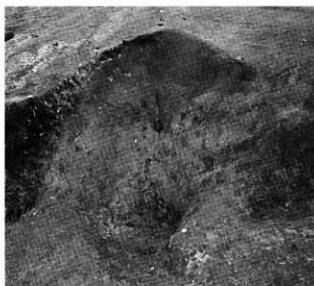
S102遺物出土状況(西から)



S102遺物出土状況(南から)



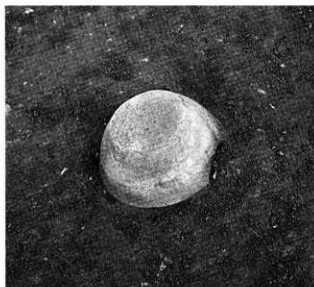
S102カマド全景(西から)



S102カマド掘り方全景(西から)



S102カマド遺物出土状況(西から)



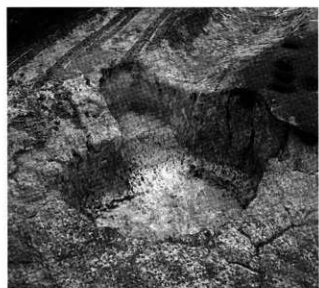
S102カマド遺物出土状況(西から)



S103カマド (北から)



SK10全景 (南西から)



SK10全景 (北東から)



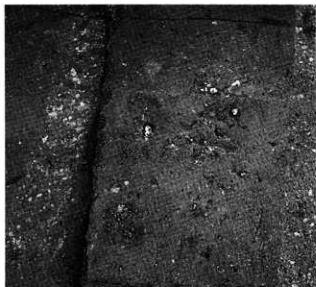
SK10土層断面 (北から)



SD01全景 (西から)



SZ02基部全景 (南から)



火葬骨確認状況 (SD01南側縁・北から)



大場小学校5・6年生遺跡見学風景(1)



大場小学校5・6年生遺跡見学風景(2)



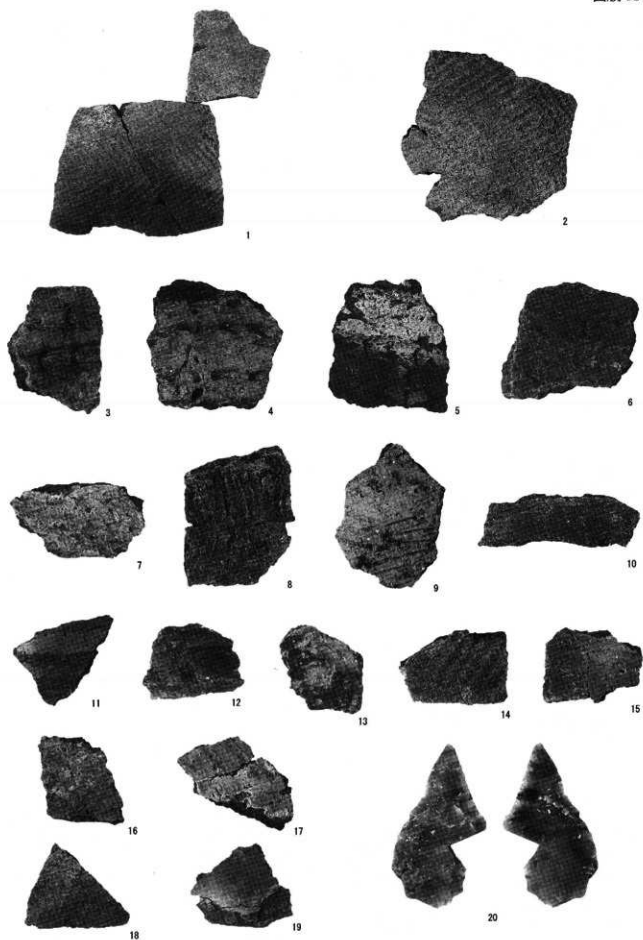
一般遺跡見学会風景(1)



一般遺跡見学会風景(2)



発掘作業参加の皆様



S I O 4 出土遺物 (1)



21



22



23

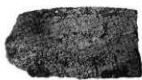
S I O 4 出土遺物 (2)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



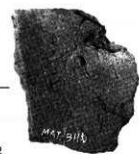
10



11



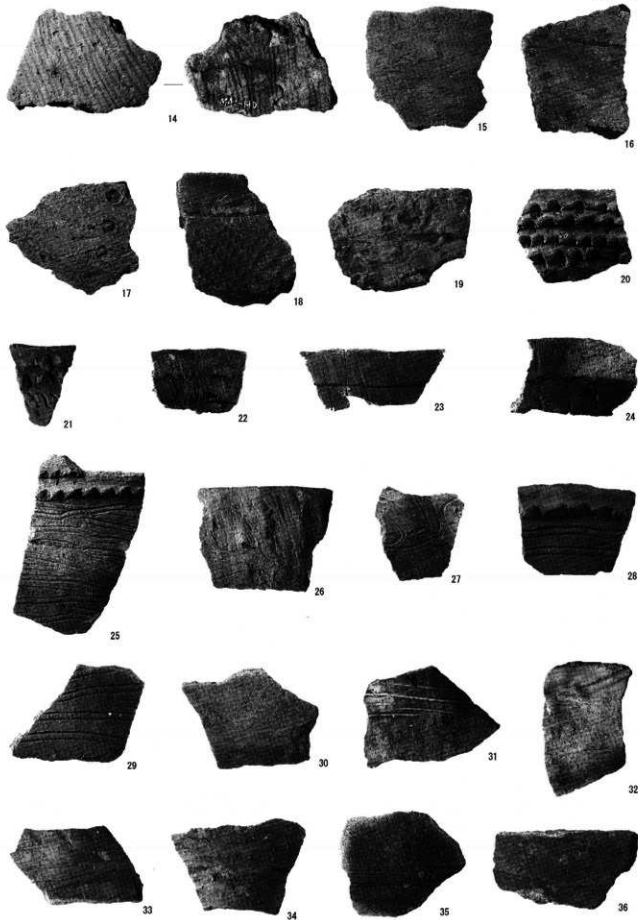
12

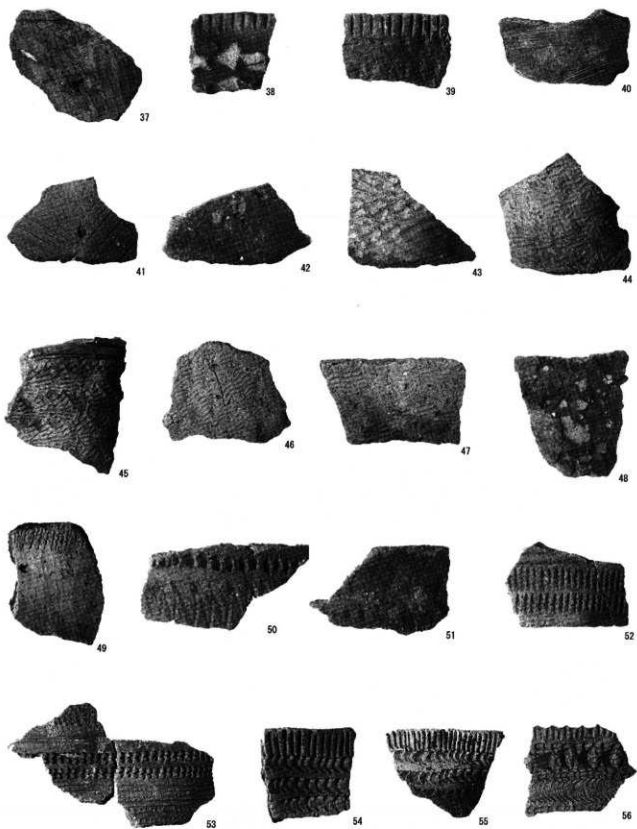


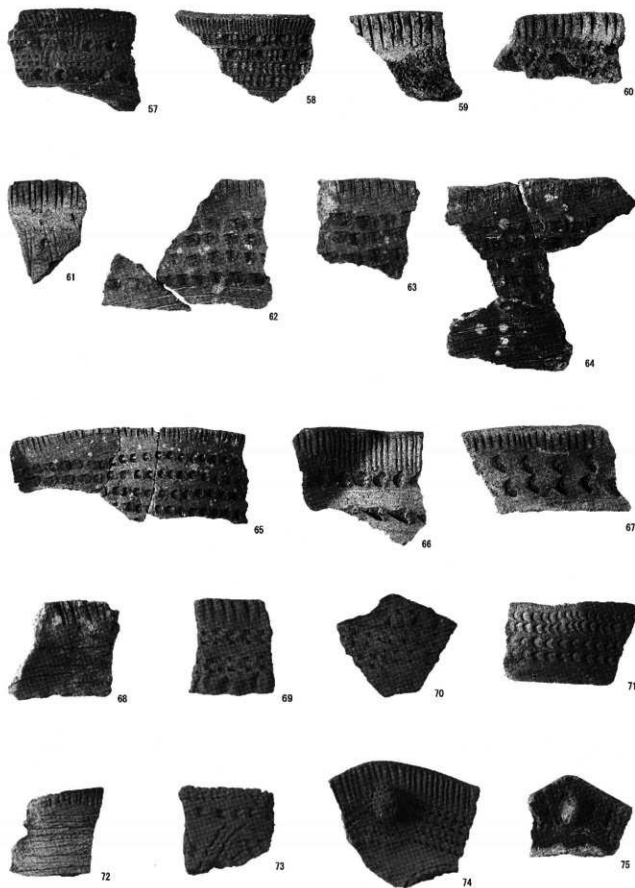
13



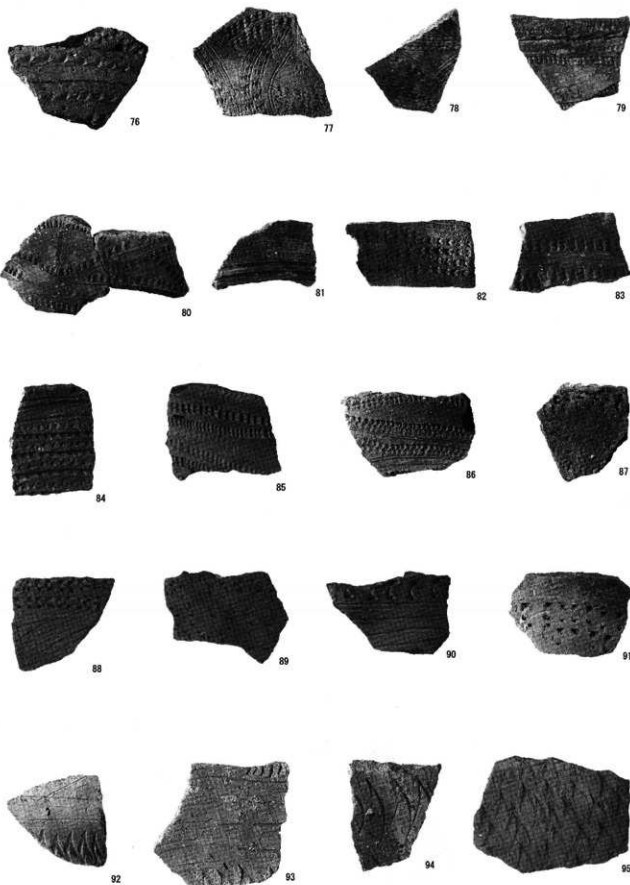
縄文時代遺構外出土遺物 (1)







縄文時代遺構外出土遺物 (4)





96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



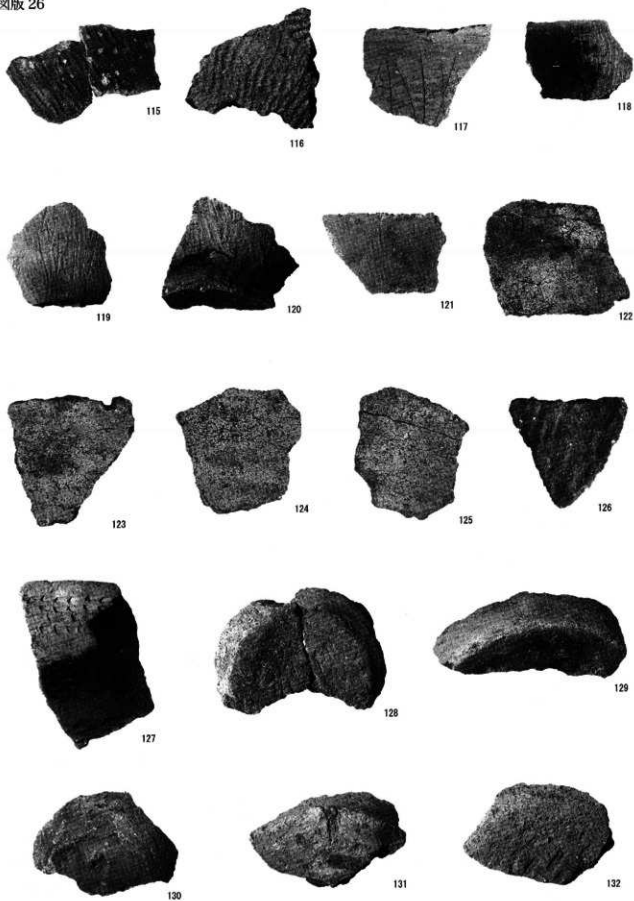
112



113



114





133



134



135



136



137



138



139



140



141



142



144



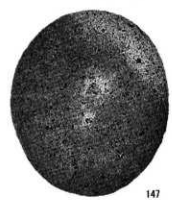
146



143



145



147



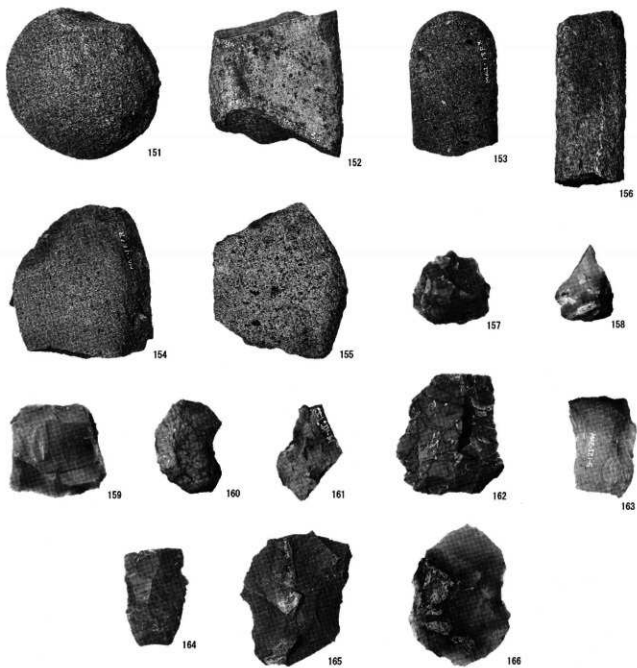
148



149



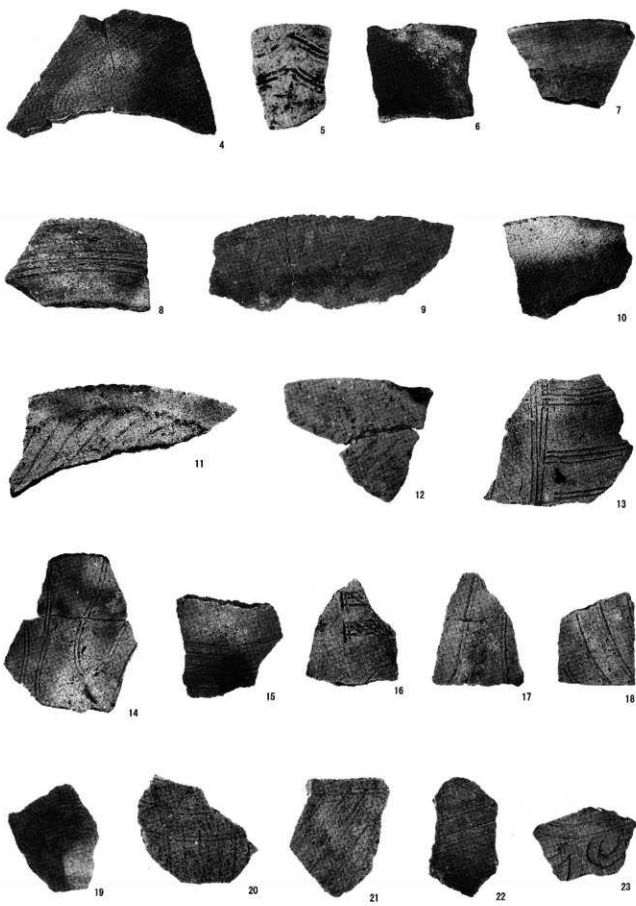
150



縄文時代遺構外出土遺物 (9)



SK01出土遺物 (1)





24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



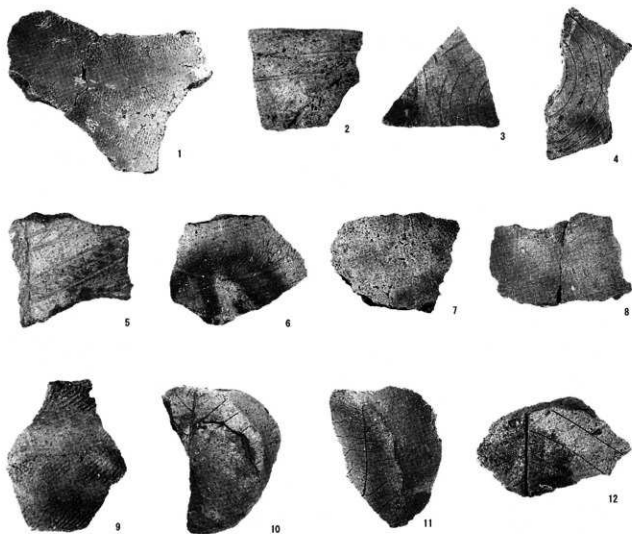
35



36



37



弥生時代遺構外出土遺物



1号墳出土遺物(1)



9



10



7



13



7底部



11



12



14



15



20



16



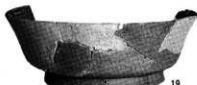
17



21



18



19



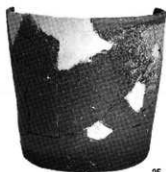
22



24



26



25



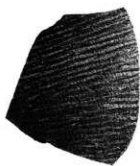
27



1号墳出土遺物(2)



28



29



37



31



32



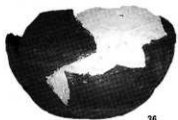
33



34



35



36



38



41



42



43



39



40



40 の部分拡大



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



1



2

SK 20 出土遺物



1



2



3

SI 01 出土遺物



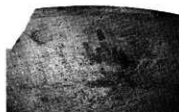
1



3



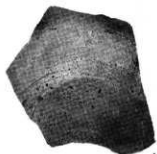
2



1 の部分拡大



3 の部分拡大



4



5



6



7

SI 02 出土遺物 (I)



8



9



10



11



12



13



14



15



13の部分拡大

S I O 2 出土遺物 (2)



1



1



2



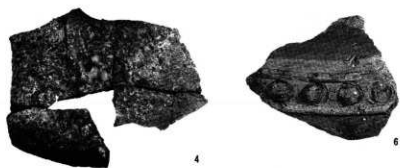
3



5

S I O 3 出土遺物

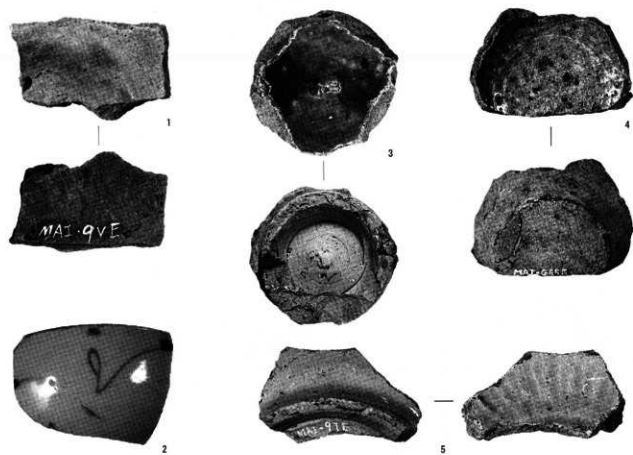
S D O 1 出土遺物 (1)



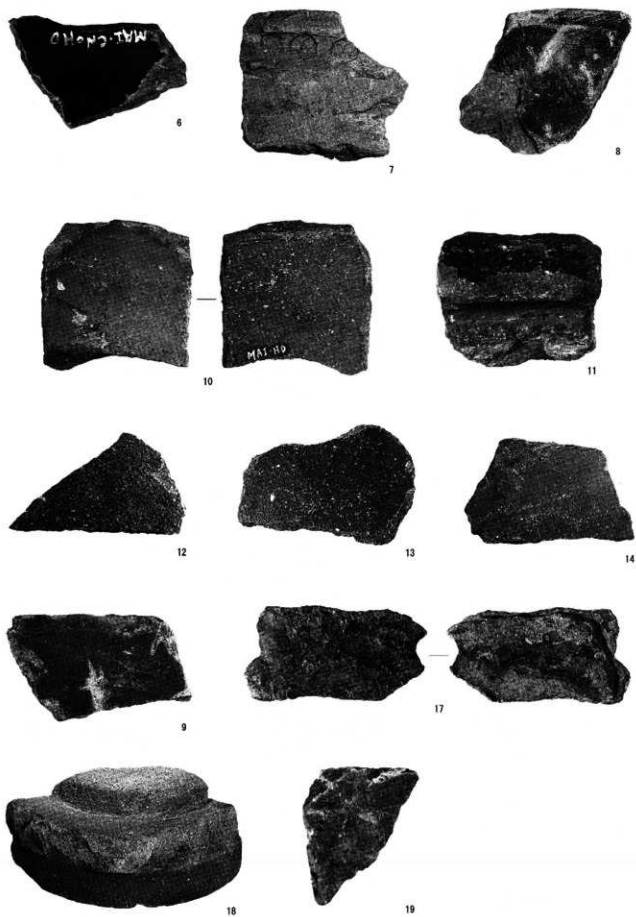
SD01 出土遺物 (2)



SZ02 出土遺物



中世以降遠構外出土遺物 (1)



中世以降遺構外出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	あかいわいせき							
書名	赤岩遺跡1							
副書名	畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	三輪季幸(株式会社 日本農業史研究所) 後藤俊一(常陸大宮市教育委員会)							
編集機関	常陸大宮市教育委員会 株式会社 日本農業史研究所							
所在地	〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135-6 TEL 0295 (52) 1111 常陸大宮市教育委員会 〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112 TEL 0287 (93) 0711 ㈲日本農業史研究所							
発行機関	常陸大宮市教育委員会							
所在地	〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135-6							
発行年月日	西暦2012年6月29日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	***	***	m ²		
あかいわいせき 赤岩遺跡	茨城県常陸大宮市三美 313番地 外21筆	08225	大059	36° 32' 50.3"	140° 20' 44.5"	20111201～ 20120629	4,819m ²	畑地帯総合 整備事業 三美地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
赤岩遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	1軒	条痕文系、黒浜式、浮島式、興津式、阿玉台式、加曾利E式の土器片			
		弥生時代	土坑	1基	足洗2式、東中根式土器片			
		平安時代	竪穴住居	3軒	土師器坏・甕、紡錘車、土甕、鉄製品			
	墳墓	古墳時代	古墳 土坑	1基 1基	土師器塊、須恵器長頸壺・短頸壺・コップ型・蓋・坏・高台付坏、刀子、鉄鏝、刀器具			
		奈良時代	土葬墓	1基	須恵器蓋、刀子			
		中世	地下式坑 石塔	1基 1基				
	その他	縄文時代	陥し穴状土坑 土坑	1基 1基				
		古墳時代	土坑	1基				
		中世	溝	1条	常滑甕、青磁碗 石臼			
	要約	縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。縄文時代では中央部に遺物包含層、北部に竪穴住居跡を確認した。弥生時代は南部で土坑1基のみの確認である。古墳～奈良時代は北部で古墳1基を確認したほか、調査区中央部で抉り込み土坑、隣接して奈良時代の土葬墓を確認した。平安時代は南部で竪穴住居跡を確認した。中世は南部で、地下式坑、溝を確認した。						

本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙を使用しています。(数値は4/6判適量)

【紙質】

表紙	レザック66	215.0 kg
見返し	上質紙	70.5 kg
扉・序・例言・目次・本文	クリーム書籍用紙	57.5 kg
函版・抄録・奥付け	マットコート	70.5 kg

【印刷】

写真図版以外は電算写植によるオフセット印刷

印刷は黒

写真図版はモノトーン印刷

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第11集

赤岩遺跡 I

知地帯総合整備事業三美地区に於ける埋蔵文化財発掘調査I

- 発行 平成24(2012)年6月29日
著者 三輪孝幸 後藤俊一
編集 常陸大宮市教育委員会
茨城県常陸大宮市中富町3135-6
Tel. 0295-52-1111
陽日本産業史研究所
栃木県那須郡那珂川町小砂3112
Tel. 0287-93-0711(代)
- 発行 常陸大宮市教育委員会
茨城県常陸大宮市中富町3135-6
Tel. 0295-52-1111
- 印刷 下野印刷株式会社

